フルアーマー・クロスドレス

夢一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フルアーマー　・クロスドレス

【Ｎコード】
Ｎ１２１９Ｙ

【作者名】
夢一

【あらすじ】
どんなものでも装備できる最強の魔法『フルアーマー』を世界で唯一使えるのは世界を救った英雄を父さんにもつオレ、マモリだけ。その力で町を守っていたオレだけど、突然変なじいさんが現れて呪いをかけられちゃって…そしたら男の格好ができなくなったんだ！ひどすぎる！！
そんなわけで呪いをとくためにじいさんを捜す旅に出たんだけど、行くとこ行くとこ女の子扱い。しかも新しい武器を手に入れて装備しても、これがまたスク水だったりチャイナドレスだったりに変身

させられちゃうんだ。はぁ。
まあ、出会いがあったりとかそういうのは楽しいんだけどさ、やっぱり女装で会うのは恥ずかしいよ…。
早く呪いを解きたいって思ってるのに、なんか世界がどうとかそういう方向に流れていってるんだよな。
…という、男の娘冒険バトルファンタジーです。

英雄の息子マモリ（前書き）

男の娘主人公で本格的な冒険ファンタジーを書いてみたいと思って書いています。
結構長いので、しおり挟んだりしながら読んでくれたらいいかと思います。
読んでくれた方、感想・意見・評価などくれると、すごく嬉しいです。

英雄の息子マモリ

１５年前、世界は一度魔物に支配されかかった。
だが一人の男が命をかけてそれを阻止した。
男は最強の魔法『フルアーマー』を駆使し、邪神アスモデウスを倒した。
世界に平和がおとずれた。

そして現在…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＞小王国・スタートロイ＜

「きゃーー！！！」

きぬを裂くようなありきたりな悲鳴が小さな城下町に響く。

街中をいつものように歩いていたその女性は、突然空から現れた人でも動物でもない生き物に驚いたのだ。

「ババロンだ！」
「またか！最近多いな！」
「と、とにかくあの娘を助けないと！」
近くにいた大の大人たちがしどろもどろになりながら空から現れた存在を威嚇する。威嚇と言っても石を投げたり程度だが。

ババロンと呼ばれたそれは、さながらプテラノドンのような姿をしていた。
大の男より一回り大きく、槍のように尖った口と牙。翼には羽毛などはなく、薄い皮だけ。足には鋭い鍵爪。プテラノドンと違うのは、翼の他にも人間のような手が生えていることだ。

これが近頃スタートロイの街を騒がせてる魔物である。

「早くしないとあの娘が！」

魔物に立ち向かうのに躊躇する大の大人たち。
そこに…

「…まあ待ちなよ」

ピンク色セミロングの髪をなびかせ、余裕の笑みを見せながらいかにもケンカに弱そうな線の細い少年が男たちの前に出た。
はっきり言って少女にしか見えない。そんな少年が。
無地のTシャツにハーフパンツ。少年さながらのその格好でババロンを見据える。

「おお！マモリ！」
「マモリちゃん！」
「いいところに来てくれた！」
「いつものあれ頼むよ！」

「わかってるよ！…待っててよ、そこのお姉さん！」

言うなり少年は生身のままババロンに向かって駆けていった。

「フルアーマー・真空剣！！」

そう叫んだ、いや、唱えたマモリの姿は、一瞬緑色に輝いた。次の瞬間には胸元から肩にかけて贅沢な装飾のあしらわれた強そうな鎧。肩からはマント。

マモリは西洋の甲冑を豪華にしたよな鎧を身に纏ってさらに勢いを増してバビロンに突っ込んでいく。

そして、その手にはさっきまでなかったはずの大剣が握られていた。

どれもマモリという少女じみた少年には全く似つかわしくない装備である。

当然扱えるはずがない、動くことさえできないだろうと思ってしまうくらいの、大した装備だ。

「ギギッ！」

危険を察知したバビロンはすぐに女性を諦め飛び立った。

「逃がさないよ！次またいつ襲いに来るかわかないからな！」

マモリはその手の剣を大きく振り上げ…

「ハァーーー！！！」

振りおろした。

ビュゥゥゥン――――――――――

降り下ろされた剣から真空波が生じ、直線軌道でそのままババロンの体を真っ二つにしてしまった。

切断されたババロンの体はそのまま森の方へ落ちていく。

なんともむごいことだが、魔物は動物よりも強大で、平気で人間を襲う。やらなくてはやられてしまうのだ。後にその肉は森の動物や魔物によって食べられるのだろう。

「…ふう」

「おおおお！」

「やったー！さすがマモリ！」

「風の剣だ！かっこいい！！」

「いやぁ…最強の魔法フルアーマー、いつ見てもゾクゾクするな」

「あの変身っぷりもすごいけど、すごいのはやっぱりあの武器と鎧さ！」

「ああ！英雄ゼウが残した天下無双の武具だからな！」

「いやいや…それをああして自在に操るマモリが結局一番凄いんだって！」

当人のマモリを差し置いて勝手に盛り上がる一部始終を見ていた街人たち。マモリはそんな光景に慣れっこだった。

「マモリ…ありがとう。」

「え！？いや、いいよそんなの！」

お礼を言う女性に対して照れ隠しで答えるマモリ。見た目がどうであれ、心は思春期の少年。女性からそう言われてうれしいのは当たり前。

「それより怪我とかない？」
照れ隠しである。

「ええ、大丈夫よ。お陰様で。それより本当にすごい魔法ね。世界中のどんな装備でも使いこなせちゃうんでしょ？伝説の武器だって…」

「うん。ていっても父さんが魔法と一緒に残してくれたやつだけどね。」

「それでも十分よ。マモリは十分すぎるくらいこの街と私たちを守ってくれてるわ。」

「やめてよ！…照れる。」
照れが隠しきれなかった。
さっきまでの自信はどこにいったのか、真っ赤になるマモリ。

英雄ゼウ。つまりマモリの父の活躍により世界が魔物に支配される危機は去った。

だがまだ魔物は統制を失っただけで、人の驚異としては存在しつづけている。

マモリは父から授かった魔法『フルアーマー』の力で、微弱ながらもこの国を守っていたのだ。それは特に誰かに命令されたからでも、兵士にとして働いているからでもない。父の意志を継いでいるつもりでの行為なのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「やはりここじゃったか…フルアーマーの魔法…」

褒められ喜ぶマモリと、またそれを見て嬉しくなる街の人々。
そんな光景を上空から見届け、不適に笑う影があることに、まだ誰も気付いていなかった。

そしてこのあと、マモリの男として人生を変えてしまうようなことが起きてしまうことも。
誰も気づかなかった。

英雄の息子マモリ（後書き）

とりあえず1話でした。どうでしたでしょうか。
といっても、まだ女装もしてないし、大した敵も出てきてないじゃんって感じですよね。
まあそれもすぐに出てくるので、気長に読んでみて下さい。

フルアーマー

＜スタートロイ…町はずれ＞

「ただいまー」

マモリは昼間の騒動を終えて町はずれの家に帰ってきた。
とたんにドタドタと騒がしい音が鳴り始める。

「おっかえりマモリーーーー！！」

マモリと同じピンク色の長い髪の女性がに勢いよく抱きついてきた。

「ちょっ、くっつかないでよ母さん！」
「えぇ！なんでよー。こんなに可愛い息子が帰ってきたらまずハグしてあげなくっちゃ！」
「もうオレ１６だよ？恥ずかしいって…」
「いいじゃん！誰も見てないんだから。キスもしてあげようか？」
「絶対やめて！」

彼女はマモリの母、アイリ。
英雄ゼウが死んだ後もマモリを女手一つで育ててきたアイリは、マモリのことを誰よりも可愛がり、愛していた。
アイリとマモリはスタートロイの城下町から少し離れた丘の上に住んでいるのだ。

「聞いたわよ？また魔物を倒して街の人助けたんだって？」
「はやっ！ついさっきの話なんだけど…」

「母さんにはなんでもわかるのよん。」
アイリはとても１６歳の子がいるとは思えないと、街の人からもよく言われている。
だが実はもう３０を過ぎているのだが、見た目は２０代後半、性格は２０代前半といった感じだった。

「…まさか…オレのこと盗撮するような魔法使ってないだろうな…？」
「…それいいわね。」
「おい！」
「うそうそ。そんな魔法知らないから。」

アイリは魔法使いとしても有能な方で、マモリに魔力の操作などを教えたのも彼女だった。

「でもフルアーマーの魔法、だいぶ使えるようになってきたわね。」
「まあね。まあ父さんのくれた装備がすごいだけだけど。」
「それでも魔法自体をコントロールしないと、装備召喚もできないんだからね？」
「わかってるよ。だからまだ呼び出せない装備もたくさんあるんだ。」

『フルアーマー』の魔法は、亜空間にしまってある武器や防具を一瞬のうちに呼び出して装備することのできる魔法である。装備召喚には魔力が必要だが、一度装備してしまえばどんな代物でも自在に操ることができる。
強力な魔法剣や特殊なもの…伝説といわれるものでも操れてしまうのが、この魔法が最強といわれる所以だった。
そしてこの魔法が使えるのも世界中でマモリだけなのだ。

「それに気をつけなさいよ?あなたの持ってる武器や防具を狙ってる悪い奴だってたくさんいるんだから。」
「大丈夫だよ。そういう武器ヲタなやつらに強いのはいないからね。」
「なんでそんなこと言い切れるのよ…」
マモリとアイリはそのまま家の奥に入り、アイリは夕飯の用意を始めた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜スタートロイ…城下町…上空＞

「ふむ…あの少年を追うのは簡単じゃが、それでは少し芸がないのぅ…」
先ほどマモリを空から見ていた黒いローブの老人は考えていた。
そこに1匹のババロンが飛んできた。近隣の森にはババロンが多数生息しており、スタートロイの人々の脅威となっている。

「下等手族か…まあこいつでもいいわい。」
そういいながら老人は右手をババロンの前に突き出した。するとババロンの体はまるで後ろから引っ張られるようになり動きが止まる。
今度は左手を森の方向に向け、何かを引っ張るようにして自分の胸元にゆっくり引きよせた。
直後、森が大きなざわめきに包まれ、たくさんのババロンが上空に飛び出した。そのままたくさんのババロンは老人の眼の前のババロンの元に飛んでくる。

いや、飛んできたのではなく引き寄せられてきたのだった。

「…魔獣合成…」

老人の眼の前でババロンたちは歪に混じり合い、大きくなる。
そこから粘土のように手足、翼、頭が現れる。

「ギギァァァァァ！！！」

ビルのように大きな姿になったババロンは、そのまま城下町に降りて行った。

巨大ババロン

＜スタートロイ…マモリの家＞

「…母さん、今何か凄い音しなかった？」
「ん～…ドラゴンでも暴れてるんじゃないの？」
アイリは夕飯の用意をしながらマモリを適当にあしらった。

「この辺にドラゴンはいないだろ…」
マモリは腑に落ちないと感じつつも、とりあえず気にしないようにした。

「それよりマモリ～、ちょっと卵買ってきてよ！」
手がはなせないからと言うようにマモリに頼む。ずっと2人暮らしをしているため、こういう時のお使いくらいはマモリにとって当たり前だった。

「わかった。ちょっと待ってて！」
マモリはそういいながらパッと準備して家を出た。

「……うわぁぁ！！！」
突然大きな声をあげるマモリにアイリも駆けつける。
「マモリ！どうしたの！？」

そこには見たことない大きさのババロンの姿があり、今にも街を襲わんとしていた。

「何あれ！？」
「ババロンだよ！あんな大きさ…見たことないけど…。オレ行って

くる！」
信じられない巨大さのババロンに驚きつつも、マモリは急いで街の方に走った。

「マモリ！母さんも行くわ！」
異常事態だと確信したのか、アイリもマモリを追って街に向かった。

「母さん…危ないから家にいなよ！」
「何言ってるの？私だって魔法使いとしては有能な方なのよ！」
「知ってるけど…！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜スタートロイ…城下町＞

突如として現れた巨大ババロンにより、街はパニックになっていた。
王国兵士を筆頭に戦える者は前に出て巨大ババロンを攻撃している。巨大ババロンも大きな傷はつかないものの、動きづらいようだ。

「なんて大きさだ…」
「怯むな！足を狙え！」
「戦えない者は早く城の中に！」
「魔法が使える者は動きを止めてくれ～！」

小王国スタートロイは、近隣そう強い魔物もおらず、貴重な資源もない小さな国だった。それゆえ戦争などに巻き込まれることもなく、長年平和を維持していた。
だからこのような大型の魔物など相手は不慣れなのだ。

上空からその様子を見る黒ローブの老人。
「ふぇふぇふぇ…町が危ないぞ…フルアーマーの少年よ…早く助けにこんか……そしてまたあの魔法を見せてくれ。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜スタートロイ城＞

「ええい！どうにかならんのか！？」
そう吠えているのはこの小王国を統治する痩せた体に髭をはやした男、スタートロイ王だ。

「国民のほとんどは場内に避難しました。ですがあの魔物自体はどうしようも…」
「この国の戦力はあのような大型の魔物に対応していませんから…」

「言われんでもわかっておるわ！…それでもどうにかせんと国が滅ぶだろう！」

「しかし…」
「…あのフルアーマーの少年…マモリが来れば…！」
常に王のそばで知恵を貸しているはずの大臣も今回は弱気だった。
マモリはこの国で最も強い力をもっている。そのため国の人間はどうしてもマモリを頼りにしてしまう。

「バカ者！一人の少年に頼るな！ここはおまえたちの国でもあるんだぞ！！？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜スタートロイ…城下町＞

マモリたちが巨大ババロンの足元についたとき、兵士や街の人たちは傷だらけになりながら城に逃げて行くところだった。

「母さん！オレは空から一気にやるから足元で注意を引いて！」

「わかったわ」

巨大ババロンも2人の存在に気付いたようで、その大きな翼を羽ばたかせ、地面を蹴った。

強い突風が起き、2人はよろける。

「く…フルアーマー・滅竜剣！」

マモリが呪文を唱えると、今度は黄色に輝き、先刻の鎧とは別の鎧を身につけた。

全身に爪のような装飾、紫に輝くその鎧はどんな衝撃にも耐えれそうだ。一番の特徴は、ドラゴンのような翼がついていたことだった。剣は巨大なのこぎりのような形をしている。

マモリはその背中の翼で空に向かう巨大ババロンを追いかけた。

巨大ババロンは追ってくるマモリを迎撃しようと、手を大きく振り下ろす。

それをぎりぎりのところでかわすマモリ。

「アローレイ！！…マモリ！気をつけて！」

アイリは自分の息子に攻撃が当たらないように魔法の矢を打った。

光の矢がまっすぐ空中の巨大ババロンに向かっていく。

アイリのの打った矢は見事に巨大ババロンの目をとらえた。

「ギァァ！」

巨大ババロンは体制を崩して高度を下げた。
そのままマモリはその巨体を抜き去り、頭の上で剣を構える。

「ハァァァァ！」

マモリは剣を構えたまま急降下し、巨大ババロンの首を切り落とした。

呪われたマモリ

＜暗い部屋＞

スタートロイから数百キロの地点。とある場所のとある部屋。
部屋を暗くし、ベッドの中で話す怪しい男女。

「あのジジイ、大丈夫かしら？」
「心配ないさ。ああ見えても呪術師としては一流だし、頭もきれる。ただ心配なのは…変態だってことだ。」
「ふふ、アレス様だって…変態ですものね。」

？燭の灯に照らされて、２人は唇を合わせる。

「あの力…フルアーマーだけは…放っておけんからな…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜スタートロイ…城下町＞

首を切られた巨大ババロンは、地面に落ちるかと思ったら黒い泡のようになって消えていった。

「これは…作られた命だったのね…」
アイリはこの魔法について知っているようだ。

「母さん、知ってるの？」
「ええ、これは黒魔法よ。きっとこのあたりのババロン全てを合成

させたんだと思う…。」
「そんな…誰がそんなことを!!?」

「は～可愛い顔してすごい力を持っているのぅ…」
2人の会話に割って入ってきたのは逃げ遅れた様子のおじいさんだった。

「な!大丈夫ですか!?」
怪我をしているらしく、動けないようだったので、マモリが急いで駆けつけると…
母アイリが声を上げる。

「マモリ!待って!!」

「え?」
母の声を聞いたときマモリはその老人に肩を貸そうとするところだった。

「ほほほ、ありがとう。お嬢ちゃん。」
マモリのことをお嬢ちゃんと呼んだその老人は、マモリの腕をつかみブツブツと聞こえない声で何かを囁きだす。
「おじいちゃん…オレ男なんだけど…」

「マモリ!離れてっ!!」

…ドクン!!

心臓が跳ね上がるような感覚をマモリは感じた。
そう感じた瞬間、マモリの来ていた服が全て弾けとび、マモリは全裸になってしまった。

「…え？」

訳がわからず、あっけにとられるマモリ。

老人はあっけにとられるマモリを置き去りにし、平然と立ち上がる。どこからか杖を取り出し、杖の上にスケートボードのように乗って宙に浮いた。

「うまくいったわい。呪いは直接体に触れなければかけられんからのぅ…。」

さっきまでの弱々しい雰囲気とはまるで別人だった。楽しそうに、また不気味に喋る。

「呪い…？」

「そうじゃ…フルアーマーの魔導師よ。貴様の中に眠るゼウの武具。それらを全て使えなくする呪いじゃよ。」

「え…？」

マモリは信じられないことを言われ、理解するのに時間がかかっていた。

マモリにとってフルアーマーの魔法とその武器や防具は父の形見でもあったため、その衝撃は大きかった。

「貴様は気づいていたみたいだな。女よ…」

老人はカイリの方に意識を向け、細い目をさらに細める。

「…今この街でマモリの存在や魔法を知らない人はいないのよ。それにあなたからはまだ魔力が感じられるわ。さっきの巨大ババロンもあなたの仕業ね？」

アイリは最初から違和感を感じていながらも、息子のマモリをみすみす老人に近づけてしまった悔しさにいらだっていた。

「その通りじゃよ。まああれはフルアーマーの力を見るための余興にすぎん。」

「余興？あんなことしておいて…よくもそんな！」

「ふふ…今はそんなこと言ってる場合かのぅ？」

そう言われてアイリははっとしたようにマモリのもとに駆け寄る。

「…マモリ？」

「フルアーマー・真空剣！」

その呪文でマモリは一瞬緑色に輝く。しかし輝きがおさまってもマモリは全裸のままだった。

「フルアーマー・滅龍剣！」

さっきと同様体は光る。しかし鎧を装備することはできなかった。

「フルアーマー・破邪の槍！」

魔除けの武器を召喚しようとしても結果は同じ。

「…そんな…」

茫然とするマモリ。

「…どういうこと！？フルアーマーはあの人がマモリに与えた絶対魔法のはずよ。呪いなんかでどうにかなるわけがないわ！！」

アイリも信じられないというように、またマモリの気持ちを代弁するように、老人を問いただす。

「わしの呪術をもってすれば、いくら英雄ゼウの魔法であろうと呪える…と言いたいところじゃが、それは無理じゃ。なのでその少年自身を呪わせてもらった。」

「マモリを…？どういうこと！！？」

「ふふふ…それはの……男物を装備できなくなる呪いじゃよ。今あのフルアーマーで呼び出せる強力な武具のすべては英雄ゼウのものであろう？ゼウは男…しからばその装備は全て男物ということになるであろう？」

老人の言葉はまるで変質者のようで、不気味な笑いが混ざっていた。

その言葉にあっけにとられるアイリ。

「…なにそれ？じゃあマモリは男の子の服が着れなくなっちゃったの！？」

それは間違いなく、わが子のかつてないピンチだった。

「そういうことじゃ。」

「そんな…変態か！」

さっきまで全裸で呆然としていたはずのマモリが大きな声をあげる。

悔しさよりもありえなさに対するつっこみのようだった。

「変態じゃ。」

「返せよ！魔法も装備も全部父さんの形見なんだぞ！？」

後から悔しさが増してきたのか、涙目になっている。

「別に奪ったわけではないぞ。魔法も装備もお主の中に残っておるからのぅ。」

「う…じゃあこれから一生…冬でも全裸で過ごせっていうのかよ！！？」

「わしも鬼じゃないからのぅ…そうならずに取り計らってやったんじゃ。」

「…は？」

それがどういう意味かもわかっていながら、信じたくないという気持ちで問い詰めてしまう。

「女子の物なら着れるということじゃ。…これからは少女として生きていくがよい。フルアーマー…ゼウの子よ」

突きつけられた現実に、マモリはショックを隠しきれなかった。

「それでは失礼するぞ。目的は果たしたからの…」
「待て！！」

そう言って老人は杖に乗ったまま空高くまで上昇して行った。マモリの声に反応することなく、すでに次の仕事を頭に思い浮かべているようだった。

「…マモリ…」
自分の息子の将来について真剣に対策を考えながら、アイリはマモリに声をかけた。
しかしマモリは気が抜けたようにうつむいて立ち尽くしたままだ。

「…ふう……まあいいじゃない！男の子の服が着れなくなっただけでしょ？だったら女の子の服着て過ごせばいいのよ！…母さんはいいわよ。ていうかマモリは可愛いから、前から女の子の服を着せたいなって思ってたのよ。これからは娘として…ね？」

気楽な性分の母はすでに楽しみになっているようだった。その想いとマモリを慰めたい想いがごっちゃになっている。

「…親としてそれでいいの…？」
母の変わり身の早さにあっけにとられるマモリ。
どうしようもないので、近くにあった布切れを体に巻きつけてアイリと一緒に城に向かう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜スタートロイ城＞

巨大ババロンに襲われ多くの人が怪我をし、国民全員が城の中に集まっていた。
だがもともと結束の強い国で、傷ついた人たちの手当ても早く、すでに活力を取り戻していた。

城内では大臣たちが各所に指示し、壊れた家の建て直しや今後の対策など迅速な動きを見せている。

マモリも巻きつけた布を揺らせながらアイリと一緒に城の門をくぐった。
そこで待っていたのは、国の王子と数人の兵士だった。

「あら、ジード王子！」
アイリが王子に挨拶をする。とても王族と一般人とは思えないラフな挨拶で。そういうラフさがまかり通るのも、この国の良さだった。

ジード王子はスタートロイ唯一の王家の跡取り。
現在は２５歳で国のために早く結婚相手を見つけろと父にうるさく言われている。

「お怪我はありませんか？」
「ええ…大丈夫よん。」

ジードは隣のみすぼらしい少女のような少年の顔を見て、それがマモリだと気づく。
「マ！マモリ！どうしたんだ、その格好は…！？」

ジードとマモリは小さいからよく一緒に遊ぶ兄弟のような関係だった。

というのも、英雄の家族としてマモリとアイリはよく城に招待されることが多かったからだ。いつも鎧姿で活躍するマモリをよく知っているため、布切れ1枚のマモリの姿には驚いた。

「ああ…後で話すよ。それより街の人は？」

「それなら大したことはない。死人も出ていないしな。おまえのおかげだ。」

「それはよかったわ。ところでジード王子…国王様にお目通り願える？」

アイリは相変わらずの笑顔で国王への面会を要求する。とてもさっきまで大型の魔物と戦っていたとは思えない。

「それはかまいませんが…」

「ちょ、母さん！」

「マモリもずっとそんな格好じゃいられないでしょ？」

そう言ってアイリは一国の王子を早くといわんばかりに引っ張って行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜国王の間＞

スタートロイ王は難しい顔をして窓からさっきまで巨大ババロンが暴れていた場所を見つめている。

「…この国も…もっと…」

物思いにふけるのを遮るように、勢いよく扉が開く。

「失礼します、父上！アイリ・マモリの両名をお連れしました。」
「…入りたまえ。」

3人が室内に入る。もちろんマモリは布切れを巻きつけたまま。

「…マモリ…また国を守ってもらったな。…いつもすまない…兵士でもないお前に…」
王という立場も気にせず、スタートロイ王は少年に頭を下げる。

「いいよそんなの…それより…」
言いかけてマモリは言葉を詰まらせた。顔も真っ赤になっている。
それを見たジードが心配そうに顔を伺う。

「…どうしたのだ？…その格好…」

続きを話し出したのはアイリだった。最もアイリもそのつもりで王様の前に来たのだが。
「実はうちのマモリなんですけどね？ちょっと呪いにかけられてしまったんです。」
と、それほど深刻なことでもないような言い方でぶっちゃけるアイリ。

「なんと！」
「呪い！？」

「まあ一応報告しておきますと、さっきのババロンは呪術師の仕業だったんですよ。黒魔法でこの近辺のババロンを合成させたものだったようです。」

「ということは、その呪術師がマモリを?その呪術師は?」

「逃げられました。でももう来ないと思いますよ。目的は果たしたって言っていたし…まあその目的がマモリを呪うことだったみたいですけど。」

国王もジードも、事態を想像しながらアイリの報告を真剣に聞いていた。

マモリは相変わらず赤くなったままだ。

「まあ…ご想像通りだと思いますが、フルアーマーの魔法を狙ってたみたいなんですよね。」

「…うぅむ、だがあの魔法は取り出すことも呪うこともできないはずの絶対魔法だろう?」

「ええ、だから呪われたのはマモリ自身なんです。…その…男の子の服が着れない呪いをかけられちゃって!」

マモリは耳まで真っ赤になった。

「なんと…それでゼウの鎧を装着できなくなったということか…」

「そうなんです。まあそういうわけなんで、国王様にはマモリの服を用意してもらいたくって。女の子の服を。」

「えぇ!?母さん!!」

まさかここでというように、マモリは声を上げた。

「だってしょうがないでしょう?このままずっと布だけで生きていくの?」

「それは…」

「マモリ…」
ジードは複雑だった。ジードは以前からマモリの可愛さに想うところがあったからだ。
マモリのピンク色の髪、白い肌、重厚な鎧を着こなすのが信じられないほどの細い体。それはその辺の街娘よりもずっと可愛らしいのではと思い続けていたのだった。
もっとも、そう思っているのは、ジード以外にも何人もいるわけだが。

「わかった。では２０着ほど服を用意させよう。下着もな。」
「（下着っ！！？）」
「ありがとうございます。」

「…ちょっと待ってください！」
特に動揺もなく事態を飲み込んでしまったどころか、下着まで用意すると言う国王の発言に焦り、マモリも打って出る。
マモリはもともと一生布だけで生きていくつもりも、一生女の子の格好で生きていくつもりもなかった。

「どうしたの、マモリ？やっぱり女の子の服は嫌…？」
「そうじゃなくて…ってそりゃ嫌だし恥ずかしいけど…そういうことじゃなくて…」
「？…じゃあ何？」
「この呪いを解くとか…そういう方向性はないのかよ！？」
マモリはなぜみんなあっさり受け入れるのかずっと疑問だったため、ついにその問いを投げかけたのだった。

「それは難しいわね。呪いっていうのはね、術者にもリスクがかかる危険なものなの。その分強力な魔力が込められていてね。呪いをかけた本人にしか解けないようになってるのよ。」

「そんな…」
まあなんとなくそんな気はしていたマモリだが、今は小さな希望が打ち砕かれた思いだった。

「ま、諦めて娘になっちゃいなさいよ。母さん、マモリなら絶世の美女になると思うけどな。」
ジードが内心で激しく同意する。

「やめてくれよ！…だったら…あのじいさんを探す！」
もうマモリに残された道はそれしかなかった。マモリにとって女の子としての生活なんてありえない。

「何言ってるのよ…どこに行ったかもわからないでしょ？」
「そうだけど…このままなんて嫌だよ！それにあのじいさんが飛んでいった方向はちゃんと見てたんだから！」
アイリは自分の息子を娘にすることにためらいがない様子だが、マモリも引くわけにはいかない。

「それはだめだ！マモリはこの国にいないと！！」
そう言ったのはジードだった。

「なんでだよ。オレが強い力を持ってるからか？でももうそれが使えなくなったんだぞ！？」
ジードはもちろんそういうつもりで言ったのではなかったのだが、マモリにはその気持ちが伝わるはずがない。

初めての女装

マモリの強い要求に、一同は戸惑っていた。
その理由はマモリと離れたくない、危険にさらしたくない、この国を守ってほしいという想いの他にもあったからだ。

アイリと国王の目が交差する。
そしてアイリはため息をつき、マモリの方に向きなおった。

「やっぱり…どうしようもない運命なのかもね…マモリ。」
「は？」
まるでこうなることがわかっていたように、アイリはマモリに微笑みかけた。

「国王様…この子とお別れの時が来たみたいです。」
いつになく真剣な表情になるアイリ。

「…そのようだな…。国としても、これ以上マモリに負担をかけまいと体勢を整えていたところだ。…いい時期かもしれんな。」
国王も同様に真剣な表情でマモリを見つめる。

「私も…用意はできています。」

「おいジード、この2人…何の話をしてるんだ…？」
勝手に話を勧める母親と国王についていけず、ジードに助けを求める。
だがジードにも訳がわからない会話だった。

「さぁ…それよりマモリ！まさかこの国を出るつもりじゃないだろ

うな!!?」
「あのじいさんがもっと遠いところに行ったんだ。オレも行くよ。オレ、ずっと女の格好なんて嫌だもん。」
「…マモリ…」
マモリが遠くに行ってしまう。それだけはマモリの言葉からも国王たちの会話からも理解できた。

ジードの言葉を遮ったのは国王だった。
「誰か!宝物庫の奥のあれを持って参れ!」

続いてアイリも、穏やかな顔でマモリの前に立つ。
「マモリ…これでフルアーマーの魔法を使いなさい。」
そういってアイリは左手に魔力をこめ、空間に小さな穴を作る。
その中に右手をいれ、開いた空間から一本の剣を取り出した。

「これは守護の剣…聖剣イージス。お父さんが私とあなたを守るようにくれた剣よ。」
「父さんが…?」
「さあ…この剣でフルアーマーの魔法を使いなさい。」
「…でも…フルアーマーは…」

そう言われてアイリはマモリが父の装備しか使ったことがないのを思いだした。
「大丈夫よ。フルアーマーの武器と防具はセットなの。知ってるでしょ?新しい武器を手にしてフルアーマーを使えば、その武器に合った服や鎧が精製されるわ。」

「そう…だったんだ。」

「マモリは今男の服が着れない呪いにかかってるから、精製される

のは女の子の服だと思うけどね。」
アイリはまたいつもの笑顔で、でも少し淋しそうに言う。

「…てことは、これでフルアーマー使ったらどんな格好になるかわからないってことか…。恥ずかしいのや、変なのになったら嫌だな…」
フルアーマーの知らなかった機能は理解して、こんどは不安が大きくなる。

「大丈夫よ!ずっと母さんが持ってた剣なんだら。きっと凄く可愛い衣装が出きるわよ!」
もはや鎧ではなく衣装と言い出す母。
「マモリ、母さんの愛と…父さんの魔法を信じなさい」
マモリの両肩をポンと叩き、今までにないくらいの笑顔を見せる。

「……わかった。」
そう言ってマモリは魔力を手の内にある聖剣イージスに込め始める。腹をくくったようだ。

「フルアーマー……イージス!!」

マモリの体が七色に輝き出し、纏っていた布切れが宙を舞い、マモリの体が新しい素材に包まれていく。
やがてマモリから発せられていた光が消えていく。

光りが消え、そこに立っていたのは紛れもなく美少女だった。
肩と胸には鎧と言える金属アーマーがついているが、丸みを帯びて可愛らしいデザイン。
その下ではスクール水着のような藍色の布が腰のくびれを強調している。

淡いスカイブルーのスカートはプリーツ状になっており、太ももの半分の位置で布がなくなっていた。
さらに下には黒のニーソックス。その絶対領域はマモリが男とわかっていても、ドキドキさせるのに十分だった。

一瞬その場が沈黙する。

「え…？…ぅわ！！」
マモリは下を見て自分の格好を見てとても恥ずかしくなり、母や国王に背を向けてしゃがみこんだ。

ミニスカートなどはいたこともないのだから、普通にしゃがめばスカートの中が見えてしまうことなどわかるはずもない。

運悪くその先にはジードが立っていた。

「！！！！」
スカートの中を確認するジード。白い生地にレースをあしらった可愛らしいショーツ。
そして女の子にはあるはずのない膨らみ。

ジードは溢れ出そうになる鼻血を理性で止める。さすがは一国の跡取り。

「か…か…かか…！」
マモリは後ろの声に一瞬肝が冷えた。

「カワイーーー！！マモリーー！！」
案の定ハイテンションになった母親が抱きついてくる。

「マモリすごく可愛いわよ！あぁ…さすが母さんの娘だわ！」
「娘じゃないから！」
「ねぇ！下着はどうなってるの？どんないやらしい下着はいてるのよ！」
「人前でそういうこと聞く！？それでも親か！」

アイリは楽しくてしょうがない。

「それに自分でも見てないんだからわからないよ…」
「じゃあスカート捲って見てみなさいよ！」
「できるかぁ！！！」

一人スカートの中知っているジードは、何とも言えない優越感に浸っていた。

「オホン」
国王の咳払いで、アイリも我に返り、また真剣な表情に戻る。

すると、扉が開き、大臣が一人入ってくる。

「陛下、あれをお持ちしました。」

「あれ？」

父の遺品

大臣が持ってきたのは小さな箱だった。中心に大きな宝石が埋め込まれており、そこから四方に溝が掘られている。。

「うむ。それをマモリに。」

大臣はマモリの姿に少し驚いたようだったが、その件には触れず、静かにマモリに箱を渡した。

マモリはその箱を持った瞬間、不思議な感覚にとらわれる。
まるでこの中に引きずり困れるような。
でも怖くはない、優しさに満ちた。
この箱を手にするのをずっと待っていたみたいだった。

「マモリ…その箱に魔力を込めて、フルアーマーを唱えなさい。それの名前は…ガメイラよ。」

「ガメイラ…」
マモリはこんな箱でフルアーマーが使えるのかと疑問に思いながら、魔力をこめる。
すると箱の中央の宝石が光だす。
マモリはさっきの感覚を思い出し、フルアーマーを唱えた。

「うん…フルアーマー・ガメイラ!」

箱の宝石がより強く光だし、その光が四方の溝に走る。
箱全体が光、蓋の部分が宝石と一緒に消えていく。
と思ったら勢いよく中から何か飛び出し、マモリの首に巻きつい

た。
その物体は少しずつ形を整えていき、ペンダントの形になってマモリの胸元に落ち着いた。

「…これは？」
「それは人格魔導具、ガメイラ。これからあなたを助けてくれるわ。」
「人格…魔導具…？」
「ええ、今はまだ眠っているみたいだけど、じきに目を覚ますわ。」
「目を覚ま…え…？」

その様子を見て安心したように国王も口を開く。

「それはお主の父が戦いに行くとき、私に預けて行った物だ。もしもマモリがこの国を出て行くことがあれば、渡してほしいと。」

聖剣イージスに続き、またしても父の遺品。マモリは胸元のペンダントを見つめ、さっきの感覚は父の魔力が残っていたのだと思った。

「それで…これってどういう物なの？」
「ガメイラが目を覚ました時に、きっと教えてくれるわ。ただ一つだけ言っておくと…そのガメイラは知識と記憶の塊のようなもの。」
そういった母の目には少し涙が溜まっていた。それが珍しかったのか、マモリはどうしていいかわからず、黙ってしまう。

「マモリよ…すぐに行くのか？」
国王の言葉ではっとする。

「え？ああ…そのつもりだよ？じゃないと追い付けないかもしれな

いから。」

「な！本気か、マモリ！？外は危険が…」

「ジード！！！」

慌てる王子様を国王が静止する。

「お前の気持ちもわかる。だがこれも運命なのだ。」

そんな大袈裟な…。

マモリはそう思いながらも回りの事の運びに圧倒されてつっこめなかった。

マモリは軽くあの老人を捕まえて、呪いをといてすぐ帰るつもりなのだから当然である。

今度は侍女がきらびやかなドレス等、たくさんの服を持って来た。

「持って行くがよい。フルアーマーの魔空間に入れておけばいくらでも持っていけるのだろう？」

「え！…いらないよ！すぐに戻って来るんだし…」

「まあいいじゃない。もらっておきなさいよ、マモリ！もし本当に要らなくなったら私が貰うから。」

そう言ってアイリは勝手に服を受け取った。

「…わかったよ。」

マモリも仕方なくフルアーマーの魔空間を開き、その中に服を入れていく。

旅立ち

スタートロイは小さな国。そのため外交を含めてよく国の外に出ることもあった。小さな村や街もある。マモリたちも例外ではない。だからマモリはいつものようにお使いに行って帰って来るつもりだけのつもりだった。

「まあ…色々もらっちゃったけど、呪い解いたら…すぐ帰ってくるから！」

「…そうね…待ってるわ、マモリ。」

アイリはまた泣きそうになっていた。

「気をつけてな。」

「マモリ！…私がついてってやろうか？」

ジードは以前からマモリのことを意識していたが、今のマモリを見て一層離れるのが不安になっていた。

「なんでだよ。すぐ帰ってくるからジードは残って嫁さん探せって！」

「ぐっ！」

「そうだぞジード。明日には同盟国のメザーレイアから姫君が訪れる。お前がおらんでどうする。」

「…わかった。マモリ、すぐに帰ってこいよ！」

ジードはしぶしぶマモリの出発を了承した。

「じゃあ母さん、オレやっぱり娘になる気もないし、父さんの武器

もっと使えるようになりたいから…行ってくるよ！」

「ええ…行ってらっしゃい。マモリ…」

こうしてマモリは部屋を、城を、そして国を後にした。
持てるだけの食糧と、ある程度のお金を持って。

慣れないスカートのまま。

たった一人で…。

「…予言が、当たってしまいましたな。」
「はい、まさかこんな形で…こんなに急に…」
さっきまで堪えていた涙を流し、城の窓から娘の姿をした息子を見送るアイリ。

「新しい英雄の誕生となれば良いが…」
「きっと…あの子なら大丈夫です。どんな困難も乗り越えますよ。
…彼女がついているし、何より…あの人の息子だから…」

旅立ち（後書き）

第1章読んで下さってありがとうございました。
主人公のマモリはまだ旅に出たばかりですが、これからもいろんな格好させられたらいいなと思っています。
いろいろと参考にしたいので、一言二言でも感想を書いていって頂けると嬉しいので、よろしくお願いします。

1章　人物紹介と装備設定

ここでは1章に登場した人物で2章のネタばれにならない程度のことを紹介していきます。
挿絵があったりするのでイメージが壊れるという人はスルーした方がいいかもしれません。

大丈夫な人は下にスクロールー！

＜登場人物＞

・マモリ

＞ｉ３７７５６―４３２０＜

※２章以降の普段着

１６歳／♂／

英雄ゼウの息子。ゼウから受け継いだフルアーマーの魔法を使って町を守っていたが、突然謎の老人に呪いをかけられ男物の服が着れなくなる。同時にゼウから受け継いだ装備も全て装備不能になった。

しかたなく女の子の格好で呪いを解く旅に出発。

性格は思春期のしゃいな少年そのもの。恥ずかしがり屋で、わりと熱くなりやすい。というかムキになりやすい。もともと母の手によって可愛らしく育てられたが、あまり女扱いされるのは好きじゃない。むしろ尊敬する人物は父なので、父のように男らしくなりたいと思っている。

戦い方

魔法『フルアーマー』

どんな武器でも装備して使いこなすことができる最強の魔法。いろんな武器を切り替えて瞬時に装備することにより、いろんな戦い方ができる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・アイリ

＞ｉ３７７９５―４３２０＜

３３歳／♀

マモリの実の母親。見た目は多く見積もっても２０代後半。髪はマモリと同じピンク色でロング。マモリが美人な大人になったらきっとこんな感じなのだろうな。
性格は明るく、それこそ女子高生のようなノリ。自分の息子を愛しすぎる。いっそ女の子として育てようかくらいに思っている。
魔法の腕は確かなもので、亡きゼウに代わってマモリの育成だけでなく、魔力のコントロールもずいぶんしごいてきた。

戦い方
魔法（光）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
・ジード

１９歳／♂
スタートロイの王位継承者。マモリとは兄弟のように育つ。というのも、英雄である父を亡くしたマモリは、よく城に招かれて母ともども王族にお世話になっていたから。
弟のように思っていたマモリがどんどん可愛く育っていく様に、ドキドキしている。そろそろ後継ぎのために嫁を探さなければならないが、それをなんとかマモリにしたいと思っている親不孝者。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
・国王様

中年／♂
小さな国だろうと民を重んじる心は立派な王様。息子に厳しい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
・謎の老人

？？？／♂
フルアーマーの魔法を封じるためにマモリを探していた老人。
そしてマモリに「男物の服を着れなくする」呪いをかけた変態な呪術師。
今のところその目的も不明。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜マモリの装備＞

・イージス

＞ｉ３７８１９―４３２０＜

守護の剣イージス。
マモリの父ゼウが、妻であるアイリに自分と息子を守れるようにという願いを込めて渡した剣。
柄の宝玉から光（？）の盾が出る、防御に優れた剣。

装備するとスクール水着に甲冑とミニスカートを加えたような格好になる。
そして絶対領域。

剣の画像は準備中。

1章　人物紹介と装備設定（後書き）

他の章の紹介も随時行っていきます。1月には。

ガメイラ

＜カウロイ村＞

スタートロイ王国から少し離れた小さな村。国が統治する、農業や家畜の飼育が盛んな村だ。

マモリも作物を買いに、母のアイリと何度か来ていたため、よく知っている村だ。

最近では山賊がよく食料を奪いに来るため、スタートロイの兵士が常駐している。

老人はこの村の方向に来たのを見ていたマモリは、ここで情報を得ようと立ち寄ったのだった。

「あのじいさん、ここにいてくれたらいいんだけどな…。いなくても誰か見たっていた人がいたらいいんだけど…」

「あれ？マモリ君でねか！」

「（ギク！）」

小太りのおじさんがマモリに声をかけた。マモリがカウロイ村に来るたびに、野菜を分けてもらったりとお世話になってるおじさんだった。

だが女装しているため、あまり知ってる人には会いたくないマモリだった。

「どした、そんなめんこい格好して。マモリ君は女の子だったかいな？」

陽気に笑いながらマモリに近づくおじさん。

いつもならその陽気な笑いにとても癒されるのだが、今回は事情が違っていた。

「…どうもおじさん。いつもお世話になっています。」

マモリは苦笑いでその笑顔に応え、挨拶する。

「この格好は…まあいろいろ事情があって…あんまり触れないでください。」

顔を真っ赤にするマモリ。説明するにもなんと言っていいかわからない。男の格好ができなくなったなんてバカバカしい気もして言うに言えなかった。

「わはは。そんな下ばっかり向いてっと、お天とさんに怒られるぞ！似合ってんだから堂々としろ！」

おじさんの言葉に少し安心したマモリは、老人のことを聞いてみることにした。

「おじさん、今日は別の用事で来たんです。昨日杖に乗った黒いローブのおじいさん、この村に来ませんでしたか？」

「ローブのおじいさん？ああ……どうだったかなあ…わからねえや。」

「そ、そうですか…」

別にとぼけている様子もなく、すっとんきょうな返事をするおじさんだった。

その時…

ドガァァァン！！！

何か硬い物を壊すような大きな音に驚くマモリとおじさん。

その直後にガラの悪そうな大きな声が響き渡る。

「オラオラオラー！さっさと食料を出しやがれ！ここの食いものは山賊・バーバリ団のものだろうが！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

マモリとおじさんはすぐにその場に駆け付けた。

そこにはさっき声を上げたリーダー格の長髪の男と数人の乱暴そうな男たちが、村の物を壊してまわっていた。

「おじさん…こいつらは！！？」

「…この辺を荒らしている山賊だ…」

「でも城の兵士がいるはずじゃ…そのおかげで山賊はいなくなったって聞いてたのに！」

「…ああ、なんでも昨日、大きな怪獣が街を壊したらしくってな…その復旧で城に戻ってんだ…！」

「あっ！（…あの巨大ババロンのせいだ…！）」

マモリは兵士不在の訳を知り、それをどこかで聞いたこの山賊たちが戻ってきたんだとわかった。

「…ん？なんだかやけに可愛い娘がいるじゃねえか！あいつは俺の物にしよう…」

長髪の男がマモリに気づき、全身を見定めた。それはもう、頭から足の先まで、舐めるように。

「へへ、おい野郎ども！あの娘を捕まえてこい！！」

「「へい！！」」

マモリに男たちが襲い掛かってくる。凶悪そうな顔立ちだが、どこか下っ端感の拭いきれない男たちが。

「わ、来た……フルアーマー・イージス！」
魔空間にしまっておいた聖剣イージスと、その服を召喚する。
イージスを手にするやいなや、マモリは襲いかかる男たちの手を華麗にかわしながら、男たちが持っている武器を次々と破壊していく。
実戦で使うのは初めてだったため、その動きにマモリ自身も驚いた。羽のように体が軽く動くのだ。
「この剣…すごい！」
「な…なんだこの女…！」
驚く長髪の男。
「女じゃない！オレは…男だ！」
まあ、そう言われてもまずは信じられないだろう。
山賊たちからすれば、マモリはどう見ても美少女剣士だ。
「嘘つけぇぇ！そんな可愛い娘が男のはずがあるかぁ！」
マモリは勢いに乗せて長髪の男に切りかかった。
長髪の男はギリギリその攻撃をかわす。が、持っていた武器を手放してしまう。
だがすぐに体勢を整え、マモリに突っ込んできた。
至近距離で懐の小刀を取り出し、マモリの腕を狙う。
マモリもその攻撃をよけるが、胸元のガメイラに小刀が当たってしまう。
「あ！！！」
「小娘が…なめるなー！」
「男だって言ってるだろー！」

お互いが一度後ろに跳び、すぐに切りかかる。
長髪の男の攻撃をさらに前に突っ込むことでにかわし、背後に回り、マモリは長髪の男の後頭部を柄で強く打った。

長髪の男は気を失い、前のめりに倒れた。

「うわぁぁ…」
慌てる下っ端たち。
「し、しかたねぇ…ずらかるぞ!!」
そう言って武器を破壊された下っ端たちが、長髪の男を担いで逃げて行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「…ふう。」
軽く一仕事終わったというように溜息を吐くマモリ。

「マモリくん、ありがとう!それにしても強えな〜…戦う美少女!勝利の女神様だ!」
おじさんが笑いながらマモリの肩をたたく。
「ちょ…それはやめてよ、おじさん!」

「お姉ちゃんありがとう!」
近くで見ていた少年や少女、村人が次々とお礼を言う。
「だからオレは……はぁ、もういいや。」
みんなの笑顔でどうでもよくなった。むしろこの場合、男と思われた方が変態扱いされるんじゃないかと思うマモリだった。

「へぇ…なかなか可愛いわね、マモリちゃん。」

すぐ近くから突然声が聞こえ、マモリは警戒心を強めた。

「！！」

周りを見回してみても声の主らしき人はいない。というか、その声元はあまりにも近すぎた。

「ここよここ！下！」

マモリは母の言葉を思い出す。

――今はまだ眠っているみたいだけど、じきに目を覚ますわ――

確かにそう言っていた。マモリは恐る恐るガメイラを見る。

「そうよ！私！ガメイラ！」

その声は確かに胸のペンダントから聞こえていた。

「さっき目が覚めたわ。ここわ…カウロイ村ね。私が起きたってことは…。マモリちゃん？」

「え！？…いや…えぇ！！？」

「何驚いてるのよ…。それにしてもマモリちゃん大きくなったわね。」

「え！何言ってるの…？オレのこと知って……君（？）、なんなの？」

急に馴れ馴れしく話しかけてきたペンダントに戸惑いを隠せない。

「私は人格魔導具のガメイラよ。あなたの旅のサポートをするためにあなたのお父さんゼウに作られたの。その時あなたはまだ小さかったから覚えてないわよね？」

覚えてないどころか、こんな奇妙な存在が家の物だったなんて全く知らなかった。

「私にはこの世界の全てに近い知識が入っているわ。それはきっとこれからのあなたに必要なもの。」

「…どういうこと？」

「…ん？だから、これからあなたが旅をするために私の知識が必要になるだろうってこと。」

「旅って…俺は用事は終わったらすぐに帰るつもりなんだけど…」

「え？」

ガメイラはしばらく黙り、また声を出した。顔も口もないから話し出すタイミングが全く読めない。

「その用事って…その呪いを解くことでしょう？」

「呪いのこともわかるの！？」

「ええ。あなたは今男の子の服が着れない呪いにかかってる。あなたから魔力をもらって話してるんだから、それくらいわかるわ。その呪いをとくためにってことよね？」

「そう！そういうこと！！」

「…だったら私が力を貸してあげる。っていっても、まずはその呪いをかけた張本人を見つけなくちゃだけどね。」

その言葉でマモリは老人を探していることを思い出した。

「そうだよ！あのおじいさんを探さなきゃ！誰か知ってる人…」

「おおい、マモリくん！！」

それぞれの作業に戻っていく村人の中、おじさんにまた声をかけ

られた。
「さっきはありがとな。兵士さんも明日にはまた戻ってくれるらしいてよ。」

「そうなんだ！良かった！」
その言葉を聞いてマモリは安心する。
実は自分が村から離れて大丈夫かと心配していたのだ。

「それからな、さっきマモリくんが言ってた杖に乗ったローブのじいさんの事、思い出したよ！昨日確かに黒い何かが杖に乗ってウォーロッセオの方に飛んでいくのを見たんだった。」
「え！！……ウォーロッセオかぁ…遠いな。」
「これから作物を届けに行くんだけど、一緒に連れて行ってあげようか？」

おじさんはもともと作物をいろんな場所に届けるような仕事をしていたので、専用のジープを持っている。
ウォーロッセオは歩いて行ったら一週間はかかるような場所だ。
マモリはこれを絶好のチャンスと思い、乗せてもらうことにした。

「ありがとう、おじさん！よろしく頼むよ！！」
「よし！！じゃあ家に行ってジープに乗ってな！すぐ準備すっから。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

マモリは行き慣れたおじさんの家に行き、ジープに乗った。
しかし、老人が思っていた以上に遠くに行っており、本当に呪いが解けるのか不安になっていた。

「大丈夫よ。ウォーロッセオに行けば確実にそのおじいさんに会えるわ。」

ガメイラの言葉には確信があるようだった。

「それにしてもマモリちゃん…」

「…何？」

「美人に育ったわね。」

「やめてよ！」

そしてマモリを乗せたおじさんのジープは、ウォーロッセオに向けて出発したのだった。

ウォーロッセオの闘技場で

＜闘技場のある町・ウォーロッセオ＞

数百年の歴史を誇る巨大闘技場で有名な町。
今でもその闘技場では毎週何かしらの競技が行われている。
ゆえにこの町には腕に自身のあるもの、闘いが好きな者、またそれを見物したい者がたくさん集まる町なのだ。

「ありがとう、おじさん！ここでいいよ！」

ウォーロッセオ内の商店街でジープを止める。

「そうけ？まあこんだけ人がいれば誰かそのじいさんを知ってるかもな！」
「うん！ほんと助かった。戻ったらまたおいしい野菜食べさせてね！」
「おう、それじゃ気をつけてな！」

マモリはジープを降り、おじさんと別れた。林檎を一つお土産にもらって。

「とにかくあのじいさん探さないと…。この町に居てくれるといいけど。」
「大丈夫よ。きっとこの町にいるわ。」
「なんで解るんだよ。」
「女の勘よ！」
「（女なんだ…）」
自身満々に喋る胸元のペンダント・ガメイラに、マモリは相変わ

らず何からどう突っ込んだらいいのかわからないでいた。
もらった林檎を食べながら町の中心に向かう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜ウォーロッセオ・とある場所＞

一人で暮らすには充分過ぎる広さだが、大人数が入るには少し狭い空き家の一室。

「例の娘が町に入ったみたいだね。」

セクシーに足を組み換え、ボトルの酒をコップに注ぎながら話す女。
その狭い部屋には十数人の男たちがぎゅうぎゅう詰めで棒立ちになり、女の話を聞いていた。

「いいかい…しくじるんじゃないよ！」
女は冷たい目をしていたが、その瞳の奥はギラギラさせている。

「「へい！」」
そして男たちはぞろぞろと部屋から出て行った。
どいつもこいつも、どこか普通と違う、いかにも野蛮そうな連中だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜ウォーロッセオ中心部・闘技場前＞

「大きいな～…」

大都市の球場と同じくらいある大きな円形の建物を下から見上げ、マモリは大きな亀みたいだなどと考えていた。

「世界中でも有名なウォーロッセオの闘技場よ。毎週いろんな大会が行われるの。賞金も出るのよ！だからこの町には腕自慢や賞金目当ての人がたくさん出るの。」

「へ～ぇ……ガメイラって本当に物知りだね。」

目の前の建物と回りの強そうな人々、それとガメイラの情報が一致しており、マモリはようやくガメイラの知識を信用することにした。

「マモリちゃんも出てみたら？」

「何言ってるんだよ。俺がここに来たのは別の目的が…」

「うふふ、わかってるわよ。ただ今の可愛いマモリちゃんの姿をたくさんの人に見てもらうチャンスだと思って。」

「……なおさら出る気なくなったよ。」

そんなたわいもない話を胸のペンダントとしているマモリは、回りからはきっと電波少女だと思われてるだろう。

ふと正面を見ると、マモリと同じくらいの少女が歩いて来るではないか。

フリフリの可愛らしいワンピース。

ショートボブの金髪。

手には花瓶の様なものを大事そうに抱えている。

「…可愛い…」

ついそう呟いてしまうマモリ。

その少女に見とれていると、あり得ないことに、ベタなことに、その少女が突然現れたいかにも乱暴そうな男に襲われはじめた。

「キャーーー！」

「ぐへへっ、可愛いなお嬢ちゃん。お兄さんと一緒に遊ぼうや」

お兄さんと言うにはあまりにも無理のあるその男は、少女の腕を掴み、ひょいっと持ち上げた。

「ええ！？」

そんな馬鹿なと言いたいところだが、現に起こっているのだから仕方ない。

「…し、しょうがない、ほっとけないよ！」

マモリはイージスを召還し、剣と鎧を装備する。

「…おい、その子を話せ！」

あまりにも突然な出来事だったが、日頃魔物に襲われてる人を助けるのが日課のマモリにとっては、日常と変わらない行動である。

その声に男と少女がマモリの方を見る。

「おお！もう一人可愛い子がいるじゃねえか！今夜は両手に華…」

まあ手を放さないだろうと思っていたマモリは、男が言い終わる前に動き、剣を振る。

「おおっ！」

男は驚き、少女を掴んでいた手を慌てて放す。

少女はその勢いで倒れ、花瓶が割れてしまった。

マモリはまだ用があるのかと言うように、男を睨む。

男は居たたまれなくなり逃げてしまった。

「ふう、大丈夫？」
少女に手を差しのべる。少女もその手をとり、立ち上がった。

「ありがとう…。…でも、花瓶が…」
「え？ああ、ごめん。…大事な物だったの？」
「そういうわけじゃないけど……う、うぅ…」

少女は泣き出してしまった。
おろおろと慌て出し、言葉に詰まるマモリ。

「お母さんが病気で…でも病院に行くお金がなくて…この花瓶を売ればそのお金ができるはずだったの…」

またしてもそんな馬鹿なと言いたい展開だが、少女の涙を見ては何も言えない。

「…せめて私が大会に出て…賞金を貰えるくらい強かったら…」
泣きながらとんでもないことを言い出す少女。どう見ても大会に出て闘うなんて無理そうだ。

「このままじゃ…お母さん死んじゃう…」
少女の目から涙がボロボロとこぼれ落ちる。マジ泣き。

「わかったよ…オレが大会に出る…。だから泣かないで…」
「…本当？」
まるで少女に丸め込まれたようになってしまったが、マモリは他に泣き止ませる方法が思いつかず大会に出ることを決意してしまった。

「いいの、マモリちゃん？」

「だってしょうがないじゃないか…。ほっとく訳にもいかないし、病院の治療費なんて持ってないんだから…」

「マモリちゃん…将来苦労しそうね。」

ガメイラは心からマモリの将来が心配になった。

使用禁止

少女が言うには今回の大会の賞金は１００万マネィらしい。ちなみにマネィというのはこの世界の通貨だ。
それはもう、治療費を払ってもお釣りが来る額。

「武闘大会か…ってこれ、武器の使用禁止じゃん！！」
闘技場に貼ってあるチラシを見て、マモリはがっかりする。内容は拳や脚、自分の肉体だけを使ってバトルする武闘大会だった。
元々マモリには格闘する力も技術もないし、戦闘力が上がる装備も今はイージスだけだ。

「大丈夫、あなた強いでしょ？さっきの動き、凄かったもの。それに女の子なんだからきっとみんな油断するわよ！」
「ははは…（女の子じゃないんだけど…てか生身じゃすごく弱いし…）」
実際は女の子ではないのだが、ミニスカートで自分は男だと言っても変態扱いされるだけだと思い、この場は黙っていた。
それはその少女が可愛らしい子だったためでもある。
そんな感じで、結局明日の武闘大会に参加することになってしまった。

「私はラミア。じゃあ明日この場所で会いましょう。」
ラミアと名乗った少女はそのまま走り去ってしまった。

残されたマモリは大きな溜め息をつく。
もともと黒ローブの老人を追って来ただけだったマモリは、これだけ面倒なことに巻き込まれるなんて思っていなかったのだ。

「…はぁ、何でこんなことに…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜ウォーロッセオ・武器防具店＞

闘技場で有名な町だけあって、店には結構お客さんが入っていた。

「えぇ、ないの！？」

「ごめんね。でも女の子でも装備できる格闘用のグローブなんて聞いたことないからねぇ。」

明日の武闘大会は武器の使用禁止。そのためマモリは素手と認定される武器を探さなければならなかった。

格闘用の武器でフルアーマーを使えば、マモリは格闘の達人になれるからだ。

むしろそうしないとマモリに勝ち目はない。

「うぅ、これじゃ大会に出れないよ…」

「そもそも出る必要ないと思うけどね。マモリちゃんは人が良すぎよ。…それに確かに素手の女性用なんてなかなかないわよ。少なくとも武器やとかには…」

半べそかきながら店を出ようとすると、ガタイの良い青年にぶつかった。

「あ、すみません！」

「…いや。」

マモリは小さくお辞儀して店を出て行った。

マモリとぶつかった青年は不思議そうにマモリが出て行く様を見送った。

「（…可愛い子だな…あんな子がなんでこんな所に…？）」

「ジャン！例の物仕上がってるぞ！」

「あぁ！サンキュー！！」

ジャンと呼ばれた青年は店長から頼んでいた品物を受け取った。

店長が青年をジャンと呼んだ途端、周りがざわめきだす。

「…おい、ジャンだ…」

「本当だ…やっぱり明日の大会の…」

「こりゃ明日が楽しみだぜ…」

「あぁ、特にジャンとブライのカードは絶対見逃せねえ！」

店内で自分のことでざわめきが起こるが、ジャンはそれを気にも留めず店長との会話を進める。

「衝撃吸収ボディスーツ！打撃ダメージを和らげる他に耐火性・保温性にも優れておるぞ！」

「ああ！さすがだな！これで明日は思いっきりやれる！…ところで店長、さっきの女の子…明日の大会に出るみたいなこと言ってたけど…なんなんだ？」

「あ～、なんでも明日の武闘大会に出たいそうでな、女性用の素手装備品を探してたんだ…。うちにはそんな物のないって言ったら出て行ったよ。まああんな娘が大会に出るなんて無茶だ……出ても予選ですぐ落とされるだろうしな。」

「…ふ～ん…あんな可愛い子がねぇ…」

ジャンはもう一度、マモリの出ていった方向に目を向けた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜ウォーロッセオ・武器防具店外の小道＞

「…どうしよう…フルアーマー使わずに出たら俺なんて一瞬でやられちゃうよ…きっと首ねっこ掴まれてキュッっとかいってそのまま捻り殺されちゃうんだ…」

涙目になってとぼとぼとアテもなく歩く。軽い男なら確実に声をかけているだろう。

「大丈夫よ。あそこの大会は今は殺しご法度のはずだから。」

「昔だったら殺されてたかもってこと!!?」

「まぁ、それにその場合は予選で落とされて終わりだから。もう諦めたら?」

「う〜…でもあのラミアっていう女の子と約束しちゃったし…母さんも女の子との約束は絶対守れって言ってたからなぁ…」

「（…アイリなら言いそうね…）でもそんな格好で出たら、屈強な男たちに慰みものにされるわよ?」

「なぐさっ!!それだけは嫌だ〜!!」

すっかり弱気なマモリをからかうガメイラ。

そこにさっき出てきた店から男が追って来た。

「おーい、お嬢ちゃん!」

「…」

「…マモリちゃん、あなたのことだと思うわよ?」

「え?」

ガメイラに言われるまで、その呼び掛けが自分のことだと気づかなかった。

「…何か用？」

「あぁ、君、女の子用の格闘グローブなんかを探してるんだろ？さっき店で店長と話してるの聞いちゃったんだ！」

結局男に声をかけられてしまうのだが、その男はとても優しそうな顔立ちをしていた。

「それならこの通りの先にあるリキュールって酒場に行くといいよ。そこの女マスターが格闘オタクでさ、何か持ってるかもしれないよ？」

「え！？本当に！？」

「ああ、日が暮れたら店開くから、行ってみなよ。」

「はぁぁ、ありがとうお兄さん！」

マモリは目をキラキラさせ、男に抱きつきそうになった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜ウォーロッセオ・酒場リキュール＞

日が暮れた頃、マモリは言われた酒場へ来てみた。

その酒場は町の中心部からはかなり離れた所にあり、人通りもほとんどない場所にあった。

マモリはまだ１６歳。お酒を飲める年齢ではないし、酒場なんて場所もスタートロイで母に付き合わされて行ったことがある程度。

一人で入るのは初めてだった。

「ここか…なんか緊張するな…」
「マモリちゃんが…明日を待たずして野蛮な男たちの慰みものに…」
「変なこと言うな！！」

ガメイラに突っ込みを入れつつ、その存在が一緒にいてくれると思うと、マモリは安心できた。

そして酒場リキュールの扉を開く。

フレイ・バーバリア

＜酒場リキュール＞

店の中はたくさんの男が楽しそうに飲んで騒いでいた。
マモリが以前母と行った酒場と同じような活気だったので、マモリはそれほど緊張せずに店の奥へと向かうことができた。
奥には一人の女性がカウンターの中に立っている。
美人というよりは格好いいイメージの若い女性。

「あら、いらっしゃい。」
「…どうも。」
「お嬢ちゃん一人で来たの…？」
「お嬢ちゃんじゃないんだけど…」
「あら、そうなの？」

マモリもさすがに店の奥まで行き、カウンターに座ると緊張せずにはいられなかった。
自分のような子どもが一人で来るところではないと改めて思ったのだ。

「まあいいけど…お酒は出せないわよ？」
「あ、いいよ！…ちょっとお姉さんに聞きたいことがあって来たんだ！」
「聞きたいことね…まあそんなところだと思ったわ。あなたみたいな子が一人で来る理由なんて他に無いものね。」
「（そういうものなんだ…）」
「…それで、何が聞きたいの？」

そう言いながら女性はマモリにピーチジュースを出した。
きっとマモリの髪の色や雰囲気から読み取ってのチョイスだろう。
安直すぎるが。
その気遣いが伝わったのか、マモリも少し安心してそのジュースを飲み、女性に店に来た訳を話す。
お姉さんが格闘オタクだと聞いたこと。何かそういう道具を持っているんじゃないかということ。

「…そうね、確かに私は格闘好きで、自分でもしたりするわ。その時に使ってる物でいいならあげられるかもしれないわね。…ちょっと探してくるわ。」
「ありがとう！」

女性はすぐに戻ると言って店の奥に入っていった。

「なんとかなりそうね…。」
「うん！いい人そうで…よか…っ…」

マモリは急に眠たくなり、意識が薄れていった。それをここ数日のドタバタの疲れが来たのだろう。そんな感じで。
そのままカウンターにつっぷして寝てしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜酒場リキュール・数分後＞

「……」
なんだか体がダルい。
うっすら目を開けるマモリ。まだ店の中らしい。

「……うぅ……っ！！」

体が動かない。椅子に座らされ、手足を縛られているようだった。

「目が覚めたみたいだねえ…」

さっきのお姉さんの声が聞こえる。だがさっきまでの優しい声とは違い、なんだか怖い感じだった。

マモリは今の状況を冷静に考えてみた。考えてみたところ、どうやらピンチらしい。

「…どういう…こと？」

とりあえず聞いてみた。

「見ての通りだよ。って言ってもわからないか…。いいかいお嬢ちゃん、私の名前はフレイ。フレイ・バーバリア。」

どこかで聞いたような名前だった。

マモリは最近の記憶を必死に思い出していく。そして一つ、似たような名前を記憶の中に見つけた。

「…あ…山賊！？」

「おや、わかってくれたみたいじゃないか。話が早くて助かるよ！その通り、私は山賊バーバリ団のリーダーさ！…カウロイ村では私の子分が世話になったみたいだからねぇ、あんたのことずっとマークしてたんだよ。」

マモリは山賊のことを思いだし、目の前の人間が決して優しく気のいい人ではないと理解した。

そして騙されたことに凄くムカついた。

ふと、胸にガメイラがないことに気づき、回りを見回した。

「あのうるさいペンダントかい？あれならここにあるよ。」
マモリの様子に気付いた女ボス、フレイはガメイラを手に持って見せつける。

「か、返せよ！！大事なものなんだから！」
「ふふ、何なのこれ？使い魔でも入ってんの？ずっとマモリちゃんマモリちゃんって叫んでたわよ。なぜか今はおとなしいけど。」
そう言われてマモリもガメイラの構造をよくわかっていないことに気付く。
だが今はそんなこと言ってる場合じゃない。

「なんでこんなこと！？」
「あら、言わなかった？子分が世話になったから、そのお礼よ。さあ、あんたたち！好きにしちゃっていいよ！」

回りがざわざわとざわめき出す。突然の状況でマモリは忘れてしまっていたが、店の中にはたくさんの男客がいたのだ。
それがすべて山賊バーバリ団なんだと、今更になってわかった。

「へへへ…やっとこの子を可愛がれるぜ！」
「俺もう限界だよ！」
「さあて…何からしてもらおうかな？とりあえず俺のを…」
「待てよ、俺が先だ！」

男たちが狂ったような目でこっちを見る。
よく見れば昼間この店のことを教えてくれた優しそうなお兄さんも混ざっていた。

「ちょっと待ってよ！オレ男だよ！！？」

「はぁ？そんな嘘信じるわけないだろう？」
ダメだった。

マモリは男としてかつてない危険を感じた。
…このままじゃ…男じゃなくなる…！
「フルアーマー・イージス！」
体は縛られたままだが、イージスを使えばなんとかなる！そう考え、マモリはイージスを召喚した。
マモリの服も、胸当て、ミニスカート、ニーソックスに変わった。

「今だよ！」
フレイが叫ぶと、後ろの男がイージスを奪った。腕の縄を切るのが間に合わなかったのだ。

「え…そんな！」
「ごめんね～…カウロイ村であんたが変身して武器を持ったとたんに強くなったって聞いてたからさ。とりあえず武器は預からせてもらうよ。」
フレイのニヤニヤ笑いはマモリを一層ムカつかせた。

「本当に変身しやがったぜ！」
「うおー、生着替え見ちまった！一瞬でわからんかったけど！」
「しかもさっきよりやらしい格好になったぞ！やる気じゃねえか！」

事態は悪化したようだった。
男たちの顔つきもさらに凶悪になったように感じる。
そして数人の男たちの手がマモリのお尻や太ももを触り出した。

「ぁあっ！」
思わず声を出してしまった。

「感じてんのか！？」
そう言われてマモリはショックを受け、同時にものすごく恥ずかしくなった。
男としてのプライドを自分で傷つけたような気がしたのだ。
こんな格好をしておいて今更プライドもないのだが、気持ちだけでも男らしくと思っていたマモリにとって、こうして男たちに触られるのは屈辱だった。
マモリは情けなくて泣きそうになってきた。

男たちの手は容赦なく体をなで回し、とうとうスカートの中に入ってくる。
マモリももうダメだと思った。

――――――ドゴォン！！

その瞬間、後ろの方向から大きな破壊音が聞こえた。

その場にいた全員がそちらの方を見る。

鍵をかけていたはずの酒場の扉が粉々に粉砕されており、そこに一人の青年が立っていた。
マモリはその青年をどこかで見たことがあるような気がした。

火拳・イーフリート

粉砕した扉を背にその青年はマモリたちの方へ近づいていく。
店内にさっきまでとは明らかに違う空気が広まり、山賊たちの意識がジャンに集中する。

ある者は目をギラつかせ、今にも青年に殴りかからんとしている。
またある者はその顔を見て、体を震わせ、後退りしている。

そんな空気の中、沈黙を破ったのは酒場の女主人にして山賊のリーダー、フレイ・バーバリアだった。

「あんた…格闘家のジャンだね？私もあんたの噂はよく聞くよ。…で、有名人のあんたが私の店壊してくれちゃって…いったい何の用かしら？…まあ何の用でもただでは帰さないけどね！」

フレイは眉間をヒクヒクさせながら、怒りを抑えながらジャンの様子を伺っている。
対するジャンは無言のまま進み、山賊たちの群れの前で立ち止まった。

「…この野郎…やる気か！」
「いいところで邪魔しやがって…ただじゃすまさねえ！！」
「ぶっ殺してやる！！！」

月並みな脅し文句をたれる山賊たちに一瞬ガンを飛ばし、視線をマモリに移す。
マモリもそのジャンの方を見ていたため、自然と視線が合う。
ジャンはマモリに向かってニッコリ微笑んだあと、目を尖らせ、

拳を作り、腰を落とした。

「っ！！あんたたち、気をつけな！！」

フレイが慌てて声を上げる。だが言うのが遅いのか、ジャンが早いのか、そこで小さな竜巻が起きたように数人の山賊が吹っ飛んだ。

ジャンはその勢いに乗って山賊を蹴散らしながらフレイの目の前まで来る。

あまりのスピードにフレイも警戒するのが遅れた。

「うがっ！」

ジャンはフレイを軽く小突き、持っていたペンダント、ガメイラを奪い取った。

フレイは体勢を崩し後ろのバーカウンターの中に倒れてしまう。

ジャンはマモリの方までゆっくりと歩いていく。

一連の動きを見ていたマモリの周りの山賊たちは、マモリに触れている手を引っ込め、後ろに下がってゆく。

「これ、お前のだろう…？」

そう言ってジャンはガメイラをマモリの首にかけた。

「え……あ…ありが、とう…え…？…なんで！？あんたっ…」

事態が飲み込めないのは山賊たちだけでなく、マモリも同じだった。

何が起きたのか、目の前の人物は何のために何をしているのか、さっぱりわからない。

そんな混乱の中、マモリにも一つだけはっきりしていることがあった。

「…助けて…くれたの？」
「まあ。」
ジャンはそう言ってマモリの縄をほどいていった。

次に声を出したのはさっきまで無言だったガメイラだった。
「はぁぁぁ…マモリちゃん大丈夫!?危ないところだったわね…まさか本当に慰み者にされるなんて…。」
口に貼られていたガムテープをはずしてあげたように、勢いよく喋り出すガメイラ。
「うわっ！」
その声を聞いて驚いたのはジャンだった。
まあ突然ペンダントが喋り出せば当然のリアクションだが、さっきまで余裕の顔で山賊を薙ぎ払っていたのを思い出すとギャップを感じてしまう。
「あなた、マモリちゃんを助けてくれてありがとう。」
「…いや……」
自分に声をかけてくるとは思っていなかったので、ジャンはたじろいだ。ペンダントに話しかけられたのは人生で初めてだったのだから当然だろう。

その「いや」という言葉で、ようやくその男が昼間出会っていたことをマモリは思い出した。
「武器屋さんにいた人!!」

「え?…ああ、覚えててくれたのか！」

一方倒れたフレイ・バーバリアはそのままバーカウンターの中でごそごそと動き、立ち上がった。
その動作にまだマモリたちは気づいていない。

「あんた…ジャンっ！よくもやってくれたね！！」
フレイは左手を前にかざした。さっきまではつけていなかった真紅の手袋を着けている。
その手袋がさらに赤く光り出した。

「危ない！マモリちゃんイージスを！！」
ガメイラが魔力を察知し、声を荒立てて叫んだ。
マモリもその声に反応する。さっきの山賊が落としたのか、落ちていたイージスを急いで拾い、柄の宝玉を前にかざす。

すると宝玉から半透明の大きな盾が現れた。
マモリとその後ろのジャンをすっぽり隠せるくらいの大きさの盾が。

盾が現れるとほぼ同時に、フレイの手から炎が噴出される。特大の火炎放射器のように。
「燃えちりな！！」
その炎はまっすぐマモリたちに向かい、イージスの盾にぶつかった。
「熱っ！！…何この炎！？」
マモリもジャンは驚き、盾に隠れて熱さをしのいでいる。

「炎魔法…？」
「いいえ、これは魔法じゃない…騙されてこんなことになっちゃってるけど、あの女が格闘オタクっていうのは本当みたいね！」
「どういうこと？」
「…あの女が手につけてるグローブあるでしょう？あれは火拳・イーフリート…。昔ある格闘家の娘が愛用していた格闘用の手袋なの。より強い拳を、そう思って特別に作らせたのがあの手袋よ。もうそ

の娘は死んじゃったらしいけど、それからあの手袋は伝説の拳として伝えられたわ。その娘の格闘への熱い思いが宿って炎を出すようになったのよ。そんなレアアイテムがこんなところにあるなんて…」
「…えと、つまりあれって格闘用の武器ってことだよね!?」
「そういうことよ!」
「じゃあ…あれを手に入れたら…」
「ええ、マモリちゃんも格闘技ができるようになるわ!」

ギリギリで炎を凌ぐマモリたち。だが炎の威力が弱まっていく。

「熱っ!!くそ!!」
フレイは優勢なのに炎の噴射をやめた。
手袋、イーフリートはまだ燃えたいというように、なおも赤く光っている。

「っ!!しめたわ。あの女、ちゃんとイーフリートを扱えてない!あれは魔力でうまくコントロールしないと自分も燃えちゃう危険なアイテムなのよ!」
なんとも恐ろしい手袋だろう…マモリはそんな物を使おうとしてたのかと身を震わせた。
「それ大丈夫なの?」
「何言ってるのよ…そのためのフルアーマーでしょう?」
それもそうだと思い、マモリは納得した。フルアーマーはどんな装備でも自在に使いこなせる魔法だ。
思えばさっきのイージスの盾もとっさにしては強力な盾を作り出せたと言える。
マモリもはじめてだったが、あれが本来の守護の剣と言われるイージスの力なのだろう。

フレイは再びイーフリートを装着し、炎を噴射する。

「今度こそ！灰になりな！！」
それを再びイージスの盾で防ぐマモリ。
フレイが炎の噴射を止め、また攻撃してくるまでの時間は5秒といったところだった。

「これじゃどうしたら…オレのスピードじゃ炎がおさまってる間に手袋を脱がすなんてできないよ…」
「確かに…難しいわね。」

策が思い浮かばない。そう思っているところに割って入ってきたのはジャンだった。

「よくわからないけど…あの手袋を奪えばいいんだな？」

「え？」

マモリがジャンの方を見た時、すでにジャンはイージスの盾から飛び出し、フレイの方に突っ込んでいった。

チャイナドレス

炎は依然として熱く燃え盛っていた。
どういう訳か周りの木製のテーブルや椅子には燃え移っていなかったようだが。
しかしその熱さは本物で、直撃すれば確実に燃やされてしまうだろう。

ジャンはそんな炎が燃え盛る中、ギリギリのところで炎に当たらないようにフレイに近づいていく。

「く…！アツ…！」
フレイはジャンの行動に気づいていなかった。
視界に入っている炎が大きすぎたことと、そのため光でしっかりと目をあけることができていなかったからである。強力な炎により、自ら視界を狭めている。
ジャンはそれも見越して極限まで炎に近づいていたのだ。と言っても完全に炎を避けることはできず、普通なら大火傷してしまうような距離で近づいていく。

やがて炎の勢いが小さくなる。

炎の勢いが小さくなると同時に、フレイの視界にジャンが入る。
あまりにも近くにいたことにフレイは驚きを隠せなかった。
焦りからか、無茶な攻撃をしてしまったと思ったが、すでに手遅れだった。

「さすが…耐火性！！…これ、もらうぞ！」
ジャンのボディスーツは特注のもので、耐火性に優れたものだっ

た。
ジャンはフレイの左手を掴み、火拳イーフリートをはぎ取り、そのままフレイを部屋の隅に投げた。

「っが！！！」
テーブルとイスにドカッとぶつかり、フレイはかなりの痛手を負ってしまった。
だがフレイはまだ怒りもやる気も衰えてはいなかった。

「くっ…あんたたち！！いつまでもぼさっと見てるんじゃないよ！全員でかかりな！！！」

ここぞとばかりに声を張り上げるフレイ。
その狂気に対応して、さっきまで傍観していた山賊たちが動き出す。

「…絶対許さないよ！八つ裂きにしてやる！！」

「うわ！お兄さん、早くそのグローブをこっちに！！」
マモリにはイージスもあったのだが、さっきのイーフリートの力を見て、一気に片づけてしまおうと考えたのだ。

「ああ！！」
ジャンはマモリにイーフリートを投げた。

イーフリートを手にしたマモリは、さっそく魔力を込める。
一瞬、あぁ…また恥ずかしい格好になるのかも…そう思ったが、どうせ明日には必要なのだから今考えても結果は同じだと思い、フルアーマーを使うことにした。

「フルアーマー・イーフリート！！」

マモリの体が赤く光る。さっき見たイーフリートの光だった。

次の瞬間、マモリはまた別の姿になった。

リーダーのフレイ、山賊たち、そしてジャンもその変身シーンに意識を奪われてしまっていた。

左手には火拳・イーフリート。右手にも同じデザインのグローブ。胸から膝上にかけては一枚の布を体にピッタリと巻きつけたようなワンピースとも違う服。

その服は太ももものところに切れ目が入っている。

綺麗なピンク色のセミロングはアップにされ、頭のてっぺんでお団子にされていた。

それはいわゆるチャイナドレスというものだった。

チャイナドレスという服の構造は、実際のところカンフーに絶対向いていないだろう。

だがマモリの魔力とイーフリートが選んだといえるこの服が、マモリの格闘スタイルだったのだ。

「え…？ちょ！これっ！！？」

その布の少なさに戸惑いを隠せない。

確かにスリットのおかげで足技も使えそうだが、そんなことをしたら中が見えてしまいそうだった。

「マモリちゃん…それはちょっと男の人を誘惑しすぎじゃないかしら？」

「知らないよ！俺がイメージしたわけじゃないんだから！！」

実際にどこの誰の意図によってフルアーマーの装備が決まるのかは定かではないのだ。
ただこの格好がイーフリートを扱うのに一番適している、そう言わざるを得ないのだった。

「おま…その格好は？変身した？」
戦いを中止してマモリに興味を持つジャン。さっきから何がどうなってるかわからない。なぜこんな場所で男たちに襲われてるのかもだが、変身にはさらに混乱させられた。

そもそもジャンの方こそ、なぜこの場に来て助けてくれたのかもマモリにとっては謎なのだが。

「これは装備した武器を自在に使いこなすフルアーマーって魔法なの。まぁ見てなさい！今からのマモリちゃんは凄いわよ！」
ジャンは再びペンダントに話しかけられ戸惑った。
目の前の女の子の何が凄いのか、それが強くなったという意味だとすれば信じられない。
ましてやそれを言ってきたのが本人でなく一介のペンダントなのだから。

だが、ジャンはその後自分の目を疑うことになる。

「お前ら…さっきはよくもやってくれたな！…ベタベタベタベタ…すっっごく気持ち悪かった！！」

マモリの両手両足が炎に包まれた。

そしてマモリの体が宙に浮く。いや、浮いたのではなく跳んだのだ。

しなやかに、華麗に、マモリの体は上空に舞い、山賊の群れの真上で体勢を変えた。

「ハィア！」

炎の足が一人の山賊の顔面を蹴る。空中で。その山賊は壁まで一直線だ。何人かの山賊を道連れにして。ボーリングのピンのように。蹴られた男の顔は火傷というほどではないが、焦げているようだった。

着地したあと後ろから来る攻撃を、これまたしなやかに避け、懐の入り込んで腹部に強烈なストレートを叩きこむ。

すぐさま新体操のように足を後ろに突き上げ、後ろの山賊の顎を砕いた。

その山賊は恐らくマモリのドレスの中身を見てしまっただろうが、記憶には残らないだろう。

「つぎっ！！」

そうやってマモリは次々と山賊をノックアウトさせていった。

どんな流派なのかはわからないが、その身体能力は凄まじく、まるで全身がゴムかバネになったような感じだ。はっきり言ってその動きは美しさすら感じる。

両手両足の炎がそれをさらに綺麗に見せている。

見たところノックアウトされた山賊は小さな火傷はしていても、燃やされるような者はいなかった。

どうやらイーフリートは炎を出してもその熱量や燃焼をコントロールできるらしい。

ジャンはすっかりマモリに見とれてしまい、動けなかった。

それは男としてではなく、一人の武闘家として。

ジャンは自分が武者震いをしているのを感じていた。

ジャンは自分の視界の中で、フレイが動き出したことに気付いた。立ち上がり、隠し持っていたナイフをマモリに投げようとしている。

自分の子分に当たるかもしれない…そんなことを考えてる余裕はもうないのだろう。

「くそ…こんな小娘に！！」

フレイはナイフを振り上げた。マモリは気付いていない。

「させるか！」

ジャンは全力で足場を蹴り、フレイの方へ突っ込んだ。そしてフレイの目前でもう一度踏み込み、肘鉄を食らわせる。

腹に信じられない衝撃がはしり、フレイはそのまま気を失った。

マモリの方も山賊を一人残らず気絶させていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜ウォーロッセ・宿屋前＞

「今日はありがとう。…でも、なんでオレを助けてくれたの…？」

「あぁ…昼間見た時に可愛いなって思って…それに明日の大会に出るみたいなこと言ってたから気になったんだ…それで探してたらあの店に入るのを見たって聞いたから。」

顔を赤くしながら言うジャン。頭をポリポリとかいている。マモリもなぜだか恥ずかしくなった。

「マモリちゃん…赤くなってるわよ？」

「ちょ！そんなわけあるか！オレは男なんだから！可愛いとか助けられたとか、そんな…」
「え？」
一瞬沈黙した。
マモリも隠すつもりはなかったが、恩人に変態だと想われると焦ってしまう。
「あ、…えと、今はこんな格好してるけど…ちゃんと体は男で…呪いかけられちゃってて…この格好は仕方なくって言うか…！！」
慌てて事情を説明するマモリ。
「こんなに可愛いのに…本当に…男なのか？」
「…うん。」
「…失恋かしら。」
ジャンはしばらく黙っていたが、何故か笑い出した。
「……くは！あははは！そうか！男なんだ！確かにあの強さ！！それなら納得できる！明日の大会に出るっていうのも！！…そっか、男だったのかぁ！見た目で判断してたなんて、俺もまだまだ修業が足りないな！」
「俺、最初は気に入られたくて助けたんだけど…さっきの見てお前と戦いたいって思ったんだ！」
「……は？…」
「男って判って安心したぜ！これで明日はお前と思いっきり戦えそうだ！」
「はあ…（ってそれは困る！）」
賞金が必要なマモリにとって、ジャンの存在は全く嬉しくなかっ

た。

「そうだ！まだ名乗ってなかったな！俺はジャンって言うんだ！」
「あ、オレは…マモリ。」
「マモリか！うん、明日はよろしくな！可愛い顔したって駄目だからな！俺は本気でお前を倒す！」
なんだかいつの間にか熱血モードに入っていて、マモリはついて行けなかった。

「じゃあ明日な！」
そしてジャンは走っていく。

「なんだか…頭の悪そうなのに目をつけられたわね…」
「うん…でもいい人だよ。」

そうして夜は過ぎ、大会の日が訪れる。

武闘大会開始

＜ウォーロッセオ・闘技場＞

武闘大会当日。

闘技場ではＡとＢの会場に別れて予選が行われていた。

マモリは参加登録を済ませ、Ａブロックの会場に向かうところだった。

登録の際、受付の女性から「こんな女の子が…？」というような目で見られた。

しかし昨日会った少女ミアが、―女の子なんだから、みんな油断するわよ―と言ったのを思い出し、それが優勝への近道だと思い、不本意ながらも女の子と思わせて油断を誘おうと思ったのだ。

実際マモリは賞金でラミアの母親の治療費を稼ぐという目的があって、腕試しなどと言う名目は一切ないのだから。

都合の良いことに、マモリ以外にも女性の参加者は結構いたようだが、マモリほど若く華奢な娘はいなかった。

「マモリちゃん！おはよう！！」

昨日ここでと約束したラミアが声をかけてきた。

「おはよう。」

「わぁ！可愛い！！それどこで買ったの！？すっごくセクシーだし戦う女って感じ！マモリちゃんに似合ってるよ！」

ラミアはマモリのチャイナドレスを見てキャッキャと騒ぎ出した。

マモリはラミアに対しては男とばれて変態扱いされたくないと思っていたので、そう言われて喜ぶふりをするしかなかった。

「あはは、ありがとう。」
「魔法じゃなく気合いで何か出せそうだよね！」
「え…そう？」
ラミアは波〇拳やかめ〇め波のようなものを言っているのだろう。
実際には魔法とは少し違った形で炎を出せるのだから、あながち外れてもいなかった。

「それにそのセクシーなスリット…対戦相手が男の人だったら前屈みになってきっと動けないよ！」
可愛い顔をして平気で下ネタを言うラミアに、マモリは苦笑いで応えた。昨日の男たちのことが頭をよぎる。

「あ、じゃあそろそろ行くね！」
「うん、頑張ってね！！」
マモリとラミアはそこで一度別れ、マモリは予選会場へ、ラミアは客席へ向かった。

「マモリちゃん…」
呼んだのはラミアではなく、胸についているペンダントのガメイラだった。
「ん？何？」
「…いや、何でもないわ…」
「…何だよ…！」
「…ううん、別に…あ、その格好を褒められて喜んでるマモリちゃんが可愛いなって思って！」
「…おまえはオレをどうしたいんだよ…」
その後は何もつっこまず、会場に向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜闘技場・Ｂブロック予選会場＞

そこに他の選手を圧倒している青年がいた。
ジャンである。

彼は昨日は何事もなかったかのような万全の体調で予選に参加し、あっという間に本戦の出場権を手に入れてしまった。

もともと優勝候補でもあった彼にとって、他の選手なんて目をつぶっていても勝てるといった具合だ。だがジャンにも気になることがいくつかあった。

「…マモリがいないなぁ、Ａブロックなのか？ということは当たるとしたら決勝戦か…。楽しみだな！」
昨日のマモリの姿を思い出すと今でもワクワクが止まらないジャンだった。

「…でも…ブライの姿がない。もしブライがＡブロックなんだとしたら、きっと俺と当たる前に２人がぶつかってしまう！！ということは、俺はどちらかとしか闘えないのか！？なんてこった！！」
ジャンは頭を抱えて悩み始めた。予選会場のステージの真ん中、気絶している猛者たちの山の上で。

ブライというのはジャンのライバルえある。その実力が互角と町の人間は判断しており、２人の対戦を心待ちにしているのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜闘技場・Ａブロック会場＞

予選はAブロックBブロックともにステージがあり、それぞれのステージでサバイバルバトルを行う形式だ。
それぞれのバトルで最後まで立っていたものが本戦出場となる。
各ブロック共に2回の予選を行い、2人ずつブロックの代表を決める形式だ。

Aブロックでの第一予選は、マモリが到着した時にはすでに終わっていた。
誰が残ったのか見ることはできなかったが、もしもマモリが予選に勝てばその人が本戦準決勝の相手になる。

「あ～あ、さっきの予選どんな人が勝ったんだろう。見たかったな…」
「あら、相手に興味があったの？この大会自体になんの興味もないと思っていたわ。」
「それはそうなんだけどさ…できるだけ楽に勝ちたいからね。相手のことは知っておいた方がいいだろ？」
「…マモリちゃんって時々すごく冷静になるわね。」
「もともとそのつもりなんだけど…」

そういうわけなんで、自分の予選時間が来るまで近くの人に聞いてみることにした。
1回目の予選でステージの上でのびてしまった人たちの回収にスタッフが手間取ってるようだったので、その待ち時間を利用して。

「ねえ、お兄さん！」
「ん…？」

片付け中のステージを傍観していた大の男に情報提供を求めるマ

モリ。
　男は急に美少女（のような少年）から声をかけられたと思い、かなりドキッとした。
　はたから見れば逆ナンにしか見えない状態だ。

「さっきの試合で勝ったのってどんな人だった？」
「…ああ、さっきの試合な。勝ったのは背の高い女だよ。ものすごい動きでな、全然相手にならなかったよ…」
「相手にならなかったって…？」
「ああ、俺もさっきの予選に出ていたんだ…」
　よく見ると男の体はあちこちに痣や傷があった。
「そうなんだ…じゃんよっぽど強かったんだね、その人。…特徴は？」
「そうだなぁ、なんだか全然喋らなくて、目もすわってて、殺人ロボットみたいで怖かったかも…」
「へぇ…わかった、ありがとう！！」
「どういたしまして、ところでこれから…」

「では、第2予選の出場者の方はステージにお集まりください。」
　スタッフの開始の呼びかけがかかった。

「あ、オレ行かないと！お兄さんありがとう！」
「えぇぇ！！？君も出るの！？え…！？」
　すっかり逆ナンにあっていい気になっていた男は、いろんな意味で驚いてしまった。

　ステージの上には自分を含めて15人くらいの男がいた。全員男だった。
　最も、他の男から見れば女が一人混ざっているように見えるだろうが。

マモリは左手のイーフリートに包まれた拳を握りしめ、構えをとった。
今回の大会は武器の使用禁止、さらには魔法も禁止のため、炎は使えない。
純粋な肉弾戦の大会なのだ。

周りの男たちも見るからに筋肉の塊のような者ばかりだった。
しかもその男たちはほぼ全員がマモリの方を見ている。

「どうやらお色気作戦は通用しなさそうね…」
スタッフにばれないよう小声で話すガメイラ。
「なんだよその作戦！気持ち悪いこと言うな！…でも、油断を誘うのも無理そうだね。」
「前屈み作戦もね。」
「それはもともと狙ってない！」

そう、これはサバイバルなのだ。サバイバルではその場で最も弱そうな者が真っ先に狙われるのである。
この場合、当然その矢先はマモリに向けられるのだった。

「それでは、開始してください！」

スタッフの呼びかけと同時に男たちがマモリに襲いかかった。
昨日も全く同じような目にあっているため、マモリは自分も男でありながら、つくづく男運がないなと思った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜闘技場・観客席＞

「本当にあれで男の子なの?どう見ても女の子じゃない!」
「ふぇふぇふぇ…母の血を強く受けているのじゃろう?とても父親には似てないからの。」
「ふーん、まあいいけどね。私の実験に貢献してくれるんだったら、なんだって。」
「本当にお主は悪趣味じゃのう…」

観客席で怪しい会話を繰り広げる金髪の少女と黒ローブの老人。
その老人は間違いなく、マモリを呪ったあの時の老人だった。

フレイ再び

＜闘技場・Ａブロック会場＞

最終的にステージの上に一人立っていたのはマモリだった。
他の約１５人は気絶しているか動けないでいた。

ステージの上に倒れている出場者たち、スタッフを含めたその場にいた全ての人が、信じられないという表情をしている。
マモリの強さは常識をはるかに超えていたからだ。
それがまだ成人していない少女だったのだからなおさらだろう。

「…えぇ…Ａブロック２人目の代表はマモリ選手です！！」
もしここに観客席があったならば間違いなく歓声が起きていただろう。

ともかくマモリは、余裕で予選を通過した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜闘技場・本戦会場＞

予選は闘技場の屋内だったが、円形に作られた闘技場の中心は大きな吹き抜けとなっており、そのこが本戦会場だ。
円形の吹き抜けを囲うように作られた観客席。
そして吹き抜けの中、中心にはロープのない石造りのリングが設置されている。
まあスタジアムではよくある形だろう。

観客席にはすでに数百人の人間が本戦を待っていた。
実際には準決勝の２試合と決勝戦の計１試合だけなのだから、規模は小さいのだが、それでも郊外から　観戦に来る客も少なくはない。
もっとも、その客のほとんどは賭博という楽しみで来ているのだが。

「はぁ、楽しみですな。」
「ええ、魔法も武器もなしの格闘試合は最近ではなかなか見れる機会もありませんから。」

「どの出場者が勝つか賭けをしませんか？」
「いいですとも、私はあのジャンという青年に賭けましょう。」
「おや、本命ですな。」

実は先ほどの予選試合はビデオ実況されていたのだ。
つまり観客たちは４人の出場者を知っている状態だった。
当然、マモリのことも、ジャンのことも。

控え室で待機するマモリは、現在緊張で体を震わせているところだった。

「あわわわ…俺何も考えてなかったけど、この格好でたくさんの人の前に出るんだよね…？」
「そうよ。さっきチラッと見たでしょう？客席の人たち。ざっと１０００人はいるわね。」
「そんなに！？…確かにそれくらいいたかも…なあガメイラ！俺こんな格好で人前に出て…変に思われないかな…？」

「今更何言ってるのよ。マモリちゃん今までその格好でたくさんの人と会ってきたじゃない！」
「それはそうなんだけど…それは別に、普通に話すのは普通っていうか……だって今から会場に出るっていうことはたくさんの人が俺を見るんだよ！？」

マモリは本当に今更自分の格好が恥ずかしくなっていた。
今までは特に自分の格好など気にせず、普通にしていればいいと思っていたからだ。
だが、今回はそうではなかった。
たくさんの人がマモリを見たくてマモリを見る。この事実にマモリはかつてない恥ずかしさを感じていた。

「うわぁ…やっぱり恥ずかしくなってきた…！帰りたい…」
「もう遅いわよ？それに、とにかく優勝するしかないんでしょう？」
「うぅぅ、そうだけど…」
「なら気合い入れなさい！」

「それにこの大会、ただじゃ終わらない気がするの…」
「っ！…それって…やっぱりオレが女装の変態男として名を世界に知らしめるってこと…！？」
「違うわよ！何卑屈になってるのよ…。今までだってそんな風に思われなかったでしょ？みんな女の子だって思ってるわよ！」

当初は相手を油断させるために女の子のふりをするのはアリだと思っていたが、今は自分の男のプライドを守るために女の子でいようと決心した。なんとも矛盾しているが。

「そうじゃなくて…この大会、なんだか不穏な空気が漂ってる気がするの。」

「…不穏って…？」
「わからないわ。とにかくマモリちゃんは常に注意しておいて！」
そんなパッと見ひとり芝居のような会話を終え、マモリは深呼吸し、いつも通りにと心に言い聞かせながら会場に向かった。

ワァァァーーーーーー！！

会場で大きな歓声が響き渡った。
マモリは知らないが、先ほどの予選で圧倒的な強さと可愛さを観客に見せしめたのだから、かなりの人気者になっているのは確実だろう。
実際にいろんな方向からマモリちゃーん！と呼ぶ声が聞こえる。
「（…やっぱ恥ずかしい…）」
マモリは今までちやほやされることがあっても、それはよく知るスタートロイの人たちくらいで、こんな見知らぬ地で見知らぬ人たちに黄色い声援を送られてるのだから恥ずかしくないわけがない。
さっきの自己暗示が早くも解けそうだった。
ただ一つ救いなのは、その声援がむさ苦しい男だけでなく、女の子の声も多数混ざっていたことである。
「紹介が遅れました。Aブロック代表、見た目は可愛い女の子。だけどホントはかなり強い！パワフルカンフーガール！マモリ選手ー！！」
レフィリーが仰々しくマモリを呼ぶのと同時に、会場が震えた。
マモリも苦笑いで手を振りながら石造りのリングに上がる。

「続きまして、同じくAブロックの代表、燃えるような赤い髪に豊満なボディ、だけどそのスタイルはワイルドコマンドー…」

…さっき予選落ちしていたお兄さんが言っていた女の人だ！

マモリはお兄さんの情報を真摯に受け止め、すでに意識を観客からまだ現れぬ対戦相手にシフトしていた。

「フレイ・バーバリア選手ーー！！」

「っ！！？」

「それって！」

マモリとガメイラはその名前を知っていた。

つい数時間前まで騙されたあげくに体を触られ、しまいには店内でドハデな乱闘を繰り広げることになった主犯の名前だった。

ただ、昨日は最終的にジャンにのされ、動けるはずがないのだが…。

会場に現れたのは間違いなくフレイ・バーバリアだった。

フレイは下を向き、暗い雰囲気でリングに上がってくる。

対戦相手のマモリを見て何も言ってこない。それどころか見ようともしていなかった。

ただ怒りを抑えてるだけだろうか。いや、明らかに昨日とは様子がおかしい。

マモリもガメイラもそう感じていた。

そしてその感覚は正しかったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜闘技場・観客席＞

「さあ、実験を始めましょう…」

マモリとフレイ・バーバリアを見つめ、金髪の少女…ラミアはにやりと笑うのだった。

蜘蛛みたいな

＜闘技場・リングの上＞

「さあ一回戦は美女と少女のレディースファイト！それでは準決勝1回戦、はじめ！！」

ヒュン――――

審判の開始の合図と同時にフレイが動き、一瞬で間を詰められる。

フレイがマモリの目の前に現れたと思ったら、すぐに視界から消えた。

「うわっ！！」

マモリの見てる景色が空を映す。足払いをされたのだ。

それを宙返りして着地する。

「……」

そのスキをつくようにでフレイはパンチとキックの雨を叩き込む。

無言で。そして無表情で。

それをギリギリのところで払い落としていくマモリ。

「なんだこの動き…この人、こんなに強かったの！？」

「……」

フレイは人形のように表情を変えなかった。

「おおっと、まずはバーバリア選手の猛攻です！マモリ選手、おされてます！」

「くそ、これなら！」

「……」

フレイの蹴りをいなすと同時に、体をフレイの方に運び…

ドン！

フレイの体が後方、リングギリギリのところまで吹き飛ぶ。

「決まったー！マモリ選手の見事なカウンターがバーバリア選手のみぞおちにクリーンヒィッツ！！これは立てないでしょう！！」

マモリは今の一撃で終わったと思った。それだけの手応えを感じ相手が女性なのを思いだし心配になったくらいだ。

「マモリちゃん！」

ガメイラが最小限のボリュームて叫んだ。

完全に油断していた。

ドカ！

「そんな…！」

横から来るフレイの膝をもろに受けてしまうマモリ。

よろめいたところを2手3手目が絶え間なく襲いかかる。

「おおっと、バーバリア選手！さっきの攻撃が効いていないのか、起き上ったと思ったらすかさずマモリ選手を滅多打ちです！！どうなってるんだバーバリア選手の体はー！？」

イーフリートで格闘スキルを身につけていなければ、今頃は意識不明か最悪死んでいたかも知れない。

そう思うほどフレイの攻撃は荒く、破壊的だった。

「…やっぱり昨日とは違うわ…！何かおかしい！」
ガメイラの指摘はマモリも感じていた。
強烈な右ストレートを手を組んでガードしたが、吹っ飛ばされてしまった。
「おおっと！今度はマモリ選手がダウンかぁぁ！？」
会場は異変など微塵も感じないまま、２人の攻防に盛り上がっている。
だがマモリには、自分の服や動き、客の反応を気にする余裕が全くなかった。
「はぁ…はぁ……強い…！」
マモリは今、格闘を完璧にマスターとまでは言わないが、かなりの実力者になっているはずだ。
それはこれまでの戦績で誰もが判っていることだった。
なのに押されている…。
マモリはフレイに感じている違和感を確かめたくなった。
「はぁ、はぁ…あんた、昨日あんなに派手にやられたのに…こんなところで何してんの？」
マモリは攻撃に回すエネルギーを、相手の皮肉を考えることに回した。
フレイの精神を揺さぶる作戦だ。
だがフレイの人形のような無言無表情に変化はない。
ババババ！

再び猛襲してくるフレイの攻撃をかすめる程度で避けていく。

「だいたい…オレを痛い目にあわせるためにセコい手まで使って…それで逆に痛い目見るなんて…情けないよ！」

「…」

「それに…自慢のレアアイテムも俺に…取られちゃって…！山賊が聞いて呆れるね！」

「…」

フレイの無表情攻撃が次第に和らいできた。

「いいわよマモリちゃん！その調子…！」

「あのあともすぐにだらしなく気絶して…お姉さんの山賊って…全然大したことないよね…！」

フレイの手がふるふると震え出した。

もう少し…だがもう皮肉が思いつかない。

次にマモリが絞り出した言葉は、

「それに…オレ本当は男なんだ…！なのにオレの方が人気あるみたい…！」

マモリは自分で何を言ってるんだと訳がわからなくなった。

「お・ば・さ・ん！もしかして…オレに女の魅力で負けてるんじゃないの～？」

マモリはできるだけセクシーに言った。

自分の心を折りそうになりながら。

おかげでフレイの攻撃はマモリの顔面ギリギリのところで止まった。

「バーバリア選手、沈黙～！何があったのでしょうか！私には完全にバーバリア選手が押しているように見えましたが！！？」

ゴソ…という音がする。

「マモリちゃん、首の裏よ！」

ガメイラの指示を受け、マモリは素早くフレイを髪と首の間に手を差し込んだ。

その手をさっとぬきとって見ると、人にくっついていても目立たない様な灰色の、蜘蛛のみたいなのが手にくっついていた。

次の瞬間、フレイはふぇ？とヤル気のない声を出して膝から倒れ、そのまま気絶した。

審判がフレイの様子を確認する。

「只今の試合の結果…マモリ選手の勝利です！」

オォォォオ！

また会場に歓声が響いた。

止まない歓声の中、マモリは控え室に戻っていく。なんとか恥ずかさにも耐えしのぐことができた。実際はそんな余裕なかったが。

だが最後の言葉は自分で自分にかなりのダメージを与えた。

マモリはそのことを記憶から消すことにし、気になっていたことをガメイラに聞く。

「ねぇ…ガメイラ、あのお姉さんの様子がおかしかったのってこの

蜘蛛のせいだと思うんだけど…この蜘蛛のことわこる？」
「いいえ…はじめて見るわ。」
「そっか…」

マモリは、ガメイラでも知らないことがあるんだ程度に思っていたが、ガメイラはこのことを気にしていた。
ガメイラが知らない生物ということは、事実存在しない、もしくは存在が確認されていない、もしくは一般的に公になっていない生物だと言うことだ。
そんな虫が突然現れて、マモリの対戦相手を操っていたとは思えない。

ガメイラはこのことをマモリに言うか悩み、今は黙っておくことにした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜闘技場・観客席＞

「あ～あ…やられちゃった！けっこういいできだと思ったのにな。」
その言葉とは反対に、嬉しそうな表情をするラミア。

「ふふ、ゼウの装備が使えなくなってどうするのかと思ったが…まさか少女の格好のままあれほどの力を見せるとは…さすがはフルアーマーの魔法…いや、血かのう」
と言ったのは黒ローブの老人。

「でもいいデータがたくさん取れたわ！まだ実験は続くわよ！」

決勝戦…？

＜闘技場・本戦リング上＞

「さあさあ！間髪入れずにいきますよ！続いて準決勝２回戦！開始！！」

リングの上にいる男の一人はジャンだ。
試合が始まるなり対戦相手に指を指している。

「おいお前！さっきの一回戦は見ていたか？」

ジャンの対戦相手は体が３メートルは越えているだろう大男だ。
その筋肉は牛一匹を片手で持ち上げられそうなほどだった。
そんな男がジャンの質問に答えている。

「あ？おぉ、見ていたぞ？」
「あの試合で勝利したマモリというのは、俺の大事な人だ（強さを求める意味で）！」
「は？ああ…そうなのな…？」

突然何を言ってるんだと、会場が静まりかえっている。

「俺は早く…あの子とやりたい（闘いたいという意味で）！！」
「はぁ！！？…や、やりたいのか（性的な意味で）！！？」

会場だけでなく、審判も開いた口が塞がらず、また実況するのもわすれてしまっている。

「だから…」
「…だから?」

「お前は邪魔だっ!!!」
「なんで!!?」

大男がその言葉を言い終える前にジャンは大男の首を絡めとり、その太いのど元に膝を3発打ち込んだ。そのまま背後に回り、足の付け根を思いっきり突く。
最初の攻撃で意識が飛びそうになった大男はなすすべなく後ろに仰け反る。
ジャンは最後に仰け反った大男の額にとびきりのかかと落としをおみまいした。
そのまま倒れて意識を失う大男。

「…っあ…ジ、ジャン選手の勝利です!!!
最初の発言から最後のかかと落としまでぶっ飛びすぎていて、私もついていけませんでした!!ジャン選手、決勝戦侵出です!!」

オォォォオ!!

＜闘技場・観客席＞

「お前…どっちが勝つと思う?」
「そりゃあジャンだろう!さっきの勝負見たか?あの圧倒的強さ!」

「お…俺はあのマモリって子を応援する…!」

「俺もだ…何だろう、この気持ち…可愛いからとは違う…」
「わかるぞ！これはそう…萌えだ！」

「ジャン様ー！絶対優勝よー！」
「でもあのマモリって子も結構可愛いかも…。私あの子応援しようかな？」
「はぁ！？ジャン様をたぶらかすイモ女じゃない！」

「あれ…？そう言えばブライはどこ行ったんだ…？」
「そう言えば予選の映像にも映ってなかったな…」
「そうだ！俺はジャンとブライの対戦が見たかったのに！！」

観客席では決勝戦が始まるまでの間、観客たちがざわめき続けていた。

「ふふふ。楽しみだわ！」
「ラミアよ…お主はこの大会をどうしたいのじゃ？」
「別に、ただせっかくこんなに人が集まってるのよ？もっと盛り上げなくっちゃ…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜闘技場・リング上＞

「お待たせしましたぁぁ！！！それでは本日のメインイベント！言うなればここまではただの余興！！武闘大会決勝戦をぉぉぉぉ始めまぁぁす！！！！！」

オォォォオ！

「その拳の強さは鬼神のごとし！心技体を備えた男！おっと心の方は大丈夫か？先の試合で大胆告白してくれた…この大会の優勝候補！ジャン選手ぅぅぅ！！」

ジャンが大きく跳び、リングに派手に登場する。観声も凄かった。その様子から、このリングに何度も立ってきたことがわかる。

「そして突然現れたスーパールーキー！この美少女が決勝まで来ると誰が予想していたか！？できるなら私と付き合って下さい！！マモリ選手ぅぅぅ！！」

マモリは普通にリングに上がった。相変わらずの大袈裟な紹介で恥ずかしくなり、顔を上げられないでいる。

「さあ…この2人、どちらご強いのか！？いや、それよりこの2人、どんな関係なのか！！？それでは決勝戦…始めぇぇ！！」

会場全体が興奮状態になる。だがマモリとジャンの雰囲気だけは興奮状態とはいえず、静かすぎるくらいだった。

「やっとおまえと闘える時が来たな、マモリ！」

「…オレはあんたとは闘いたくなかったんだけど…できれば楽に優勝してさっさと終わらせたかった…」

「何っ！！？マモリは俺と闘いたかったんじゃないのか！？？」

「オレはただ賞金が必要なだけだよ…」

「そうなのか…まあどっちでもいいさ！」

ジャンは少し落ち込んだようだったが、すぐに気を取り直した。
そして高く…それはもう高く高くジャンプした。自分の身長5人分くらいはジャンプした。
「俺を倒さないと賞金はもらえないんだからな！！」

「キターーー！！ジャン選手お得意の空中殺法だぁぁぁ！」

マモリは上空を見上げジャンの攻撃に備える。
その時だった…

ドゴォォォン！

「キャア！！」
「おわあぁ！」

突如マモリの入場してきた方の入口から爆発音が聞こえた。
いや、本当に爆発したのだった。
その近くに座っていた観客の何人が爆発に巻き込まれたようだった。

「な！！？これはいったい何が起ったのでしょか！！？」
審判にも想定外の出来事だったようで、かなり慌てている。

慌てているのはもちろん審判だけではない、他のスタッフ、観客たちも大慌てだった。

当然ジャンは着地して動きを止め、爆発した方を見る。マモリもそうだった。

爆煙が少しずつ晴れていき、一部粉砕している闘技場の石造りの

中から大きな影が現れた。
次第にその影ははっきりとその姿を確認できるようになっていく。

「…何…あれ…！？」
マモリはその影の正体がはっきり見えても、それがなんなのかわからないでいる。

それは人間のような形をしていた。
頭があり、顔があり、髪があり、その下には首、体、足があった。
しかし腕は４本あり、肘の部分から紫色になっている。足はあるのだが、明らかに体の大きさに比べて大きすぎる。筋肉が発達しているというレベルではなかった。
一応、布を、巻いたように服は着ているようだ。

「きゃーー！！」
「魔物だぁ！！？」
会場が一気に混乱する。
確かに魔物と言えなくもないが、それはあまりにも人間に近すぎる姿をしている。
その生々しさが、さらに恐怖を煽っていた。
会場から逃げ出す者もいた。

「ななななな何だあれはーーー！！こんなのが出るなんて私聞いておりません！！」

人間のような何かは上を向き、大きく口をあけた。まるでうがいでもしているかのように。
次の瞬間、そいつは前を向き、口から光線を出した。
マモリとジャンの間を通って反対側の客席に当たる。と同時に、その客席で大きな爆発が起きた。

「っ！！！」

「ビーームだぁぁぁ！口からビーーム！！信じられません！この会場内にあんな化け物の侵入を許してしまうなんて！！どうなっているんだぁぁ！！？」

さらに混乱が大きくなる。ほとんどの観客が自分の身に危険を感じ、会場から避難しようと出口に向かっている。

そのため出口はつかえ、観客たちは団子状態だ。

そいつはその団子に標準を向け、またうがいの体勢に入ろうとしていた。

「まずい！またっ！！」

「マモリちゃん、これはかなりマズイわよ！？私の知識の中にもあんな魔物の情報はないわ！！」

「それって…」

「とにかく止めなくちゃ！」

「…わかってる…あんたも手伝ってくれ！！」

マモリはジャンの力が必須だと思い呼びかけた。だがジャンはそいつを見て固まっている。

「…ブ…ライ…？」

ラミアの正体

マモリはジャンを置いてそいつに飛び込んだ。顔に向かって拳をつき出す。
が、４本ある腕のうちの１本で食い止められてしまう。
だがその体勢から蹴りを繰り出し、そいつの顔面にヒット。
直後そいつの口からビームが照射されるが、ギリギリ軌道がそれて観客には当たらなかった。
無理なキックのためマモリのパンツが露になるが、今は誰も見ていないだろう。

いや、観客席にはまだその様子を余裕で観戦してる者たちがいた。

「あはははは！みんなすごい慌てよう！最高ね！あの玩具もなかなかの出来だわ！！…さぁマモリちゃん、その化け物とどんな風に闘うのかしら！？」

ラミアの笑い方はまさに狂喜の笑みだった。

「しかもあのジャンってやつ…私の玩具のこと知ってるみたいだわ。これ最高のシナリオね！！強い有名人で実験した甲斐があったわ！あはははは！」

マモリの活躍により、観客たちは殆ど逃げることができ、闘技場はさっきまでの熱気が嘘のように静かになった。

だがそいつはまだまだ健在で、掴んだマモリをジャンの方へ投げ飛ばす。
「うわっ！」

「ぐっ！」
マモリの体がジャンに直撃した。
「えと、ジャン！！何やってるんだよ！ぼうっとしてたらやられるぞ！？」
「そうよ。それにこのまま放っておいたらきっと人を襲うわ！さっきの攻撃、明らかに人を狙ってた…」
ジャンの強さは2人ともよくわかっている。だがジャンの様子は明らかにおかしかった。
「……ブライ」
「え？ブラ…？わっ！」
ジャンはマモリを払いのけ、そいつの目の前まで走った。
「！！ブライ！！何やってるんだ！？どうしたんだよその姿！なんでこんな酷いことするんだ！」
ジャンが叫ぶ。
ブライ――この町でジャンと同等の力を持っていると噂される男だった。
この大会でジャンは大衆の前でブライと闘えることを楽しみにしていたのだ。また、その闘いを見たくて来たという参加者も多かったはずだ。
そのブライが大会には顔を出さずに、こんな形で、こんな姿で現れるなんて誰も予想しなかった。現に観客たちは誰一人、この怪物がブライだと気づかなかったのだから。
「おまえ…！俺はおまえと…真剣勝負するのを楽しみにしてたんだ！なのに何やってんだ！？」

変わり果てたライバルの姿に、ジャンは悔しさと怒りが入り混ざったような気持ちだった。
その気持ちを懸命にぶつけるが、ブライは全く反応しなかった。
それどころかか、先の口からビームの狙いをジャンに定めた。

「危ない！！」
動かないジャンをマモリが突き飛ばしたことで、ジャンは燃えカスにならずに済んだ。

「やっぱり…あれは人間なのね？あなたのお友達…？」
聞きにくそうに、ガメイラが聞く。
「あぁ…この大会で真剣勝負するつもりだった…」

また次のビームが来るが、今度はジャンも自分でちゃんと避けた。

「あれが人間だとしたら、戻せる可能性はあるんじゃないかしら？」
ガメイラが言う。
「本当か！？」
「ええ。マモリちゃん、さっきの女山賊のこと覚えてる？…あれは絶対操られてたんだと思うの。」
「うん、あの蜘蛛みたいな虫だよね？俺もそう思ってた。」

作戦をたてているが、ビームは絶え間なく照射されている。避けながらの作戦会議だ。

「ええ。きっとあんな虫があの人にもついてると思うの。それを取り除けば！」
先の闘いで確かにフレイは元に戻った。まあ、「ふぇ？」と言っただけだったが。

その時のように蜘蛛を払いのければ元に戻るというのは誰でも考え付くだろう。

「無駄よ！」

その考えを否定する言葉を吐きながら、金髪フリフリドレスの少女がブライの前に舞い降りた。

それに合わせて怪物ブライがおとなしくなった。

「っ！！ラミア！なんで！？」

マモリは目を限界まで大きくしている。

この街で最初に出会った少女ラミア。

母親想いの子で、自分が大会に参加するための元凶で、できれば嫌われたくない可愛い少女だ。

「な！可愛い！！…いや、無駄ってどういうことだ！？」

この状況が一番呑み込めていないジャンは、突然現れた美少女にどんな感情をぶつけていいのかわからないでいた。

「…やっぱりあなた…変だとは思っていたわ…」

ガメイラはそう驚いた様子もなく、むしろ辻褄が合ったような様子だ。

「やっぱりってどういうことかしら？」

ラミアは余裕の笑みでガメイラを見つめていた。

マモリもラミアと同意件だ。

「そうだよ！？なんでラミアがここに！？」

マモリは慌てふためいていた。恐らく大体の察しはついているが、信じたくないという気持ちだった。

「ラミアちゃんだっけ？あなた今朝マモリちゃんに会った時「マモ

リちゃん」って呼んだわよね？」
「ええ、呼んだわ。嬉しそうに振り向いてくれるマモリちゃん可愛いかった！」
ラミアは笑顔で答えた。
「どうして名前を知ってたの？昨日の時点でマモリちゃんはあなたに名前を名乗ってはいないわよ！？」
「…そうだっけ？」
マモリもそんなことまでは覚えていなかった。
男女の出会いの中で名乗ったかどうかというのは結構大きな問題な気もするが。
「…そう言えばそうだったかも…失敗しちゃった。でも今更そんなことどうでもいいわよ！マモリちゃんが大会に出てくれれば良かったんだし！！」
ガメイラはずばり言ったつもりだったが、ラミアにとってはどうでも良いことだったようで、その余裕の表情は崩れなかった。

「ラミア…君は…」
「私はね、ある魔法組織の科学者なのよ。マモリちゃん、騙してごめんね。昨日のチンピラさんも私が操ってたのよ。あなたのことはある人から聞いて知ってたのよ。」
ラミアはウィンクしながら茶目っ気たっぷりに謝った。
「つまり、さっきの女の人も…この子も…私の実験動物なの。」

「おい！それより無駄って言うのはどういう意味だ！？どうすればブライを元に戻せる！？」
我慢できなくなったジャン。ラミアをギラギラした目で睨み付けている。さすがに流れを読み取ったようで、完全に可愛さ余って憎さ１００倍だ。
「だから言ったでしょ、無駄だって。」
そう言いながらラミアはワンピースのポケットからごそごそと何

かを取り出した。
　それはあの、フレイ・バーバリアの首の後ろについていた蜘蛛のような虫だ。
「じゃーん！これが私の作った寄生虫…タラミチュアちゃんでーす！」
「作った…？」
「寄生虫？」
「そう！この子を人間の首とか頭とかにくっつけたら体内に糸を出して脳を操作しちゃうの！で、私の魔力でその人を好き放題操れちゃうってわけ！！」
「…なんて物を…」
「しかも筋力や反射神経なんかも操れちゃうの！だからこの子に寄生されたらすごく強くなれるのよ。それをこの大会で実験しようと思ったの！そこでフルアーマーのマモリちゃんに協力してもらったのよ。」
「そんな……っ！それであの人…！」
　マモリの頭にフレイのことがよぎった。確かに昨日の晩とはまるで別人の動きだった。

　ラミアは平然と言い続ける。
「それにこの子は最高よ！時間をかけたからね。体細胞を弄りすぎてこんな姿になっちゃったけど、私の最強で最高の玩具になったわ！」
「じゃあ…元に戻らないっていうのは…」
「もう脳みそぐっちゃぐちゃだし、体も細胞ごと変わっちゃってるからね。もう何をしても一生このままよ。殺さない限りね。」
　ラミアは笑顔で決めた。子供のように無邪気な笑顔で。

「可愛いと思ったら、とんだ外道じゃないか！よくも俺のダチを！」
「そんなの関係ないわ。科学に犠牲は付き物なのよ。」

そしてラミアは怪物ブライに呼び掛けた。
「さあやっちゃいなさい！この二人を倒して私のタラミチュアちゃんのや効果を証明するのよ！！」

「ぐあぁぁあぁぁ！」
怪物ブライがマモリたちに向かってきた。
その巨大な脚で石造りのリングを粉砕しながら。

ジャンとブライ

「……」

マモリは動けないでいた。

この目の前の男が人間であり、まして隣りに立つ昨日の恩人の友達なのだから、攻撃なんてできるはずがない。

なのにその…怪物ブライの巨体がまさかの勢いで後ろに飛んだ。

腹部に強い衝撃を受けたように。

その衝撃の正体はジャンだった。

「情けねえぞブライ！！！」

ジャンの怒鳴りが会場中に響き渡る。

マモリは知らなかったのだ。

ジャンとブライが今までどれだけ拳で語り合ってきたのかを。

出会って喧嘩し、大会でも何度も顔を合わせ、たまには飲み比べ、そんな2人の関係を知らなかった。

まあもし知っていても、むしろ知っていたら余計に驚いただろう。

とにかくマモリにはジャンの行動が理解できなかった。

「おまえそんな蜘蛛に自分盗られちゃったのかよ！そんなに弱い心だったのか！？」

「……」

ジャンの行動にマモリはさっきの闘いを思い出す。確かにフレイは同じように呼びかけることで動きに変化があった。

だが今回はわからない。ラミアは脳みそぐちゃぐちゃと言っていたし。

実際、怪物ブライは依然として凶暴なままだ。むしろその動きが激しくなった。
その大きな足を水平に、バットを振るようにして蹴る。
大木が横から襲ってきたような構図でそれがジャンの体に当たる。
ガードしても体全域を覆ってしまう足に、ジャンはなすすべなく吹き飛んだ。

「痛ぇ！」
そう言いながらもジャンは体勢を整えてすぐに怪物ブライに飛び込んでいる。
今度は両腕を交互に突き出し、頭を狙う。
しかし、相手の腕は４本。
全ての攻撃をブロックされ、両腕を下の２本につかまれたと思ったら上の２本がハンマーのように振り下ろされ、足もとに叩きつけられた。
「ぐはっ！」
怪物ブライはジャンのいる自分の足もとに照準を合わせ、ビームの姿勢に入る。

「まずい！」
マモリはもう見ていられなかった。ジャンをこのまま連れ出そうと思った。
マモリは左腕のイーフリートから炎を噴出し、ジャンたちの方へ飛んだ。
ロケットのように。
そのままジャンを抱えて怪物ブライの股をすり抜ける。
怪物ブライは自分のビームが足元で爆発し、軽くよろけた。
軽くだ。
膝のあたりが少し火傷したようだったが、自滅というほどのダメ

ージは受けていない。

「ジャン！逃げよう！何もジャンがあの人と闘うことないって！」

「マモリちゃん…」

「あの人もう元に戻らないって…殺すしかないって言ってた…。でももしかしたらまだ方法があるかもしれないだろ？一回逃げて考えよう？」

「……ダメだ！」

マモリの説得に耳を貸すかと思えば、ジャンは強くそう言って、マモリを振りほどいた。

「このままじゃあいつはきっとこの町をめちゃくちゃにする。俺はあいつにそんなことさせたくないんだ！」

ジャンの言葉を震えていた。いつも余裕ぶって、何も考えていないようなジャンだが、今はそんな余裕はないのだろう。

「ブライは優しいやつだ。喧嘩が強くて、でも思いやりがある。俺はあいつと闘うのが好きだった。」

真剣だった。

「きっとブライも俺と闘うのが好きだ。あんな姿になっても、あいつの拳からはあいつの心を感じた。俺と闘うのを楽しんでるよ。」

「でも…じゃあ、どうするのさ！？」

「このまま闘い続ける。町を壊さなくてもいいように、誰も傷つけなくていいように…俺と闘っていれば、あいつはあいつでいられる。そんな気がするんだ。」

「一生休まず闘うって言うの！？そんなの無理に決まってるじゃん！！」

「無理じゃない！俺とブライは3日間寝ずに喧嘩したこともあるんだ。それがちょっと延びるだけだ。」

3日。一生というにはあまりにも少ない期間だった。

「…本気で言ってるの？」

「ああ！俺は強いやつと闘うのが大好きだからな！」

「…わかった。」
マモリは自分でも何を言ってるんだと思った。
ジャンの闘志にすっかりあてられてしまったのだ。
もしかしたらイーフリートに宿る格闘家の魂か何かがマモリにそうさせたのかもしれないが。
「マモリちゃん…何言ってるの！？」
「大丈夫だよ、ガメイラ。…きっとなんとかなるよ。」
なんとかってどうなるんだろう。マモリは自分でも馬鹿か！と思ってしまうようなことを言ったことにあとから気づいたが、今はジャンの力になりたかった。

「悪いな、マモリ！やっぱりおまえはいいやつだ！」

ジャンは怪物ブライめがけて突っ込んだ。
４本の腕を受け、時々来る大木のようなキックをかわす。
隙を見て全力で拳を突き出す。
「ブライ！やっぱりお前は強いな。」
ジャンの攻撃は本当に効いているのかわからないといった具合だったが、笑っていた。
楽しそうに。
「ぐおおぉあぁ」
「お前と闘うのは本当に楽しい！いくらでも付き合ってやるから思う存分暴れろよ！」

「なんかおもしろくなくなってきたわね…。」
ラミアが望んでいるのは本気の２人と闘って、２人をねじ伏せ、自分の実験結果を出すことだ。
そういう意味では割とラミアの思惑どおりに進んでいるはずだ。
「実験はいい感じなんだけど…何か足りないわね。なんか楽しそう

だし…。」

「楽しいんだと思うよ？」

マモリは2人の闘いを見ながら、言葉をラミアに向けた。

「ジャンは楽しそうだ。本当にああやって闘うのが好きなんだよ。」

ジャンは確かに吹き飛ばされながら、怪我しながら、でも笑いながら闘っていた。

「…だからどうしたのよ！？どうせその大好きな闘いももうすぐ決着がつくわ。そしたら今度はマモリちゃんの番…」

「…きっと彼はジャンがなんとかしてくれるよ。だってあの2人、友達みたいだから。」

そういってマモリはラミアの方に踏み出した。

「何よ。」

「…オレは君を許してあげられないみたいだ。あの女山賊のことも、ジャンの友達のことも…。」

「だから何？」

「ラミアとは、友達になれそうもないや。昨日会ったときは可愛いなって思ったんだけどね…。でも君を殴るなんてできそうにない…。だから、あの人を連れてこの町から出て言ってほしい。」

「はぁ！？私は元々友達になるつもりなんかなかったわよ！そうだ！マモリちゃんもタラミチュアで操ってあげる。私の着せ替え人形にしてあげるわ。」

そう言ってラミアは自慢のタラミチュアを取り出した。

ボゥッ――――

ラミアの手にあったタラミチュアは一瞬燃え上がり、チリになった。

「え？…キャーー！」

次はラミアの体が燃えていた。

いや、燃えているのはラミアのワンピースだ。

イーフリートの炎は燃やしたい物を選べる。体を傷つけずに服だ

け燃やすなんて、フルアーマーを使うマモリには造作もないことだった。

「その蜘蛛は絶対に許せない！ポケットにまだたくさん入ってるんだろう？」

マモリの考えは当たっていた。

数多のタラミチュアがワンピースと一緒にチリになっていく。

ラミアは素っ裸になり、その場にへたり込んだ。

「…この変態！変態女装男！…許さない！…何してるの！早く2人ともやっちゃいなさい！」

ラミアの表情からさっきまでの無邪気な笑みが消え、眉間にしわを寄せて怪物ブライに怒鳴った。

怪物ブライがジャンを突き飛ばす。

「ぐ…おぉぉおぉ！」

怪物ブライの4本の腕が丸太のように太くなった。いや、さっきまでも充分太かったのだが。

どうやら先程のラミアの怒声は、ブライの細胞を更に弄ったみたいだ。

怪物ブライは4本の腕を同時に振り上げ…

自分の胸に突き刺した。

ブライの心

ジャンは思っていた。
これでこいつに殺されるならそれも仕方ないと。
闘いぬいたライバル。理性はなくても相手が自分の認めている男なら。
ただこのままこいつを放っておくのだけはなんとかできないかと。

だから怪物ブライの行動が信じられなかった。

「何やってんだ…！？」
巨体からあふれ出る血を見てジャンは言う。
怪物ブライの胸には４本の丸太のような腕が刺さっている。いや、この場合は杭のようなと言った方がいいだろう。
とにかくそんなわけで、ブライの胸からは致命傷と言えるだけの血で真っ赤になった。
人間の赤い血だった。

離れていたマモリも驚いていたが、準決勝でフレイと闘ったマモリにはそれがどういう意味なのかすぐにわかった。
ただこういう結果は求めてはいなかった。

「な…何やってるのよ！そんなのこと命令してないわよ！」
ラミアが焦るのも当然。ブライは完全にラミアの支配下のはずだ。
「…また…失敗ってこと…？」
悔しさが顔に現れる。
「きっと覚えてたんだよ…脳みそぐっちゃぐちゃにされても…ジャンのこと…」

「そんなはずっ…！！」

「ぐ…おぉぉ…」

姿は変わっていても、顔は変わっていなかった。

ブライは苦しそうににジャンを見つめる。

「ブライ…」

ブライは笑った。口からも血を流しながら。

お前との闘いが楽しかったと言いたげに。

そして怪物ブライはそのまま倒れた。

ジャンはただ、倒れたブライと自分の拳を合わせた。

「そんな…」

「ここまでみたいね。…あなたのしたことはとても許されることじゃないわよ！」

「ラミア…」

素っ裸でへたり込んでいるラミアをマモリは見続ける。

マモリも一応男の子なのだから、興奮するべきところなのだろうけど、とてもそんな風には見れなかった。たった今、知り合いの友達が死んだのだから。

いや、もう友達の友達と言ってもいいくらいの関係だ。

そんな人を玩具にして死にいたらしめるような相手だ。普通に接することなんてできない。

その時ラミアとマモリの間に影のようなものが竜巻のように現れた。

その影の竜巻から一人の老人が現れる。

あの時の老人だった。

「あ！おまえ！！」
「ふむ、フルアーマーの少年よ。元気そうで何よりじゃ。また一層可愛くなったの。」
老人は薄気味悪い笑い顔をする。
「うるさい！そんなことより呪いを解け！！じいさんじゃないと解けないんだろう！？」
「…確かに、それはわしの呪いの中でも強力な部類じゃ。わしにしか解けん。じゃが解くわけなかろう…？ちゃんと意図があってそうしたのじゃから…」
「うっ…じゃあその意図ってなんだよ！？」
「それは言えんのう。」
「マモリちゃん落ち着いて。」
ガメイラが割って入った。
「ほぉ…人格魔導具か。おもしろい物を持っておるのぅ。」
「茶化さないでいいわ。あなたの…いえ、あなたたちの目的は何なのかしら？ただマモリちゃんに女装させたいわけじゃないんでしょう？」
それだけだったらえらい変態的な目的になってしまう。
「マモリちゃんの中に…英雄ゼウの装備の中にマモリちゃんに使われたら困るものがあるんでしょう？」
「…さっしがいいのぅ。えらく頭の切れる人格のようじゃ。じゃが教えられん。」
「そんな！ふざけるな！！…もうこんな格好恥ずかしくて嫌なんだから！」
「ふん！全然恥ずかしがってないじゃん！！変態！」
今度はラミアが割って入った。
「……私もマモリちゃんはその一線を越えてると思ってたわ…」
ガメイラがまさかの相手側に賛同した。
「…確かに慣れてきちゃってるのかも…でも、だったらなおさら早

く戻りたいよ！女の子の格好なんて！…ていうか変態はやめろ！！」
マモリはこの時、かなり女の子の格好で人前に出ることに慣れてしまっていたことに気がついた。
実際何百人と観客がいるところにチャイナドレスで登場し、過激な動きで目立ちまくっているのだから。

「まあその話は後日じゃ。わしはラミアを連れて帰らねばならんからのぅ」
そう言ってまた影のようなものが現れ、老人とラミアを包み込む。
「待って！まだ話は…」
「ぐふふふ」
「マモリちゃん…次に会ったらこの借りは返させてもらうわ…！」
借りも何も、ラミアが勝手に仕組んで勝手に失敗しているのだからマモリには関係ないはずなのだが。
そんなことを言いながら、２人は影の中に消えていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

広い闘技場に残ったのはマモリとジャン、それから倒れたブライだけだった。
「マモリ…こいつ、俺と闘えて楽しかったみたいだ…」
「うん…」
「ブライ…死んじまったのかな？」
「…わからない…」
流れている血の量はおびただしいことになっていた。
「生きてるわ！」
ガメイラにはわかるらしい。それも知識なのか、また何かを感知したのかはわからないが。
「今どういう状態なのかわからないけど、体に穴があいたぐらいじゃ死なないように改造されてるみたい」

「よかった、助かるかもしれないよ？あ、回復魔法が使える人がいたら…元の体に戻れるかも…」
「そうか。でも、この町に回復魔法が使えるやつなんていないんだ」
「そうなんだ…」
「あれは継承魔法だからね。なかなか使える人なんていないのよ…」
「でもお医者さんじゃ怪我は治せても体を元に戻すことはできないだろう？」
「ああ。それにもしこいつの怪我が治ったとして、また暴れたらその医者が殺されちまう…」

「そうね…とりあえず彼を町の外に運んで、封印しておきましょう？」
「封印？…封印なんてできないだろう？」
「この町の近くにたしか封印機のある祠があったはずよ？そこに行けばなんとかなるかもしれない。」
さすがはガメイラの知識。それはもうタウンページと同じくらい便利である。
「封印機って何？」
「封印機っていうのはね、だれでも簡単に好きな物を封印できる機械のことよ。物質を封印すると、その物質自体の時間が止まるのよ。だいたい祠や教会・神殿にあるんだけど、そこで封印した物はその場所の魔空間に封印されるわ。封印した本人の魔力かその本人が用意した鍵がないと封印を解けないようになっているの。…まあ公共の巨大冷凍庫みたいなものね。」
「そんなのがあるんだな。」
ジャンは感心してガメイラの説明を聞く。半分くらいしか理解できていないようだったが。
「じゃあそこでブライを封印しておいて、回復魔法を使えるやつを探す！ってことだな！？」
「まあ、それが妥当ね。」

「よし！」
そう言ってジャンはブライを持ち上げた。信じられない怪力だった。
だがさすがにかなり苦しそうだ。
千年以上生きている大樹を丸ごと運ぶようなものなのだから。
「…は…はやくその祠に案内してくれ！！」
「わ…わかったわ。」
「ジャン大丈夫か？お前だって怪我してるのに…」
「心配してくれるのか？ありがとな！でも大丈夫だ！」

闘技場の外では脱出した観客たちがどうなっているのかとざわめいているだろう。
日も落ちかかっている。
一同はブライ姿を晒すわけにはいかなかったので、下水路を通って町を出ることにした。
ガメイラが言うには下水路が神殿の近くまで繋がっているらしい。

友達だから

＜ウォーロッセオ近辺・森の奥の祠＞

祠には割とすんなり来れた。
問題があったとすれば、下水路の入口と出口にブライの巨体が入らなかったことくらいだったが、そこはイーフリートの炎を纏ったマモリの肉体技でなんとかなった。
ブライの体の方は血が止まっているが意識は戻らない。もっとも意識が戻ったとしたら今頃はまた壮絶なバトルになっているはずだが。

「ここよ。」
その祠は森の中の川のほとりにあった。狭い目の集会場のような内装で、森の中ということもあり、あまり目立たないような感じだ。
マモリたちは祠の中に入る。

「うわ…綺麗なところだね。」
「そりゃあ、神聖な場所だから。」
「なあ、ここにブライを寝かせてやったらいいのか？」
祠の中心には巨大な魔法陣が書かれている。その周りには三角コーンにボーリング程の玉がついた柱。正面には台座が設置されていた。
「ええ、そこでいいわ。マモリちゃんはそこの台座の前に立って」
「うん。」
ジャンはブライを魔法陣の中心に寝かせ、マモリは台座の前に移動する。
「じゃあ…ジャンくんは離れてちょうだい」
「わかった」

ジャンが魔法陣から離れ、マモリの後ろに移動する。
「マモリちゃん。私を台座の上に置いて、台座に魔力を注ぎこんで。」
「え…あぁ、よし！」
マモリはガメイラを台座に置き、台座に手を添えて精一杯魔力を込める。
「うん。じゃあ今から封印機を作動させるわ。使い方は私が知っているし、操作するから、マモリちゃんは魔力をそのまま注入して頂戴。」
「…うん…」

ガメイラの宝玉が光り出し、その光が魔法陣に伝わっていく。初めてガメイラを手にした時の箱に似ているとマモリは思った。
周りのボーリング大の玉が光り出し、中心のブライの巨体がダランと力なく宙に浮いて行く。
ブライの体は死んだような薄紫色に変化し…うっすらと消えていった。

「…はい。完了！マモリちゃん、ジャンくんもお疲れ様。」
「お疲れって…ブライはどうなったんだ！？」
目の前でいきなり友達の姿が消えたのだから、ジャンは戸惑ってしまった。
「だから言ったでしょう？封印するって。物質を封印するとその物質の時間が止まって、魔空間に送られるのよ。この祠の魔空間にね。だから大丈夫！時が止まってるんだから、これ以上体がどうにかなることもないし、目を覚まして暴れることもないわ。」
ジャンはまだよくわからないと言いたげだったが、あまり突っ込んでも自分には理解できそうにないと諦めた。
「…でも…その封印ってやつはまた解けるんだよな！？」
今更だが、ジャンはすっかりガメイラと話すのに慣れてしまって

いた。
「ええ。」
「俺の魔力を注いでやったら解けると思うよ。」
「おお、そうか。なら良かった。」

「でもその前に回復魔法を使える人を探さないといけないんだよね？」
「ええ、それもあれだけ弄られた体だから、よっぽど優秀な回復魔法が使える人でないと駄目ね…」
「そんなやつこの近くにいるのか！？」
「う～ん…」
マモリはこの近くの人間ではないのだから、知らなくても当然だった。
「…この近くじゃないけど、あてはあるわよ。」
ガメイラは少し考えたあと、思いついたように提案した。
「この大陸でもかなり大きなお城…ここからそう遠くない場所にはバルキュリア城というところがあるわ。そこの王族はかなりの魔法が使えるらしくって、回復魔法の使い手としても代々有名なの。」
「ほんとっ！？」
「だったらそこに行くしかないな！！」
ジャンの顔もみるみる活気に満ちた表情になってきた。マモリもそのことに素直に喜びを感じていた。

「…というわけで、これからよろしくな！マモリ」
「うん。って言っても僕的にはあのじいさんを探したいんだけど、ジャンの友達も放っておけないからね…とりあえずあの人が元に戻るまでは協力するよ。」
「ああ！それにブライが元に戻ったら今度は俺がマモリに協力してやる！」

「本当っ!?ジャンみたいに強い人が一緒だったら心強いよ!!」
「任せろ!!」
2人がどんどん意気投合していく中で、ガメイラが真剣な声で入ってくる。
「確かに…今回のことで思ったのだけれど、マモリちゃんに呪いをかけたっていうおじいさん…それにあのラミアって子…とても2人だけで協力してるとは思えないわ。」
「どういうことだ…?」
「確かガメイラ、俺の中の父さんの武器で使われたら困るものがあるみたいなこと言ってたよね?…それってどういうこと…?」
「…私にもはっきりしたことは言えないの…ただ、あの2人がもっと大きな組織で動いていて、マモリちゃんが今使えない武器にも関係してるんじゃないかって思って…」
ガメイラの心配そうな声は、マモリも不安にさせた。もしそうだったとしたら、呪いを解くというのはマモリが思っているよりずっと難しくなる。
―意図があって―
確かに老人はそう言っていたのを思い出した。だが考えてもわからない…。
「…つまり、もっと強いやつがいるかもしれないってことだな!」
ジャンは真剣に、そして前向きにそう言った。
「まあ、そういう可能性も含まれるわね…」
「じゃあ俺はそいつらからマモリを守る!マモリは友達だからな!それに強いやつとも闘える!あのラミアっていう女にもブライをこんな目にあわせた礼をしなくちゃならない!!これは一石二鳥、いや三鳥だ!」
「ジャン…」
「心配するなマモリ!俺がお前を守ってやるから!!」
「ありがとう…」
ナイトと姫…そういう構図に見えなくもないが、お互い全くそう

は思っていなかった。
「それに、結局決勝戦なくなってマモリとも勝負できなかったしな！」
「あぁ…それはどうでもいいや…」
「あれ！？」
「じゃあ、さっそくそのヴァルキュリア城に行こう！」
こうしてマモリはジャンと一緒に新たな冒険へと向かったのだった。

＜とある場所・暗い部屋＞

「ラミアのやつ、また遊んでいるようだな…」
男はベッドに寝そべって天井を向きながら、女に声をかけた。
「あれは遊びというよりは実験…らしいですわよ？」
女は男が寝ているベッドに腰かけ、化粧をしながら返事をした。
「それに今回の実験は私も興味がありましたから。」
「そうなのか？」
「ええ…。それより一度家に帰りますね？城の方も放っておけませんから。」
「…だがあいつがいるだろう？」
「そうですけど…まあ今は戻った方がいいんです。」
「予言か…」
「ふふふ。では戻りますね。私の…バルキュリア城に…」
そう言って女は部屋を出て行った。

友達だから（後書き）

2章読んで頂き、ありがとうございます。ジャンは少しおバカなところのある、マモリの良きパートナーとして活躍させていくつもりです。

ここまで読んで気になるところ、直した方がいいところ、おもしろかったところがなどあったらぜひコメントください。

バルキュリア城

＜道中＞

ウォーロッセオを出たマモリとジャンは、ガメイラの道案内に従い、暗い森の中を歩いていた。

「まだ着かないの～？」
「もうちょっとよ！マモリちゃんしっかり！」
「はぁ…喋るだけの魔導具は楽でいいよなぁ。」
「そういうこと言わないの！」
マモリたちがウォーロッセオを出発してすでに5日が過ぎていた。5日間歩きっぱなしで、慣れない野宿。さすがに疲れが溜まっていた。

「なんならおぶってやろうか、マモリ？」
「いいよ。」
ウォーロッセオを一緒に出発したジャンは、すっかりマモリに懐いてしまったようだ。
ことあるごとにマモリに構おうとするので、マモリも困ってた。

「…で、そのバルキュリアってどんな国なの？」
「国じゃないわよ。」
「え、でも城があって王族がいるんでしょ？」
「まあそうなんだけどね…。バルキュリアは１００年前に滅んでいるのよ。」
「そうなの！？」
「バルキュリアは魔法国家としてとても強い力を持っていたんだけ

ど、その力故に自滅したって感じかしら。１００年前の国王が新しい魔法の開発に失敗してね。城と当時の王女様だけを残して消滅してしまったの。」
「なるほど…。」
ジャンはわかったようなわからないような顔をして相槌を打った。

「じゃあなんで城と王族は残ってるの？」
「その時の王女様、デュナミス王女だったかしら。その人がすごい魔法使いでね。城を護る結界を張って、新しい魔法を売ったりしてなんとか一族としては生き続けることが出来たのよ。」
「その結界のおかげで誰にもにも侵略されずにいられたと言うことか…。」
「そういうことね。まあ私も十年近く眠っていたから今はどうなっているか分からないけどね。…さあ、もうすぐ着くわよ。」

暗い森に太陽の光がさす。
森の中、大きな木々が並ぶその場所に、さらに大きな古城が建っていた。

＜バルキュリア城＞

「へえ、ここがバルキュリア城かぁ。」
「なるほど、森の中の古城といった感じか。」

人の気配など全く感じさせないその城のさびれ具合とは対照的に、数組の男女が入城していく。

「でもそのわりには人の出入り多いね。」
「あぁ、普通に城に入って行ってるな。」
「…おかしいわね。本来こんな人が来るような場所じゃないんけど。」
「じゃあ何かあるのかな。…あ、あの入口の人に聞いてみよう。」
城の入口では黒いスーツに身を包んだ長身黒髪、眼鏡をかけた男が礼儀正しく来客を迎え入れている。
「あの、今日ってここで何かあるの？」
「おや、可愛らしい方ですね。本日バルキュリア城では舞踏会が開かれます。」
男は礼儀正しく答えた。
マモリから見てもかなりのイケメンだった。
「舞踏会!?」
「我がバルキュリア城では週に一度、男女の愛を確かめ合うための舞踏会を開いております。」
「はぁ…。」
「城主のパプリカ様は大変慈愛に満ちた方でして、舞踏会にいらっしゃった男女の中で最も素晴らしいダンスを披露されたお二方に永遠の愛を授けるのです。」
「永遠の愛だと？」
「はい、パプリカ様は先代にも劣らぬ魔力を持った方でして…愛の魔法とでも言いましょうか、男女の愛を不滅のものに出来るのです。毎週その力を求めてたくさんの男女が来場されるのですよ。」
どうやらここの城主はパプリカ様というらしい。その人が回復魔法を使えるのだろうか。
とにかくマモリたちの目的はそのパプリカ様ということになる。
「…えと…俺たち舞踏会の参加希望じゃないんだけど、そのパプリ

カ様って人に会いたいんだ。会わせてもらえないかな？」
「佐用でございますか。しかしながらバルキュリア城に入れるのは舞踏会に来られた男女のみとなっております。また、パプリカ様に直接お会いできるのはその中から最も素晴らしいダンスを披露された男女です。申し訳ありませんが、それ以外のお客様はお引き取り下さい。」
「そこをなんとか…。」
「私は一介の執事ですので。もしどうしてもというであれば、相応しい正装をされた上で舞踏会にご参加くださいませ。」
その後しばらく交渉してみたが、執事の男が首を縦にふることはなかった。

仕方なく2人は城から少し離れた。
「あれは入れてくれそうにないな。強行突破するか？」
「そんなことして、そのパプリカ様がへそ曲げたらどうするんだよ？…どこか他の入口探す？」
「駄目だと思うわ。決して浸入や侵略を許さない場所だから。正面以外は結界が張ってあるしね。というかむしろこれはラッキーだわ。城に入れてもらう方法が一番の問題だったんだから…。」
「…そうだな、俺とマモリが舞踏会に出ると言って入ればいい。」
「いやいや、2人とも何言ってるのさ！？無理だよ舞踏会なんて！ていうかジャンとカップルの振りするって事でしょ？嫌だよ！！」
「正装って言ってたな。そんなの用意してないぞ。」
「マモリちゃんがお父さんのタキシードを持ってるんじゃないかしら。それを使いましょう。」
「ちょっと！勝手に話進めないでよ！」
「マモリちゃんはドレスだからね。」
「断る！」
「なぜだ…！」

「…マモリちゃん、これしかないと思うわよ？」
「嫌だ！ドレスなんて着ない！」
「今更…」
「俺はマモリと踊りたいぞ！」
「ちょ、何言ってんだ！他の方法考えようよ！」
「ここで時間かけてたらマモリちゃんの呪い解くのも遅くなるわよ！？」
「…！」
「俺はマモリのドレス姿が見たい！」
「うるさい！！」
「マモリちゃん！ドレスなんて正直イージスやイーフリートの格好の方が露出度高いわよ？それに比べれば…」
「う！！……わかったよ…。」
「うん！さすがマモリちゃん、男らしいわ！」
「男の中の男だな、マモリ！」
「……（よく言うよ…）」
「言葉遣いにも気を付けてね。あなたは永遠の愛を求める淑女！って設定だから。」
「勝手に設定を加えるな！」
「じゃあ俺は姫と結ばれたいがそれぞれの立場が邪魔して結ばれない悲劇のナイトって設定で。」
「いつからナイトになったんだよ！」
「ほら！言葉！中に入れてもらってもダンスで気に入られないと王女様には会えないのよ？」
「言葉関係ないじゃん！！」
「気品ある振る舞いが大事なのよ。」
「…わかった。…わかりましたわ！」
マモリは真っ赤になりながら慣れない女言葉に切り替えた。

淑女マモリ

＜バルキュリア城・城内＞

マモリたちが外で浸入だの正装だのと話している頃、キャロット・バルキュリアは毎週のように行われる舞踏会に参加する男女を見てイライラしていた。

「はぁあ！！また舞踏会か。お姉ちゃんの博愛主義もわかるけど、なんでわざわざ他人の恋路の手伝いなんか！それも会ったこともないような他人の…」

キャロット・バルキュリア。
城主パプリカ・バルキュリアの妹であり、現在彼氏募集中。
波打つようなオレンジがかったブロンドヘアーとそれが一層綺麗に見れるボディライン、割と大きな胸、そして芸能人のような綺麗な顔立ちをしているにも関わらず相手がいないのは、恐らく外出をしないこととその性格に難アリだからだろう。

「他人がラブラブしてるところなんて見ても意味無いっての！！」

キャロットはぶつくさ言いながら、いい加減見飽きた舞踏会のホールとそこにいる男女たちを上の部屋から眺めていた。と、そこに1組の男女がホールに入ってくる。

「あら…あの人…！」

「無事に城内に入れたわね。」
日が暮れる直前、マモリとジャンは舞踏会への参加が認められ無事に城に入ることができた。
「執事さんの微笑ましいあの表情が気になるけどね…」
「まあいいじゃないか！俺たちの関係を祝福してくれてるんだろう。」
「キモイ！」
「マモリちゃん！」
「…気持ち悪いですわ！」
「2回も言われた！！」

マモリは仕方無く、スタートロイでもらった舞踏会用のドレスに着替えていた。
ピンクの髪はアップになり、首回りが大きく開いたキラキラと輝く紺色のドレスだ。
スカートは膝下まであり、腰のくびれを強調するシックで大人っぽい作りだった。
ヒラヒラしたスカートの裾からは花柄のセクシーなストッキングを覗かせており、マモリを一層大人っぽく見せている。
おまけにハイヒール。慣れないせいで、マモリの歩き方はフラフラと内股で頼りないものになっていた。
そしてガメイラは花の形のブローチとしてマモリの胸の上で輝いていた。

外観とは違い、古びた様子もなく掃除が隅々までいきわたっている城内。
とてもキラキラしている。
広い廊下。高い天井。特に舞踏会の会場となるホールはとても広く、いくつものシャンデリアで真昼のように明るかった。
ホールではすでに何十組もの男女が愛を語り合っていた。

「なんか…全体からピンク色のオーラを感じ…ますわね。」
「ん？俺は何も感じないが。」
「そう。…それよりジャン。あなたはダンスなんてできるんですか？」
「ダンスか…そういえば初めてだな！」
「やっぱり…」

よく見れば男女たちは４人組や６人組で話こんでいるところもある。
それぞれの愛の大きさを競い合っていた。

「あら、可愛いお嬢さんですわね。」

１組の男女がマモリ達のところにやってきた。
「あなたたちも永遠の愛を求めているのかしら？」
「ああ、その通りだ！」
ジャンは、どうだ！俺の嫁は可愛いだろう！と言ってマモリを前に突き出す。
「あっ！ちょっと！」
「へぇ、こんな小さいお嬢さんがこんなところまで来るなんて、よっぽどこいつのことが好きなんだな。」
「（ガーン！）」
マモリがジャンにベタ惚れ…そんな風に見られたらしい。
相手の男の方がマモリとジャンの顔を交互に見比べ、笑いながら言った。
ジャンはなぜかその言葉に満足しているが、マモリにはショックだっただろう。
「ふふふ。私たちは結婚を決めているのですけれど、その後もずっと幸せでいられるようにと思って祝福を受けに来ましたの。だから

負けませんわよ。…でもあなたたちも頑張ってね。」
「え…は、はい。ありがとう…ございます…。頑張りますわ…」
女性の方はとても穏やかな顔でマモリに会釈し、男の方の腕を組んでその場を離れて行った。
とても感じの良い女性だ。
マモリは内心、この2人が永遠の愛とやらを受け取ればいいと思ったが、自分たちの目的を思い出し、できるだけ考えないようにした。
「素敵な人たちね…」
「うん…」
「俺たちもああならないとな！」
「…それ…この舞踏会に限っての話だ…ですわよね！？」
「ん？もちろんだ！！」
ジャンは何が嬉しいのか、マモリを見て機嫌よさそうに笑った。

「あ、あの人…カッコイイィィ！！！！」
キャロットは相変わらず上の部屋からホールを眺め、ジャンの姿を見つけて飛び上がった。
「でも何っ！？あのピンクのちんちくりんは！！」
彼氏募集中のキャロットとしては、たとえ舞踏会に来る男がもれなく彼女がいるとわかっていても、チェックせずにはいられないのだ。
「あぁ…あの人も自分たちの愛を見せつけに来たっていうの！？…まあここに来るっていうことはそういうことだもんね…。」

「あ～ダメ！認められない！この舞踏会始まって以来のイケメンだもの！相手があんな…胸もない色気もないような豆女だなんて！！」
当然キャロット基準でのイケメン評価なのだが。

「仕方ないわ…ここからあの2人が破局するように念じてみよっと。ああああ、そういう魔法覚えとけばよかった…」

当然そんな魔法はないし、あってもキャロットは覚えてないのでただの気休めでしかないわけである。

ホールでは豪華な夕食が出され、立食パーティーのようになっていた。

「もぐもぐ…マモリ…ちゃんと食べてるか？もぐぐ…こんなに食い物がでるなってな！ももも…これだけでも来たかいがあったな…！」

「…マモリちゃん、せめて今はあんな食べ方はしないでね。」

「……わかってますわ。」

そう言ってマモリは自分の知りうる中で一番上品な方法で食事をとった。

もっともその方法も、けして上流階級で通用するものではなかったが。

「というかジャン、ちゃんと目的はわかってますわよね？」

「もぐぐ…わ、わかってるさ！ブライのためだばばな！」

「……」

さすがのマモリも別の場所に移動し、自分のペースで食事を始めた。

立食パーティーも良い頃合いになってきたところで、城門にいた執事がホールの正面に現れる。

「皆様、お食事の方は楽しんでいらっしゃいますでしょうか。皆様方におかれましては、我がバルキュリア城の舞踏会にご足労頂きありがとうございます。」

ジャンも食事を中断し、執事の方に顔を向けた。
「私、執事のレオナードと申します。今宵は皆様がより深い愛情を育み、素敵な夜になりますようお手伝いさせて頂くしだいでありますので、どうぞよろしくお願いします。」
丁寧すぎるような口調で執事は話を続けた。
「なお、すでにご存じの事と思いますが、今夜の舞踏会にて最も素晴らしいダンスを…というより最も愛し合っていると思われるお二方には、城主パプリカ・バルキュリア様からのささやかな祝福をお受け取り頂きます。皆様のお互いを思い合う素敵なダンスを、パプリカ様も楽しみにしていらっしゃいますので、どうかそのようなダンスを。」
ホールのほとんどの人間が息を呑んだ。みな目的は楽しむことではなく、その祝福を受けることなのだ。
「それでは、そろそろ始めましょうか。音楽が流れ出しましたらご自由にお楽しみ下さいませ。」
そう言って執事は奥の部屋に向かった。

「ジャン、いよいよ始まりますわよ！」
「おう！俺たちの愛の力があればきっと一番になれる！」
「…本気で言ってるの？ダンス初めてなんでしょう？」
「大丈夫だ！さっきの人も最も愛し合ってる2人が一番って言ってただろう？」
「（なおさら望み薄いじゃん！）」
「まあダンスの方はマモリちゃんに任せてたら大丈夫だと思うわよ。フルアーマーの魔法で今のマモリちゃんはダンスもとても上手になってるはずだから。ジャンくんはマモリちゃんに体を預けて。」
「マモリに体を預ける…ゴクッ…」
「今！変なこと考えなかったか！？」

そして優雅なクラシックメロディーがホール全体に響き始める…。

舞踏会

流れる音楽に合わせ、ホールいる男女たちが踊り始める。
永遠の愛のために練習を重ねてきたのか、どの組も遜色ない美しいダンスを披露していた。
ホール全体は一見楽しく優雅に見えるが、他の組みを意識し合っているのがはっきりわかる空気だ。

一方マモリは、ジャンの滅茶苦茶な踊りをフォローしながらぎこちないダンスを続けている。
手を引き、足を運ばせ、なんとかダンスの形を保っていた。
マモリ自身も魔力によって体が自然に動く。または次にどう動くべきかがわかるようだ。ダンスとなると、慣れないはずのハイヒールで華麗なステップを踏んでいる。
しかし、ダンス自体に慣れているわけではないので戸惑っているのが表情に出ていた。
その様子は残念な意味で目立っていた。

「ジャン！もう少し上手く動けないのですか？」
「おおぅ、悪いマモリ…」
「ジャンくん、そこで右足を前に。はい、ワン・ツー、ワン・ツー。」
なんだかダンス講習のようになっていた。

「（あの2人なんなのかしら…）」
「（まるでなっていないな。）」
「（あの子たちには買ってるわね。）」
「（クスッ…子どもが背伸びしちゃって。可愛い。でもあれじゃ駄目ね。）」

周りの男女はマモリたちのダンスを見て、余裕の笑みを浮かべたり、優越感に浸ったりしていた。

「――なんなのあの子！私の王子様に恥かかせてるんじゃないわよ！」

上の部屋ではキャロットが2人のダンスがあまりにもふがいないために、そのイライラをさらに増していた。

実際ジャンがマモリの足を引っ張っているのだが…恋は盲目というやつである。

「…でも、これであの2人がお姉ちゃんに選ばれることはないわね。舞踏会が終わったら下に行ってあの人に声かけてみよう。」

――コンコン

「ん？誰？」

「私よ、キャロット。」

「ああ、お姉ちゃん。入っていいわよ。」

入ってきたのはシルバーの美しい髪、絶世の美貌とも言えるような２０代後半くらいの綺麗な女性だった。

まさしく、キャロットの姉、パプリカ・バルキュリアである。

「どうしたの、お姉ちゃん。」

「たまにはあなたと舞踏会を鑑賞するのもいいかと思って。…今夜はどう？素敵な恋人たちはいるかしら？」

「知らないわよそんなの…。お姉ちゃん他人がいちゃいちゃしてるの見て何が楽しいの…？」

「あら、素敵じゃない。今この城の中にたくさんの愛が溢れてるのよ？これってとても幸せなことじゃない？」

「何それ全然わからない！だってあたしには一緒に踊ってくれる人なんていないんだもん…。」
「だったらキャロットも良い人を見つけて恋をすればいいのよ。私は早くこのホールであたなが素敵な男性と踊るところを見てみたいと思っていたのよ。」
「（あたしだってそうしたいっての！…でも今回はそのチャンスだわ。やっとあたしのタイプの人が現れたんだもん！でもこのことお姉ちゃんに言うと怒りそうよね…。アンチ略奪愛って感じだしね。）…お姉ちゃんこそ、遠くで暮らしてるお相手様とはどうなのよ？よく城を留守にするけど、その人に会いに行ってるんでしょう？」
「ふふふ、私たちも愛し合ってるわよ。でもあまり会えないから…この舞踏会の人たちを見てるとその寂しさが薄れるのよ。」
「ふーん、…だったらもっと会いに行けばいいのに。この城にはあたしもいるし、レオナードだっていてくれるんだから。」
「…そうね。」

それからしばらく2人で下のホールの舞踏会を鑑賞していた。

舞踏会も終盤に差し掛かり、ホール全体も盛り上がっていた。どの組もできる限り美しいダンスを披露することに必死になっている。
マモリたちもそれは同じで、マモリはできるだけジャンをリードできるように…ジャンもできるだけマモリの動きについていけるように踊っていた。
さすがにジャンも慣れてきたようで、動きもだいぶ見られるようになってきたが、練習を積んでいる他の男女とは比べ物にならない。
「わ！」

マモリがジャンの足つまずき、よろめく。
「あ、マモリ！」
ジャンは握っていたマモリの手を引き、膝をついてマモリを抱きかかえた。
その体勢のまま音楽は鳴り止み、図らずしも2人はフィニッシュを決めてしまった。

マモリたちがちょうどフィニッシュを決めたところでホールは暗くなり、どこからともなく先ほどの執事レオナードが現れる。
レオナードのいる場所にスポットライトが当たり、司会者としての立場が際立っていた。
「皆様、今宵はお楽しみいただけたでしょうか。」
相変わらず丁寧な口調で喋りだす。
「残念ながら本日の舞踏会も終わりの時間が迫って参りました。」
数人の男女がパチパチと手を鳴らす。
「今回の舞踏会はまた一団と素晴らしいもので、私も皆様のダンスと愛情に関心いたしました。皆様もお相手の方との愛情が一層育まれたのではないかと思います。」
ホールのパチパチという音が次第に大きくなっていく。
「皆様にはまた、ぜひともこの舞踏会に参加していただきたく思っております。城主パプリカ様も、皆様のダンスにとても満足しておられる様子でした。本当にありがとうございます。…それでは最後になりますが、本日のダンスで城主パプリカ様のお気に召されましたお二方を発表いたします。」
どの組みもこの時を待っていましたという具合にうずうずし始めた。
「（…王族の人に会うにはここで気に入ってもらうのが一番早いんだけど…無理だろうなぁ。…今のうちに他の方法考えといたほうがいいかな。）」

マモリは実際もう駄目だと諦め半分だった。自分たちのダンスが明らかに他に劣っていたことはわかっていたからだ。

上の部屋にいるキャロットは、どうでもよさそうにホールを見ていた。

「…今日も退屈なパーティーだったわ。見てるだけなんだから当たり前だけど。でも素敵な人を見つけたし、…みんなが帰りだしたら声かけにいっちゃおう！」

さっきまでいたパプリカは、永遠の愛の祝福の準備と言って少し前に部屋を出ていたので、今はまたキャロット一人になっていた。

「そう言えばお姉ちゃん、毎回自分が気に入ったカップルを選んで会ってるのよね。永遠の愛の祝福とか言って…。どんなことしてるんだろう？」

そんなことを考えていたキャロットに、ある作戦が閃いた。

「……あっ！もしその祝福を私があの人と受けとることができたら簡単にラブブになれるんじゃないかしら！！お姉ちゃんの魔法ならそれくらい簡単なはず！…ちょっとお姉ちゃんのところ言って来なきゃ！」

キャロットは半暴走気味に部屋を飛び出した。

ホールでは暗い部屋にスポットライトがぐるぐる回っている。どの男女も自分達が照らされることを祈っているようだ。

マモリは半分あきらめていたが、どういうわけかジャンは自信に溢れている様子だ。マモリにはそれが意味わからないようだった。

「では、発表いたします。」

執事のレオナードは、一息置いて、続けた。

「このお二方です。」

マモリとジャンにスポットライトが当てられた。

「えぇ！！？」

淫欲の部屋（前書き）

注意：ややＢＬ入っています。

ザワザワ…

「なんであの子たちが…？」

「あんな下手なダンスで…」

「そんな…せっかくこんなところまで来たのに…」

「やったなマモリ！！俺たちのダンスが一番だったみたいだぞ！」

「…なんで俺…私たちが？」

「決まってるだろ！俺たちの愛が認められたんだ！！」

「（うわぁ…全然納得できない！）」

「いやぁ、どうやらここの城主はかなり見る目があるみたいだな。」

「節穴としか思えませんわ。」

「ちょっと！どうしてこの子たちなのよ！？」

当然他の組はこの結果に納得できないようで、あちこちから抗議の声が上がり始めた。

レオナードはその抗議を？き消すように目をギラつかせた。

「彼らのダンスは確かに不恰好ではありました。しかし、相手にペースを合わせようとする思いやりは、とても強く感じられました。真実の愛とは思いやり、どれだけ相手に合わせ、歩み寄れるかだと…パプリカ様はおっしゃっておられます。そして今回の舞踏会でそれを一番感じさせたのは彼らだと。」

「（そんなこと全く意識してなかったんだけど…）」

マモリはただジャンを引っ張ることに必死だったし、自分も初めてのダンスでただテンパっていただけだ。

「でも…」

「申し訳ございません。全てパプリカ様のご意志ですので。それでは、そちらのお二方は私に着いてきて下さい。」
そう言ってレオナードはマモリとジャンを引き連れ、奥の部屋へと進んでいった。
残された他の男女はしぶしぶと城を後にしていく。

＜バルキュリア城・地下＞

「なんだか話がうますぎるわね。」
ガメイラが心配そうに呟いた。
「まぁ…でもこれでパプリカ様に会えるなら結果オーライじゃない？」
「ああ！あとはその姫様に頼んでウォーロッセオでブライを治してもらうだけだ！」
「そうだけど…」
「ところで、えっと…レオナードさんだっけ？」
「はい。」
2人の前を歩くレオナードは立ち止まらず、振り返らずに返事をした。

「そのパプリカ様ってどんな人なの？」
「パプリカ様ですか。とても慈悲深いお方ですよ。どんな時でも笑顔を絶やさず、自分のことを後回しにして周りの人のことを考えられるお方です。また、非常に賢い方でして、この城がこんな人里離れたところにあるにも関わらず私共が不自由なく暮らせるのもあの方のおかげなのですよ。」
「へぇ…すごい人なんですね。」
「ええ、ここしばらくは愛について研究されているようで、この舞

踏会もその一環なのです。」
「愛の研究…？」
「はい。私もあまり詳しくはないのですが、愛の力と魔法の力には強い関係があるとおっしゃっておりました。事実、パプリカ様は魔法使いとしてもとても優秀な方なのですが、特に回復魔法に至ってはこの大陸では一番ではないかと。時々パプリカ様に病を治してほしいとこの城までいらっしゃる方もおられるのですよ。それもパプリカ様の愛情と慈悲深さあってのことかと。おそらくはより強い回復魔法を得るために研究しているのではないでしょうか。」
「ほんとに！？」
「これは思った以上に期待できそうだな！」
「（より強い回復魔法…確かにバルキュリアの王族ならありうるわね。）」

それからマモリたちしばらく城内を歩かされ、少し広い所で止まった。
目の前には普通の扉。
「では、こちらの部屋でお待ちくださいませ。」
レオナードは扉を開き、マモリたちを部屋へといざなった。
「…何この部屋…？」
そこは壁も床も真っ白で、中央にベッドがぽつりと置いてあるだけの不思議な部屋だった。
「ベッドしかないな…それにこの香り…」
「香り？」
ガメイラには匂いを感じ取ることはできないようだ。

「じきにパプリカ様がいらっしゃいます。それまでどうぞ、お寛ぎください。」
そのままレオナードは部屋を退散し、扉を閉めた。
部屋にはマモリたちだけが取り残される。

「くつろげと言われてもな…」
「まあいいじゃん！俺ずっと野宿だったから疲れてるんだ。あのベッドで横になってよ。」
「ちょ…マモリちゃん！」
マモリはフラフラとベッドに向かった。
えらく大きなベッドで、3人くらいは余裕で寝れそうだ。

「あぁ…ふかふか。気持ちぃ。」
マモリがパサっとふかふかベッドに横になる。
「ジャンもおいでよ。一緒に寝よう？」
「マモリちゃん！？」
「何！？（…いつもなら絶対そんなこと言わないのに…どうしたんだ？）」
よく見ると少し赤くなっているマモリ。
ジャンもマモリの様子に違和感を感じつつも、フラフラとベッドに向かってしまう。
「（まあいいか…俺も疲れてるし。少し休もう。）」
ジャンもまた、マモリの隣で横になった。

「（なんだろう…なんかジャンがすごく格好よく見える…。って俺男なのに…格好いいって…でも…）…ジャン……」
「マモリ…（こいつ本当に…華奢だなぁ…色も白くて…やっぱり可愛い。男だとわかっていても…なんだか…）」
「ちょっと！どうしたの2人とも！何か変よ！？」
ガメイラは顔を赤くし、見つめあっている2人の仲裁に入った。
「ガメイラ…ちょっと黙ってて。今はジャンとお話してるんだから。」
「お話って…」

だがあっさり邪魔者扱いされてしまった。

「マモリ…可愛いな…もっとそっちへ行っていいか？」
「えへへ。（あれ？いつもは嫌なはずなのに……なんか嬉しい…）うん…来ていいよ…」
ベッドの中、少しずつ近づいていく2人。
「（何なんだろう…俺なんか変だ…。ジャンに触りたい…。こんな風に思うなんて…）」

「（これは…可愛すぎる！どうなっているんだ！？罠か！？…でも俺の気持ちも…これは我慢できない！）」
「（うわぁ、ジャンがどんどん近付いて来る…。顔がこんな近くに…恥ずかしいな…。って俺なんでこんなにドキドキしてるんだろう…心臓の音ジャンに聞かれたら…）」
「マモリ。」
「え？」
「…抱きしめていいか…？」
「っ！…（だ、駄目に決まってるだろ！？俺男なのに……でも、何この気持ち…俺、ジャンに抱きしめてほしいって思ってる……）…うん…優しく…」
「ああ。（……マジか！どうなってるんだ？マモリが壊れた。そして俺も壊れたのかもしれん！マモリをこんなに可愛いと思うなんて…いや、前から可愛いとは思ってたけど…今日のマモリは特別だ…！）」
そしてジャンはマモリをそっと抱きしめた。

「…わかったわ！これは誘惑の魔法の一種だわ！目を覚ましてマモリちゃん！ジャンくん！」
ガメイラがこの異常な状態の正体に気づき声を荒げるが、すでにその声は2人に届いていなかった。

「あぁぁ…もう魔法が効き始めてる。私の声が届かなくなってるみたい…。何とかしなきゃっっって、私じゃどうしようもないわ。…どうしたら…」

ガメイラはただのアクセサリーだ。自分の意思で動くことはできない。

「歯がゆい…」

「マモリ…好きだ…」

「（えぇ!?な、何言ってるんだよジャン!…でも…なんでか、嫌じゃない…。俺本当に、どうしちゃったんだろう）……うん…」

「…いいか…?」

「……うん…（ってダメだろ!……あぁ、でも…拒めないよ…俺、変になってる…）……ジャンなら…いいよ…（ふぁあ…俺も何言ってるんだよぉ）」

ジャンはマモリの唇に自分の唇を少しずつ近付けていった。

目を閉じてじっと待つマモリ。

その時、部屋の扉が勢いよく開いた。

キャロット・バルキュリア

数分前。

キャロットは城内を走り回っているのだが、舞踏会の後どこで気に入った者たちに会っているのか知らなかったので、城中探しまわらなければならなかった。

「お姉ちゃーん？どこぉお？……早くしないとあの人帰っちゃうよ…いっそあの人を先に捕まえた方がいいかしら…」

「おっと！」

城の奥、上より先に下と思い、地下を探しているところで、レオナードとその後ろに歩いているマモリとジャンを見つけた。

「うそっ！！？なんであの2人がレオナードと一緒にいるわけ！？っまさかあの2人が選ばれたっていうの！？！？……お姉ちゃん何考えてんのよ！」

キャロットはこの2人が選ばれることだけは絶対にないと安心しきっていたため、この結果は衝撃的だった。

「…まあいいわ。ここはこっそり着いていって、お姉ちゃんが来たときに出てってあの人を奪ってやればいいんだから。お姉ちゃんがなんて言うかわからないけど、こうなったら少しくらい強引に…」

などと考えていると、レオナードが振り返ってきた。

まるでキャロットの存在に気付いたかのように。

慌てて隠れるキャロット。

「（やばっ！レオナード、あいつ鋭いから見つからないようにしなきゃ…見つかったらきっとどやされるわ。）」

というわけで、キャロットはこっそりと3人について行ったのだった。

そしてマモリたちが部屋に入り、レオナードが部屋から出てその

まま別の道を戻っていくところまでを見送っていた。
さらにその後、キャロットは部屋の扉に耳をあて、中の声を聞いていたのだ。

そして現在。

勢いよく部屋の扉を開くキャロット。
「ちょっと待ちなさぁぁぁぁぁい！」

と、誰でも不意にこんな怒声をあげられたらビクっっとなるような声をあげたのだが、マモリとジャンの唇は未だお互いの唇を求めて距離を縮めている。
2人ともキャロットの存在に気づいていないのだ。

「なっ…無視しないでよ！！そこのピンク色！その人は私のものなのよ！離れなさい！！」
マモリに対してダイレクトに、指さしながら命令するが、その声は全く届いていない。

マモリにはジャンしか、ジャンにはマモリしか見えていないのだ。

だがガメイラはキャロットに反応することができた。
「えと…誰だかわからないけど、あなた！この2人を止めてぇ！！」
「な…どこからともなく声が！とうとうこの城にも出るものが出たっていうの！？」
「いいから、早く！」
「って言われなくてもそのつもりよ！！たぁっ！」

キャロットは勢いよくジャンプし、ベッドのちょうど真ん中、マモリとジャンの間に割り込むように飛びついた。
必然的にマモリとジャンの距離が離れる。それによってマモリの赤くなっていた顔が元に戻り、慌ててベッドから飛び降りた。

「あぁ…俺、今まで何してたんだ!ジャンとあんなことしそうになるなんて…」
我に帰ったマモリは、自分のしようとしていたことを思い出し、頭を抱える。

一方ジャンは、それほど変わった様子もなく、ベッドの中でまだもぞもぞしていた。
「(…なんだか…すごく惜しいことをした気がするな…)…ん?」

「え?…誰?」
ようやくベッドの上の見知らぬ女性の存在に気づくマモリとジャン。

「危なかった…もう少しで彼の麗しい唇が奪われるところだったわ。」
キャロットは手をそっとジャンの頬に添わせ、うっとりした眼で見つめる。
「なんだお前は!ここにはさっきまでマモリが!!」
驚いたジャンはキャロットを突き飛ばした。
「キャッ!!…もぅ、乱暴しないでよ!せっかくこの女から唇を守ってあげたのに!」
「(女…?あぁ、マモリのことか!やっぱそう見えるんだな…)…って、そんなことは望んでねぇ!俺の大事な時間をどうしてくれるんだ!!」

その誰かもわからない女に本気で怒るジャン！
「いや、俺的にはナイスプレイだよ！でも一つ訂正しておくと、唇を守ってもらったのはどっちかって言うと俺の方だから！っていうか誰なの！！？」
マモリは心底助かったとその女に感謝した。だが同時につっこみと疑問も忘れていなかった。
「マモリちゃん、訂正するところそこなんだ…。でも、この人がマモリちゃんの貞操を守ってくれたのよ。」
ガメイラが言う。
「いや、それはわかってるよ。」

「ふん、私はキャロット・バルキュリア。この城の主よ！」
キャロットは気丈に名乗った。
「…何！？」
「バ、バルキュリアだって！？」
マモリは興奮して再びベッドに飛び乗った。
「バルキュリアってことは、この城の王族？」
ガメイラも食いつく。
「だからこの城の主だって言ってるでしょう！？そ・れ・よ・り…あなたの名前を聞かせてくれないかしら？」
「俺か？俺はジャンだ。それよりおまえ…」
「ジャンって言うのね！私のことはキャルって呼んで！」
「はぁ！？」
「私さっきホールで踊っているあなたを見て素敵な人だって思ってたのよ！カッコイイなって！不器用にもダンスを頑張る姿がまた良くって……それに格好よくって頭も良さそうだし！だからこんな女放っておいて私と一緒に永遠の愛を手に入れない！？お姉ちゃんももう来るだろうし！」
とても早口で言いたいことをぐいぐい言うキャロット。
「クス（頭良さそうだって）…ふぎゅっ！」

キャロットはマモリの顔面に掌を押し付けた。

「お姉ちゃんが来たらお姉ちゃんの魔法で私とジャンの愛を永遠のものにしてもらうの！いいでしょ！？」

「いいわけあるか！俺にはマモリが！」

「ふがふが…」

顔面に押しつけられた手によってしゃべれないマモリ。

「…ていうかその手を放してやれ。」

「こんな女に気を遣わないで。それより…」

「ねぇ、あなた。」

ガメイラが　マモリの胸元から声を出した。

「きゃ！さ、さっきの声！！お化け！？」

「あぁ、そいつはお化けじゃなくて、マモリのなんとか魔導具ってやつだよ。なぜか喋るんだ。」

キャロットにガメイラのことを説明するジャン。

「なんとかって…それよりあなた。王族なら回復魔法が使えるんじゃないの？」

「え…？まぁ、普通に使えるけど。それがどうしたのよ？」

「…ふがが！」

意外と握力がある。

「そうだ！回復魔法だ！！おまえキャロットだったな！回復魔法が使えるなら俺たちと一緒に来てくれ！！」

「ええ！！？（…何これ？一緒に来て？いきなりそんな大胆な告白されても…でもこの人の言うことなら……まって、でもこれって駆け落ちってやつになるんじゃないの？お姉ちゃんもなんて言うかわからないし。それにまだ永遠の愛も…いえ、ここまで言ってくれる人ならお姉ちゃんの魔法なんてなくても永遠の愛に発展するはずよ！いやでも…私がこの城を出たら…）」

ようやくキャロットの手を振りほどいたマモリ。

「ぷはっ！そうだよお姉さん！俺たちと一緒に来て！頼みたいことがあるんだ！！」
「あなたは私とジャンの愛に口出ししないで！」
「いや、愛とかじゃなくて回復魔法を…」
「いいよ！俺２人の愛を応援するよ！！（なんかその方が早く事が進みそうだし、ジャンもおとなしくなりそうだしね…）」
マモリはキャロットの気持ちに乗っかることにした。
「な！マモリ！！」
「はぁ？あんたは今現在のこの人の恋人でしょう？まぁそれももう終わりだろうけど。そのあんたがなんでそんなこと言うのよ？」
キャロットがジト目でマモリを睨む。
「俺たちはこの城の王族に会うためにしかたなく舞踏会に参加したんだ。別に永遠の愛とかが目的じゃなくてさ。だから俺は別にジャンの恋人じゃないし…好きなわけでもないから！！」
声を一層張り上げるマモリだった。
「マ、マモリ…（ガーン）」
「…でもさっきこのベッドで今にもキスしそうになってたじゃない…」
「それは…俺たちにもよくわからないって言うか…」
「はぁ？」

「誘惑の魔法よ。いえ、淫欲の魔法と言ってもいいかしら。そのせいでマモリちゃんたちは変になっちゃってたのよ。この部屋中にかけられてるわ。」
ガメイラはこの部屋の魔力とマモリたちの様子から冷静に分析して、部屋の魔法の正体に気づいていた。

魔界樹アウタナ

＜バルキュリア城・とある場所＞

「パプリカ様、例の2人を部屋に通しました。」
「ええ。わかっているわ、レオナード。そろそろ参りましょうか。」
「はい。ですが…申し訳ありません。キャロット様が…」
「それもわかっているわ。あの子、本当に空気が読めないわね。いつもは無関心に舞踏会を眺めているだけなのに…今回に限って…。まああの子にも十分役に立ってもらうわ。むしろ好都合かしら。あなたもそう思ったから見逃したのでしょう？…レオナード。」
「…はい。」

暗い暗い部屋。水晶玉がうっすら照らす部屋の内装は、水晶玉を置くテーブルとイスがあり、周りにはたくさんの道具が置いてあった。。おそらく魔法に使う道具や魔力の込められた魔導具だろう。
そのイスに座って水晶玉を見つめるパプリカは、クスクスと笑いながらレオナードと話している。

だがすぐに席を立ち、レオナードを後ろに従え部屋を後にする。

「キャロット…もうちょっと育てて利用しようと思ったけど、今ならちょうどいいわね。残念だけど、今日でお別れね。」
「……情が移りましたか？」
「ふふ……まさか。」

＜バルキュリア城・地下の部屋＞

「淫欲の…魔法？」
誰もそんな魔法は知らなかった。
「要するに……エッチな気持ちになる魔法よ。だからマモリちゃんもジャンくんもさっき変になってたわけ。」
「そんな……」
マモリはそのショッキングな魔法とさっきまでも行動を思い出し、口をパクパクしている。
「なるほど……淫欲の魔法ね。きっとお姉ちゃんが開発したんだわ。」
キャロットも考え半分で答えた。
「開発？」
「うん、お姉ちゃんは魔法の研究が趣味で、自分で魔法を作り出すことができるのよ。」
「お姉ちゃんって…城主のパプリカ王女のことよね？」
「そうよ。」
「そういえばあの執事のおっさんが、愛の研究がどうとかいってたな。その淫欲の魔法って言うのもそのうちなのか？」
「ええ、たぶんそう。……でもよかった！さっきのはお姉ちゃんの魔法のせいだったのね！その子も応援するって言ってるし、これで安心して私たちは愛し合えるわ！」
キャロットは喜々としてジャンに抱きついた。
「なんかスゴイ人だけど…これで目的は達成だね。」
マモリがほっと一息ついた時、３人を乗せた大きめのベッドが宙に浮いた。
ゴォォォォオ
「うわぁ！」
「きゃっ！！」

「おおお！！！」

ベットが突然回転しだした。
いや、遠心力などは感じない。
ベッドでなく周りの景色が回り出したのだ。

「えぇ！？ちょ…なんなのこれ！？部屋が回ってるみたいだけど…キャロットさん！？」
「知らないわよ！私だってこの部屋に入ったのは初めてなんだから！」
「目が回る～～っ」

部屋の回転スピードはどんどん加速し、もはや目では追えなくなっていった。

「これは…転送魔法だわ！」
目を回す必要のないガメイラが冷静に答えた。
「転送魔法…？」
「このベッドがどこかに転送されてるのよ！」
「どこかって…どこに…わぁぁ！」
「キャーーーーー！」
「きゅ～」

そして3人を乗せたベッドは、部屋からその姿を消した。

＜バルキュリア城・アウタナの間＞

そこはマモリたちがいた地下室よりもさらに地下。

そこには城のホールよりももっと大きな空間が存在し、さらにはその空間の大半を占める巨木がひとつそびえ立っていた。天井の高さは普通の高さの塔がまるまる一つ入るくらいあるだろう。しかし、その巨木はさらにその天井をに突き刺さり、頂点が見えなくなっていた。

「魔界樹アウタナ…世界樹ユグドラシェルと対をなすもう一つの世界樹。無限の魔力を蓄積し、触れた者の魔力を根こそぎ吸い取る恐ろしい樹……いつ見ても惚れぼれするわ。」

パプリカはうっとりと、その巨木を見つめていた。

「毎度申し上げておりますが、お気を付けください。アウタナのさらに恐ろしいところは、触れた者の魔力だけでなく生命力まで吸収するということ。うかつに触れれば私もパプリカ様も只では済みません。」

レオナードはパプリカに対し、丁寧に注意を促す。

「わかっているわ、レオナード。」

「それならばよろしいのですが……そろそろ彼らが参ります。」

魔界樹アウタナの根元。パプリカとレオナードの目の前に急に小さな竜巻のような、光の渦が巻き起こった。

次第にその渦は勢いをなくし、マモリたちを乗せたベッドが現れる。

「はぁぁ…やっと景色が落ち着いた…。」

「気持ち、悪い…うっぷ！」

3人ともフラフラになっている。

「あ！お姉ちゃん！それとレオナード！」

パプリカの存在に気づいたキャロットは、目の前の姉の姿に声を

張り上げた。
「…いらっしゃい、キャロット。」
「お待ちしておりました。」

「あ…さっきの執事の人。」
マモリもジャンも気づいたようだった。
「レオナードです。」
「よく来てくれましたね。お二人のダンスはとても素敵でしたよ。」
「あ…あなたがパプリカ王女、様?」
「はい。私がパプリカ・バルキュリアですわ。」
パプリカはドレスの裾を摘み上げ、丁寧にお辞儀をした。

「美しい…」
ジャンがパプリカの美しさに見とれている。
「ちょっと!お姉ちゃんに見とれないでよ!!」
すっかりジャンを自分のものだと勘違いしているキャロットは、ジャンの意識が姉に向いているのを許せなかった。
「あら、キャロット…いつの間にそんなに仲良くなったの?」
「さっきよ!私にもやっといい人見つかったんだから!!」
そう言ってまたしてもジャンに抱きつくキャロット。
「あの、俺達パプリカ様にお願いが会ってきたんだけど、もうこのキャロットにお願いすることにしたんだ。もともと永遠の愛なんていらないし、城から出してくれないかな?」
「ちょっと駄目よ!せっかくだし私とジャンは今からお姉ちゃんに永遠の愛をもらうんだから!」

マモリはキャロットを差し置き、少し申し訳なさそうに自分たちの目的をパプリカに説明して、この場所から出してもらうようにお願いしてみた。
しかし…

「ふふふ、それは駄目よ。」
「え？」
パプリカは魔界樹アウタナの方を指差した。

「な…何よこれ！？」
キャロットは目を大きく見開いて根元から天井まで見渡した。
「大きい…」
そのあまりの大きさと存在感に、この空間に来たときは誰もアウタナを認識できないでいた。何も言わなければそれはただの壁としてとらえてしまう。それほどの大きさなのだ。
「魔界樹…アウタナ…？どうしてここに…？」
ガメイラはそこにあるはずのない木に驚いた。

「ここは……魔界なの？」
ガメイラはパプリカに問いかけた。ずっと転送魔法の行き先が気になっていたのだ。
「いいえ、ここはバルキュリア城の地下よ。人格魔導具さん。」
今はブローチの形をしているガメイラを、知っていたかのように人格魔導具と言い当てるパプリカ。

「あたし…城にこんな場所があるなんて知らなかったわよ…？」
「ええ。あなたには黙っていたからね、キャロット。」
パプリカは常に余裕の表情を見せている。

「……おい…あれ！！」
木をよく観察していたジャンが何かに気づく。
幹の木目に取り込まれるように埋もれている白いもの。
「あれって……人間の…骨？」
「キャーーーー！！」

キャロットが悲鳴をあげてジャンに抱きついた。今度は嬉しそうにではなく、震えながら。

よく見ればそこには数十、数百を超える数の骸骨が埋まっていた。だがさらによく見れば、樹の色とどうかしてあまり目立たないが…まだ肉の残った人の姿も少なからずある。

ゾンビのようにドロドロになっているものも。

マモリたちはその光景に言葉を失っていた。

パプリカの狂気

3人は驚愕していたが、ガメイラもまた、驚きを隠せないでいる。

「これは…魔界樹アウタナ。魔力と生命力を喰らう恐ろしい樹よ。本当は魔界にあるはずなんだけど。」

「あら、よく知ってるいますわね。さすがは……クスッ」

パプリカはガメイラのことをさらに知っているようだった。

「…どうしてアウタナの樹がこんなところにあるの?」

「ふふふ。この城を守るためですわ。もともとは…ね。」

3人のうち、キャロットだけはパプリカの方に向き直る。

愛すべき姉が、平然と、微笑みながら、いつもどおりに、このおぞましい樹のことを話しているのだから、キャロットはもう訳がわからない。

「……お姉ちゃん…どういうことなの??」

「キャロット…あなたも知ってるでしょう?この城の結界を。もう100年もの間この結界は城を守っているの。一度も尽きることなくね。」

「…それは……知ってるわ。だから私たちも安全に今まで過ごしてこれた……。」

ジャンも目を鋭くさせてパプリカの方を睨みつける。腕には震えるキャロットを抱えたまま。

マモリも恐れながら話を聞いていた。

「そうよ。でもその魔力ってどこから来てると思ってるのかしら?さすがに私がずっと結界を張り続けるなんてできないでしょう?」

「それは…」

「(たしかにそうね…。私の知識にもバルキュリア城のことはほとんどない…。謎が多いわ…。)」

知識の塊であるガメイラにとっても、バルキュリア城の結界については知らなかった。

「このアウタナの樹はね、無限の魔力を持っているのよ。尽きることのない無尽蔵の魔力…。その魔力を結界にあてているのよ。」

「……でも…魔界の植物がこんなところで１００年も生きていられるはずがないわ！」

ガメイラが声を上げた。

「ええ、さすが…良い所に気が付きますわね。魔界の植物は太陽が嫌いです。だからこんな地下の地下にあるっていうのも一つなんですけど、いくら生命力に溢れた魔界樹アウタナでも、こんなところで生きていけるはずがありません。でも…」

「…でも……？」

「時々少しの肥料を上げるだけで、十分生きられるんですよ。」

「…肥料？」

キャロットがまさかというように、声を震わせて聞いた。

「ええ。肥料とは上質の魔力。特に愛に満ちた女性の魔力は素晴らしいものなのよ。」

「……つまり…あの舞踏会で一番愛し合ってる人たちを選んでたのって……」

「勘がいいわね、キャロット。」

パプリカはにっこりほほ笑む。

つまり、パプリカは毎週舞踏会を開き、その中で最も愛に満ちた上質の魔力を持つ者を見つけてその者たちをアウタナに捧げていたのだ。

「最低ね…」

「こんなやつにブライを治してもらおうと思っていたのか…」

ジャンはパプリカに見とれてしまった自分が恥ずかしくなった。

「じゃあ、あの部屋は……」

「愛をさらに深くするための部屋よ。人間が2人であの部屋に入れば自動的にお互いを求めるようになるのよ。男女はもちろん、男同志でも女同志でも。そしてベッドでセックスすればとても素敵な快楽を楽しめるわ。愛と魔力は密接な関係にあるのよ。そしてそのまま眠りに堕ち、2人は気付くこともなくアウタナに捧げられる。……永遠の愛って言うのも満更嘘じゃないでしょう?愛し合ったまま眠って死んじゃうんだから。」

その言葉に、マモリもジャンもパプリカの人間性の恐ろしさを感じた。とても頼みごとができる相手ではない。

「そんな……じゃあ俺たちも?」

「ふふふ。行ったでしょう?ここからは出さないって。本当はそっちのガタイの良い君だけをアウタナに捧げようと思ってたんだけどね。」

パプリカはジャンのほうを指差した。

「そっちのピンク色の…マモリさんには他の用があるのよ。」

「俺のこと…知ってるの!?」

マモリはパプリカに見つめられ、背筋を凍らせた。

「ちょっと待ってよ、お姉ちゃん!!ジャンを…この木に捧げるって…ジャンを殺すってこと!?」

キャロットも聞いていて我慢できなくなったらしい。

ベッドから飛び降りてパプリカの方へとずかずかと踏み出した。

「いくらお姉ちゃんでもそれは絶対にさせない!!あの子がお姉ちゃんとどんな関係があるかしらないけど…とにかくここから出して!!」

キャロットはパプリカの目の前で足を止め、強気にパプリカを指差した。

「クスッ…キャロット、今のあなたは最高よ。やっと愛に目覚めてくれたのね。」

「そうよ!!だからここから出して!!」

「ふふふ。駄目よ…今のあなたからはとても強い魔力を感じるわ。これならあの装置を起動できる…。」
パプリカは目の前のキャロットを見て、ニヤッと不気味に笑った。
「え？」
「あなたの魔力が必要なの。」
「は？…お姉ちゃん何言ってるの？」
「あ、それとねキャロット。私はあなたの姉というわけではないのよ。」
パプリカは冷たく言い放った。
「姉じゃないって…どういうこと？」
「レオナード！！」
「は！」
さっきまで沈黙を守っていたレオナードが急に動き出し、キャロットを担ぎあげた。細身のくせに片手でひょいっと、軽く。
「連れて行きなさい！」
「ちょ、ちょっと放しなさい！レオナード！！」
キャロットの言葉を無視してパプリカの後ろの小さな脇道へ足を進めるレオナード。
キャロットは上でギャーギャーと騒いでる。
そのままレオナードはアウタナの間を出て行ってしまった。
「ねぇ、ジャン。あの子…キャロットを追いかけた方がいいと思うんだ。」
「俺もそう思う。目の前の女じゃ一緒にウォーロッセオまで来てくれそうにないしな。それにあのキャロットって女もこの様子じゃ何をされるかわからない！！」
「よし、ジャンはキャロットを追って助けてあげてよ！」
「マモリは？」
「この人、僕に用があるみたいだからね…」

「……わかった。でもこの女、普通じゃない。すぐ戻ってくるから気をつけろよ！」
「うん、ありがとう。」
ジャンはキャロットとレオナードを追って2人が入って行った脇道に向かった。

するとジャンの足もとからたくさんの蔓が伸びて、みるみる人のような形になっていく。
それが１０体ほど、あらわれてジャンの周りを囲んだ。ジャンの行く手を妨害している。
「ふふ、それはヴァイマンっていう植物型の魔物よ。あなたはアウタナの生贄なんだからおとなしくしておいてくれるかしら？」
聞く耳持たぬと、ジャンは両手を地につけ、逆立ちをした状態で足を大きく開き、そのまま回転した。その独楽のような蹴りで周りのヴァイマンが切り刻まれていく。
「あら！！彼強いのね。油断したわ。でも…」
だがまた新しい蔓が伸び始めた。

「そうはさせないよ！！フルアーマー・イーフリート！」
マモリの服がシックなドレスから燃えるような赤いチャイナドレスに変わる。短いスカートとスリットが可愛いイーフリートの衣装。
そしてマモリの体から炎が燃え上がり、その炎が地を這ってジャンの周りの蔓を燃やしていく。
「助かったぞ、マモリ！」
ジャンはマモリにガッツポーズをしてみせ、そのまま脇道に入って行った。

マリーティア

アウタナの間にはマモリのキャロットの2人だけになった。

「あら、行っちゃったわね…まあいいわ。彼はレオナードに任せましょう。それよりマモリくん。さっきの部屋ではもう少しで彼と一つになれるところだったのに、うちの妹もどきが邪魔しちゃってごめんなさいね。」

「そんなことは望んでなかったし、むしろ助かったくらいだよ。…それより俺に用っがあるって言ってたね?」

「ええ、少しお話しましょう。あなたのフルアーマーの魔法のことよ。」

「っ!!」

「…あなた、今マモリちゃんのこと君付けで呼んだわね。マモリちゃんが男の子だって知ってることでしょう?私のことも知っているみたいだし。何者なの?」

マモリとガメイラはパプリカに対する警戒心をさらに高めた。

「マモリにくんにフルアーマー…厳密には英雄ゼウの装備だけど、それを使わせないようにあのジジィに指示したのは私です。」

「なっ!!」

「ゼウのことも、フルアーマーのこともよく知っているわ。交流もあったので。だから当然、彼が邪神アスモデウスと闘って死んだことも、フルアーマーが息子であるあなたに受け継がれたことも、知っているのよ。」

マモリはこの城にはジャンの友達を助けるために来た。呪いをかけた老人を追うのを中断して。だからこの城であの老人の関係者に出会うなんて思っていもいなかったのだ。それを関係者どころか指示したとまで言う人が突然現れたのだ。

「どど、ど、どういうことだ!?」
てんぱって、うまく口が回らない。
「どうもこうも、そのままの意味よ。私はあなたのことを知っているし、あなたにゼウの装備を使えないようにするよう私がジジィに頼んだのは私。あ、ラミアも私の部下よ。でも、まさかこんな方法で呪うなんて思ってなかったけどね。…でも、女の子の格好がよく似合うのね。その衣装も、さっきのドレスもよく似合っているわよ。誰も男の子だなんて思わないでしょうね。」
「ううううるさい!!」
「お父さんに似なくてよかったわね。」
確かにマモリの父・ゼウは、豪傑の名がふさわしい男らしい男だった。
「それで……どうして俺に呪いなんてかけるように言ったんだ!!?」
「あなたの中には使われては困る物がいくつかあるのよ。」
「つ、使われては困るもの?」
「あまり詳しいことは知られるわけにはいかないのよ。ごめんなさいね。」
「なんだよそれ、そんなのこんな面倒なことしなくても、頼まれたら使わないってば!!」
確かに、使われては困るものがあればそれを使わないようにするか、最悪渡してしまえばいい。それがたとえ父の形見でも、そこは事情によりけりだ。

「…あのおじいさん、ラミアちゃん…そしてこの人たち。とてもまともな人たちじゃないみたいね。そんな人たちが使われては困るものって何なのかしら?」
ガメイラも気になるようだった。
「だからそれは言えないわ。それにマモリくんを呪ったのは、放っておいたらマモリくんはきっとその装備を使うでしょうから。私た

ちを止めるためにね。」
「止める…？何か企んでるんだな！！？何なんだあんたたちは！！？」
マモリは左手のイーフリートを構えて、パプリカに疑問をぶつけた。
「じゃあ少しだけ教えてあげるわ。私たちは魔法組織『マリーティア』。この世界が嫌いな者たち。それにそんなに構えないでいいわよ。私は今のあなたをどうするつもりもないのだから。」
「マリーティア？世界が嫌い…？そんな説明じゃわからないよ！」
「クス。元気ねぇ…男の子みたい。」
「男の子だよ！」
「…じゃあこれも教えてあげる。この樹…魔界樹アウタナ。私はこれをとある場所に運びたいのよ。でも大きすぎるでしょう？これをあなたたちみたいに転送するには、私の魔力だけじゃ足りないのよ。」
「はぁ？こんな大きな樹をどこに運ぼうって言うんだよ？」
「マーズ大神殿よ。」
パプリカは声のトーンを落として答えた。
「マーズ大神殿？どうしてあんな場所に…？」
「…知ってるの！？ガメイラ。」
「え！？（……そうか、アイリがあえて何も言わなかったのね…）…マーズ大神殿っていうのはこの世界が誕生した時から存在すると言われている最古の大神殿の一つよ。今は誰もいないはずなんだけど…。そこにアウタナの樹を運んでどうしようっていうの！？」
ガメイラはパプリカたちの企みがますますわからなくなった。
「これ以上は言えないわ。」
どうやら本当に教える気がないらしい。

＜バルキュリア城・アウタナの間のさらに奥、魔法部屋＞

「いい加減おろしなさいよ、レオナード！！」
「申し訳ありません、キャロット様。…もう着きましたので。」
そう言ってレオナードは暗く、倉庫のような部屋の中心にキャロットをおろした。
さっきまでパプリカたちがいた部屋である。
さらに部屋には、キャロットがおろされた位置を中心として、部屋中に魔法陣が描かれている。
「何よ…ここ……あれ！？」
キャロットは立ち上がろうとして足を立てようとしたが、動かない。足だけでなく、手も頭も、全く動かない。

「……う、動かない…！どういうことよ、レオナード！！」
「はい。キャロット様にはこれから使用する魔力装置の動力源になって頂きます。」
相変わらずレオナードの受け答えは丁寧だった。状況が状況だけに、嫌みのように聞こえてしまう。
「動力源って…どういう意味よ！私をどうする気！？」
「どうする気もございません。あなたはただ、そこでじっとしていればいいのですよ、キャロット様。」
そう言ってレオナードは部屋の隅の方に歩いて行った。暗くて見えにくいが、そこには確かに大それた機械のようなものがある。

「これは魔力増幅装置です。あなたの魔力を利用して、パプリカ様の魔力を数十倍に増幅することができます。」
「お、お姉ちゃんの魔力を！！？なんでそんなこと！！」
「あの樹を転送させるためですよ。あの規模の物質…それも無限に魔力を持った魔界樹ともなれば、いくらパプリカ様でも単身で転送魔法を使えないのですよ。だからパプリカ様は、自分の魔力をさら

にランクアップさせるために、あなたを育ててきたのです。」
キャロットにはその言葉の真意がよくわからなかった。
「（自分の魔力をランクアップさせるため……私を育ててきた……？）…何それ……どういうこと？」
「先ほど言われたでしょう？あなたはパプリカ様の本当の妹ではない。血など繋がっていません。あなたは幼い頃、この森で拾われたのですよ。パプリカ様によって。あなたの魔法の素質を見抜き、自分の糧として利用するためにね。」
ショッキングな事実だった。今まで何の疑いもなく姉と慕ってきた人が、実の姉でなかったこと。そして利用するために育てられていたこと。
「そんな……嘘よ！レオナード、あなたおかしくなったんじゃないの！！？あの優しいお姉ちゃんがそんなことするはずないでしょう！！！？」
「嘘ではありません。先ほどの間で見たでしょう？アウタナの幹に埋もれているたくさんの人間の亡骸を。そしてパプリカ様の本当の顔を。」
「……っ！」

魔族

＜バルキュリア城・アウタナの間＞

「さて、あとはこの魔界樹アウタナがマーズ大神殿に転送させるだけね。もうすぐレオナードがキャロットの魔力を使って私の魔力を上げてくれるわ。」

パプリカは今か今かとワクワクしながらそう言った。

「…そのためにキャロットを連れて行ったのか…！姉妹じゃないのか！？」

「姉妹よ。義理だけどね。妹が姉の望みに協力するのは当然でしょう？そのためにあの子の魔力を育ててきたのだから。」

「…っなんて人なの！？」

マモリとガメイラは、パプリカに対して強い嫌悪感を抱いていた。

「…ガメイラ…この人たちの思い通りにさせちゃダメだ…」

「えぇ、ウォーロッセオの時といい、この樹のことといい…放っておいたらきっとたくさんの人が傷つくわ…」

マモリは両腕に炎を纏わせた。

「うん、この樹が転送される前に燃やそう…！きっとこの樹がなくなれば、この人たちの企みを止められると思うんだ。」

「そうね…この樹が人間界にあるのは危険だわ。マモリちゃん、できる？」

マモリはさらに大きな炎を纏った。

「あら、どうしたのマモリくん。突然そんな大きな炎を出して。」

「この樹を燃やす！！」

「ふふふ。急に正義の味方ぶっちゃって…どうしたの？あなたはそんなことするためにここに来たんじゃないんでしょう？」

「確かにそうだけど……きっと父さんならそうするからだ！！！」
マモリの腕にはさらに大きな炎が現れる。マモリは両手を祈るように組んで魔界樹アウタナに向け、両腕から一つになった炎を打ち出した。
それは重機一台分くらいの大きな火玉となって、アウタナの方へ飛んでいった。

火玉はまっすぐアウタナに向かい、直撃した。
普通の樹はもちろん、大木でも十分焼き尽くせただろう。だが、それよりさらに大きな魔界樹アウタナには全く効いていなかった。
マモリ火玉を何発も打ち込んだ。

「そんな攻撃じゃアウタナには傷一つ付けられないわよ？クスクス」
何が楽しいのか、パプリカはずっと笑いっぱなしだ。
「さすがアウタナの樹ね。世界樹と対をなすって言うだけあるわ…！」
「うん、…でもまだとっておきがあるんだ！」

マモリはさらに両腕の炎を大きくしていき、全身が炎に包まれた。
炎はマモリからさらに上部に伸びていき、巨大な蛇のようになっていった。
「……大技ね。」
「うん、大技！」
炎の蛇はどんどん長く、太くなっていく。その大きさはアウタナの樹と同じほどの高さまで伸びた。
「あらあら…さすがにこれはまずいかもしれませんわね。」
パプリカはそう言いながらも、表情はまだ余裕を残している。

炎の蛇の頭部が形を変えていく。

「いけ！！ドラゴンズ・イーフリート！！」
龍の形となった炎の蛇が口を大きく開け、アウタナの樹に向かって行った。
「これなら…！」
炎の燃える音がまるで龍の雄叫びのように聞こえ、本物の龍のようにアウタナの樹に激突していく。

＜バルキュリア城・アウタナの間のさらに奥、魔法部屋＞

キャロットは言葉がでなかった。
脳裏に蘇ったのはアウタナの幹に埋もれていた人の顔。その中でも最も人としての原型をとどめていたのは、確かに先週ホールで踊っていた人の顔だった。
さらに姉の表情、声、言葉、どれも自分が今まで見てきたものとは違っていた。
「そん…な……」
「心が折れたようですね。では、大人しいうちにことを済ませてしまいましょう。」
レオナードは無心に、機械のレバーを引いた。するとキャロットを中心とした魔法陣が青白く光り出す。
「え…？」
キャロットは急になんとも言えない脱力感に見舞われ、その後体に電撃が走るような痛みを感じた。
「――キャァァァァァ！！！」
「キャロットッ！！」

一手遅れてジャンが部屋に到着する。目の前に入ってきたのは魔法陣の中心で苦しむキャロットの姿だった。
「っくそ!!」
魔法陣に踏み込み、キャロットを助けようとする。
が、魔法陣の内側には入れなかった。
「無駄ですよ。魔力変換のエネルギーが強すぎて生身の人間では近づけません。それよりどうしてここへ?まさか…助けに来たとでも言うのですか?」
「そうだよクソ執事!止めてやれよ!!てめぇのお嬢様だろう!!?」
「いえいえ、勘違いしないでください。私の主はパプリカ様だけです。」
レオナードは冷たく言い放った。
「てめぇ…!」
ジャンは歯をギリッと噛みしめる。
「ふぅ…申し訳ありませんが、バルキュリアのことに口を出さないで頂けますか?あなたはアウタナの生贄になればいいのですよ。」
「うるせぇな!だれがあんな樹に喰われるか!!それに……俺は友達は守るって決めてるんだよ!」
ジャンは本気で怒っていた。
「ウゥウゥ…ッアァァ……ジャ…ン……」
かすれるような声でジャンを呼ぶキャロット。
「友達ですか。あなたとキャロット様は知り合ってまだ数分と言ったところでしょう?なのにどうして助けるとか、守るとか…全く理解できませんね。」
「てめぇの理解なんていらねえよ!!もう少しだけ我慢してくれキャロット!俺が止めてやる。その後ろの機械をぶっ壊してなぁ!!!」
「ふぅ…構いませんよ。私を倒すことができれば。」

レオナードは一瞬消えたようになり、次の瞬間にはジャンの腹のあたりに強い衝撃が襲う。
「ぐぉっ…」
ジャンはギリギリのところで腹筋を絞め、ダメージを軽減していた。ほとんど無意識に。経験からなせる技だろう。
「ほう…なかなか良い反応ですね。」
レオナードもこの一撃で決めてしまうつもりだったので、多少驚いた。その後、さらに驚くことになる。
ジャンが腹に伸びているレオナードの腕を左手で掴み、それをさらに引き寄せて同時に右手をレオナードの顔面にぶち込んだ。クロスカウンターのように。
そのままレオナードは後ろに吹っ飛んでいく。
「う、ぉ、ぉぉお！痛ぇぇ！」
そう叫んだのはジャンだった。殴った右手が真っ赤になっている。
「…っなんて硬い顔してるんだ、てめぇ！」
飛ばされたところから静かに立ち上がり、パンパンと身だしなみを整えるレオナード。さすがは執事といったところだ。

「驚きました。まさか一撃もらうとは…。かなり名のある格闘家のようですね。」
「そっちこそ、さっきのパンチをくらってピンピンしてるなんて何者だよ…」
「私は……魔族です。」
そう言いながらまたしてもレオナードはジャンに攻撃を仕掛けた。だが先の攻撃で慣れたのか、今度はジャンもしっかりと反応で来ている。レオナードの拳をいなし、自分の蹴りを入れる。その蹴りをガードされても逆足で蹴る。しかしレオナードはその蹴りもガードし、ジャンに攻撃を仕掛ける。
そのような攻防がしばらく続いた。もっともレオナードは遊び半分、ジャンはギリギリといった感じだが。

「…またしても驚きました。人間でここまで動けるなんて。」
「うぉっ！…よく言うぜ。魔族っていったな。…あんまり、詳しくないんだが、人間よりも強いってことか…？」
レオナードの攻撃をかわし、いなしながら質問するジャン。
「そういうわけではありません。魔族にもいろいろいるのですが、私は肉体が丈夫な部類なのですよ。」

魔族。魔物の上位の存在。知恵を持ち、人間のような姿をしている場合が多い、魔界の住人である。もっともジャンはそんなこと全く知らないし、魔族にあったのも初めてなのだが。
レオナードはジャンとの闘いを楽しんでいた。魔族として頑丈な肉体を持って生まれたレオナードにとって、自分の体技についてこれる者などなかなかいないからだ。
一方ジャンも闘いを楽しいと感じる性格だ。当然レオナードとの闘いは魅力的だった。しかしジャンにはその余裕はない。目の前で助けるべきキャロットが苦しんでいるのだから。何より今のジャンは、怒っているのだから。

「素晴らしい。あなたのダンスはとても動きが悪かったのですが、こうして拳を交えてみるとあなたの本当のスタイルがわかりますよ。」
レオナードは右足で後ろ回し蹴りを繰り出しながら、その固い表情を笑顔に変えた。
その蹴りをまともにくらってしまい、後ろに吹っ飛ぶジャン。
「がっ…はぁ！！」

すると魔法陣の青白い光が消えていった。
「ふむ。パプリカ様の魔力増幅が終わったようですね。貴方との戦闘は楽しかったのですが、どうやらここまでのようです。」
「ハァ…ハァ……なんだと…？」

「この城での仕事はこれをもって終了です。魔界樹アウタナをある場所へ転送すること。そのためにパプリカ様はキャロット様を育ててきた。そしてその役目も終わりました。魔界樹アウタナが転送されれば、この空間も、城も、崩れてしまいます。ですので私はこの場を離れます。あなたともう拳を交えることができないのは残念なのですが、私たちも忙しいのでね。」

「それって…ここにいたら潰されるってことか……？」

「そういうことです。あなたにはアウタナの生贄になってもらうつもりでしたが、それももういいでしょう。キャロット様も、もう用済みです。」

「ハァ…ハァ……くそ執事め…！」

「あ、そうそう、キャロット様が愛に目覚め、魔力を上げたのはあなたのおかげでもあるのでしたね。お礼を申し上げますよ。では残り数分、キャロット様を大事にして差し上げてください。それでは、失礼します。」

レオナードは闇の中に消えてしまった。

崩壊の音

＜バルキュリア城・アウタナの間＞

ジャンとレオナードが交戦している一方、マモリの放った特大火龍「ドラゴンズ・イーフリート」は魔界樹アウタナに向かって激突し、そのままアウタナを全焼させるはずだった。

しかし、激突直前で炎がかき消されてしまった。パプリカが宙に浮き、火龍とアウタナの間に入り込み、片手を前に突き出すだけで炎を鎮火してしまったのだ。

「さすが、フルアーマーね。とても強力な炎だったわ。でも…まだまだ、その武器の性能を最大限発揮させてるわけではなさそうね。」

なおも余裕の表情でマモリを見下すパプリカ。

「フルアーマーの魔法で使用される武器や道具は、その能力を２００%でも５００%でも引き出せるのよ。それこそが最強と言われる理由。今のマモリくんにはまだそこまでの力はないみたいね。」

パプリカはそう言い放った。

「……そんな…」

マモリは思わず膝をついてしまった。

「（…たしかにあの人の言う通り、マモリちゃんの魔法はまだまだ完全じゃないわ。それでも、今の炎はかなりの威力があったはず…。それを簡単に消してしまうなんて、この人本当に何者なの…？）」

ガメイラの理解を超えるほどの力を、パプリカは見せつけたのだ。

その時、宙に浮くパプリカの体が青白く光り出した。

「あら……ふふふ、きたわ…キタキタキタキタキター！！レオナ

ードがうまくやってくれたみたいね！」
それはレオナードが発動させた魔力増幅装置の光だった。キャロットの魔力を使ってパプリカの魔力をさらにランクアップさせるもの。
やがて、その青白い光が消えていく。

「…そんな！」
「マモリくん。残念だけど、もう時間が来てしまったみたいね。あなたとお話できて楽しかったわ。」
またしてもクスクスと笑いながら、パプリカはアウタナの方に向い、何か呪文を唱え始めた。
「転送魔法よ！間に合わなかった…」

魔界樹アウタナの大きな根が、幹が、下からどんどん消えていった。それはまるで、逆再生される巨大な滝のようで、なんとも不思議な光景だった。

「あ、あぁ…」
もう今から火龍を作り出しても間に合わない。魔界樹アウタナはどんどん姿を消していく。
そしてその大きな空間の天井にぽっかりと大きな穴を開けて、アウタナは完全に姿を消した。

「ふう、ようやく完了したわ。あの樹を転送させるのにどれだけ時間がかかったか…」
パプリカは大仕事が終わったと、一息ついている。
「…くそぅ」
「そうそう、マモリくん。私はこれで失礼させてもらうけど、この場所も城も、じきに崩れるわよ。」
「なっ！！」

「もしも脱出できたなら、マーズ大神殿にいらっしゃい。そこにあなたが探している…呪いをかけたあのジジィもいるわよ。」

パプリカがそう言ったあと、突然パプリカの目の前にレオナードが現れた。

「パプリカ様。そろそろ…」

「ありがとう、レオナード。ところでもうその名前で呼ばなくてもいいのよ。キャロットとはもう縁を切ったのだから。」

「これは、失礼いたしました。……デュナミス様。」

「ええ、ではマモリくん。人格魔導具の…まあいいわ。ごきげんよう。」

それだけ言って、レオナードとパプリカは消えてしまった。

「…くそ…！……そうだ！あの執事の人が現れたってことは…ジャンたちは！！？」

＜バルキュリア城・魔法部屋＞

魔法陣の中心でぐったりするキャロットを、ジャンは抱きかかえていた。

「おい、キャロット！しっかりしろ！！」

キャロットの頬を弱い力でパンパンと叩く。

「……う…うぅ……ジャン……」

「良かった気がついたんだな！」

気絶していたキャロットが目を覚ました。

「そうだ！あたし……あ…ぁぁ……」

思い出したら涙が溢れてきた。姉・パプリカのこと。利用するために育てられたこと。レオナードのこと。魔界樹アウタナのこと。

「え…ふぇ……お、姉…ちゃん……ふぇぇ……ふぇぇぇぇぇん！！！」

キャロットはジャンの胸で泣き出してしまった。突然姉に切り捨てられたようなもの、普通の女の子なら耐えられない現状だろう。

だが、今はそう泣いている場合でもなかった。

「…すまん、キャロット。泣くのはあとにしてくれ……あのくそ執事が言うには、ここも、もうすぐ崩れるみたいなんだ！」

「うぅぅ…うぇ……」

キャロットの涙は止まらない。

その時、大きな地響きが鳴り始め、ジャンたちのいる部屋が揺れ出した。城の崩壊が始まったのだ。

「やばっ！……キャロット！！しっかりしろ！！俺はおまえを助けたいんだ！！」

その言葉に、キャロットは自分が今誰が好きなのかを思い出した。そして涙を拭い、立ち上がる。

「…グス…グス……。わかった…ジャン！」

「よし。で、どうやってここから出られるかわかるか？」

「……私もここにははじめてきたの…こんなところがあるなんて知らなかった。」

「そうか…」

だがキャロットは諦めず、その部屋を見渡した。倉庫のような場所だ。何か使えるものがないか探してみたのだろう。

「……とにかく、一度マモリのところに戻ろう。あいつのことも心配だ！」

「…ええ。」
といって、部屋から出ようとする2人。と、その時、キャロットがある物を見つけた。
「……これ…」
それは少し大きめの箒だった。
「……箒か？それがどうしたんだ？」
「これ…お姉ちゃんが昔使ってたやつなの。私も何度か見たことある。魔法の箒よ…これなら!!」
キャロットはその箒を掴み、部屋から出る通路を走った。ジャンもそれに続いた。
揺れはどんどん大きくなっていく。

＜バルキュリア城・アウタナの間＞

魔界樹アウタナの消失により、そこはただただ馬鹿広いだけの空間になっていた。そこに一人、立ち尽くすマモリ。
こちらでもすでに城の崩壊の音は響きわたり、大きな揺れもしていた。

「ガメイラ…これ、かなりまずいんじゃないかな……？」
「そうね…かなりまずいわね。」
揺れる地面。今にも崩れてきそうな天井。天井にはぽっかり穴が開いている。おそらくバルキュリア城に続いているのだろうが、あまりにも高すぎる。マモリはどうすることもできず、頭も回らず、ただただ立ち尽くしていた。
「……何か作戦は…？」
「……難しいわね…」

そこに、ジャンがキャロットをおぶって来た。
「マモリーーー！！」
「ジャン！！キャロット！！無事だったんだね！！？」
ジャンはマモリの前でキャロットを降ろす。ジャンはキャロットが既にふらふらだったため、途中からおぶってきたのだ。
「やばいぞマモリ！もうすぐこの場所っ！！」
「わかってるよ…俺も考えてるんだけど、どうしたらいいか…」
2人とも黙ってしまった。

「ねぇ…私がなんとかしてみるわ！」
キャロットは2人にそう言い、さっきの箒を突き出した。
「これは魔箒サバト。風属性の杖の一種なんだけど、世界でも数少ない飛行能力が備わっているのよ。…これであの天井の穴から脱出するわ！！」
キャロットは力強く宣言した。
「私も知らない杖ね…本当に飛べるのかしら？」
ガメイラの知識にもない杖。半信半疑だった。
「……この箒はお姉ちゃんがよく使っていたものなの。今でこそお姉ちゃんは自分の魔力だけで飛べるんだけど、私が小さい頃はこの箒で飛んでいたわ。私もよく乗せてもらった……」
またキャロットの目が涙目になってきた。それを見てガメイラも本物だと確信する。
「とにかく、今はこれに賭けるしかないと思うの！！」
その言葉に、マモリたちも納得する。

魔界樹アウタナがこの空間から消え去ったことによって始まった地響きは、どんどん大きくなっていった。マモリたちにはもうあまり時間が残されていない。

「……でもおまえ、今は魔力がすっからかんなんじゃないのか？」

そう、キャロットは先ほどのパプリカの魔力向上のために、全ての魔力を強制的に使わされたばかりなのだ。装置の激痛に耐えるため体力もほとんど使い古している。本来なら立っているのもつらい状況だった。

「えへへ、大丈夫よ！」

キャロットは胸の谷間に手を差し込み、小さな小瓶を出した。

その仕草にジャンもマモリも魅入ってしまう。

「マジコーラね！」

ガメイラが小瓶の中身を言い当てた。

マジコーラとは、少し飲むだけで消費した魔力を瞬時に全快できるドリンクである。魔力だけでなく、体力も少しは回復する。滅多に手に入らない希少種の回復薬なのだ。

「そゆこと！」

キャロットは小瓶を開け、中の液体をグビッっと飲みほした。

「……よし！！じゃあ2人とも私の後ろに乗って。」

乗るというのは、もちろん箒である。さすがに3人が箒に跨ると、丈の長さはギリギリとなった。

「（うぅ、狭い…！）」

「（……大丈夫かこれ！？途中で折れるんじゃ…）」

マモリもジャンも不安そうな顔になる。

キャロットは神経を集中させ、箒に回復させたばかりの魔力を注ぎ込む。

回りに少しずつ、3人を中心にして風が起こり始める。

「おぉ！いい感じだぞ、キャロット！！」

ジャンの顔が希望の色に変わった。

「（ジャンが見てる…！絶対一緒にここから出るんだから！」

キャロットはさらに気合いを入れて魔力を注ぎ込む。

しかし…。

箒からはプシューっと、空気の抜けるような音がして風も止んでしまう。

「そんな……はぁ、やっぱり駄目か～～……」

ガクッと落胆するキャロット。

「どうしたんだ、キャロット！！？」

「やっぱり駄目って…どういうこと？」

「うん……この箒は、たぶん風属性魔法のマスタークラスじゃないと使えないんだと思うの。あたしは風属性の魔法はマスターしてないから使えないんだわ……。ごめんね！！もう今からじゃ他の方法も探せない…」

崩れる地響きはなおも続いている。

その時、とうとう天井の瓦礫が崩れ始めた。

「危ない！！」

3人の頭上に瓦礫の雨が降ってくる。大きいもので家一つ分くらいはあるだろう。

「バーストフレアッ！！」

そう叫んだのはキャロットだった。キャロットの手から小さな火の玉が飛ぶ。

火の玉が3人の頭上の瓦礫に当たった時、その瓦礫が粉々に砕けた。

「……すごいっ！」

マモリはその威力に素直に感心する。

「火属性の魔法は得意なの。……でも、いつまでもこうしていられないわよ。このままじゃいつか……」

それは全員がわかっていた事実だった。いくら降ってくる瓦礫を凌いでも、ここから脱出しなければ生き埋めになるだけだろう。

「キャロットさん！！その箒をマモリちゃんに渡して！！」

見かねたガメイラが叫んだ。

「え！？な、なんでよ！！この子風属性の魔法が使えるの！？ううん…使えるだけじゃだめなのよ！それなら私だって…マスターしてなきゃだめなのよ！！？」

「マモリちゃんは…フルアーマーの魔法使いよ！！」

「っ！！！……フルアーマー…確か本で読んだことがあるわ。どんな装備品でも最大限に使いこなせる魔法……確かにそれが使えたらこのサバトも使えるかもしれない……あんた、本当なの！！？」

キャロットもフルアーマーのことは知っているようだった。

「……うん。」

マモリも答える。そんなマモリをキャロットはまじまじと見た。

「……確かに…慌ててて気付かなかったけど、さっきと服が違うわね…また挑発的な……」

マモリの顔が赤くなる。

「……あんた…マモリだったわね！！」

キャロットがマモリに力強く聞いた。

「うん！」

「…この箒はお姉ちゃんの箒…お姉ちゃんはあんな風に変わってしまったけど、私にとっては思い出のある箒なの！……でも、あたしにはこの箒が使えない……」

そう言ってキャロットはサバトをマモリの方に突き出した。

「私とジャンがここから出るために……この箒はあんたにあげるわ！！マモリ、頼むわよ！！！」

「わかった！」

マモリは力強く、キャロットからサバトを受け取った。

新しい武器でフルアーマーを使うと、マモリはまた恥ずかしい格好に変身してしまう。一瞬そんなことが頭をよぎったが、今はそんなことを言っている場合ではない。それに、それ以上に、箒から伝わってきたキャロットの想いを無駄にすることはできなかった。

「やばい！どんどん崩れてくるぞ！！！」

ジャンが叫ぶ。

マモリは息を大きく吸い、サバトを前に構え、そして唱えた。

「……フルアーマー！魔箒サバト！！！」

するとマモリの赤いチャイナドレスが消え去り、マモリの体が碧色に輝きだす。

そして現れた姿は、淡い緑と白をメインとした可愛らしい衣装。ドレスのように肩が大きく膨らんだトップスにエメラルドの大きなリボンが胸についている。スカートは段になっており、大きく広がっている。足は膝上までの白いブーツ。全体的にリボンやフリルの多い可愛らしい衣装だった。箒だからか、全体的にメイド服に似ている。

マモリは魔法少女になった。

ふるふるふる……

今回の衣装は今までと違い、どう見てもメルヘンチックで、マモ

リの恥ずかしさもピークのようだった。ジャンは顔を赤くして見入っている。

「……可愛いじゃない…！」

もともと可愛いもの好きのキャロットも、認めざるを得ない可愛さだった。

「…と…とと、とにかく…今は急いで脱出しなくちゃ！！」

マモリも2人の視線が痛くて仕方がない様子だったが、城の崩壊はもう目前である。恥ずかしさを堪えてサバトに跨る。

「乗って！！」

ジャンとキャロットもサバトにまたがった。

全員がなんとかサバトにまたがったのを確認し、マモリはサバトに魔力を込め始める。さっきキャロットが使った時よりも強い風が生まれ、少しずつ宙に浮き始めた。

「おおお！マモリ、飛んでるぞ！！」

「これなら行けるわ！」

ジャンとキャロットは歓喜の声をあげた。

「マモリちゃん…行って！」

今は胸の大きなリボンの中心に輝くガメイラも、叫ぶ。

「うん…行くよ！」

3人を乗せたサバトが上空へ舞う。コントロールも完璧だ。サバトはどんどん加速し、3人にも強い重力がかかるが、がしっとしがみついてなんとこ耐えていた。そしてトップスピードで一気に天井の穴へ浸入する。

ついさっきまでアウタナの樹が突き刺していた天井の穴。そこはそのままバルキュリア城に繋がっている。

上のバルキュリア城も崩壊が始まっているのか、瓦礫だけでなく高級そうな家具も落ちてくる。

「ああ！あたしのドレッサーが！！」

「そんなこと行ってる場合か！」

「うわっ大きいのが来る！！避けられない…！」

目の前にはさっき粉砕したものよりもはるかに大きい障害物が迫ってきた。

「任せて！…静かなる水の精霊よ、猛々しきは火の精霊よ、汝らの名において、我らの前に立ち塞がる、全ての敵を滅したまえ――ギガ・ハティオール！」

マモリには何がおきたのかよくわからなかった。目の前にあった大きな障害物が一瞬で消滅したのだ。いや、それどころか、それ以外の、これから降ってくるはずだった障害物もすべて消え去り、目指す方向には地上…空が見えているのだった。

ジャンの目も皿にようになっている。今にも飛び出しそうな勢いだ。

「合成魔法…火と水は相性が悪いのに…？…しかもこんなに強力なものを……キャロットさん、あなた一体……」

ガメイラもあまりの威力に驚いた。もしもガメイラに口があったなら、きっとパクパクさせていただろう。

「1日1回が限度の大魔法よ！あたし、風属性の魔法はマスターしていないけど、火属性と水属性はマスタークラスなの！マスタークラスになれば、これくらい楽勝よ！」

キャロットは一気に疲れた顔になっていたが、すでに道は開かれた。マモリたちはまっすぐ天に上り、崩れゆくバルキュリア城を横目にして、空へ突き抜ける。

1日ぶりの地上はすでに朝を迎えており、昇りたての太陽がマモリたちの目に飛び込んでくる。

間一髪、バルキュリア城はみるみる瓦礫へと変わっていき、その瓦礫もマモリたちが出てきた穴へと吸い込まれてゆく。もともとバルキュリア城の下地となっていた大地も土砂崩れになって、そこらへん一体が巨大なクレーターのようになった。

「はぁ～～死ぬかと思ったよ……」

マモリが大きなため息を吐いた。

「……うぅ…マモリ…そろそろ降ろしてくれないか……」

ジャンが何やら苦しそうに訴えた。どうやら激しい垂直飛行で気持ち悪くなったらしい。

＜バルキュリア城跡地＞

キャロットは崩れ去った自分の家を見て呆然とし、直に涙を流し始める。思い出の家、思い出の部屋、思い出の家族、一夜にして全てを失ってしまったのだ。窮地が去って、想いが一気に押し寄せてきたのだろう。

「なんて声かけたらいいかわからないよ……」
「ああ、しばらくそっとしておいてやろう…」

それからキャロットはしばらく泣き続けていた。

キャロットが泣き続け、昼前になったころ。
「それにしても……歴史あるバルキュリア城がこうもあっさりなっくなっちゃうなんてねぇ。」
「ちょっとガメイラ！不謹慎だよ！」
「あ、ごめんなさい……つい。でもね、マモリちゃん、この城の結界はあの魔界樹アウタナの魔力で張られていたって聞いたでしょ？この城に結界が張られたのは１００年も昔。ということはアウタナの樹は１００年前からこの城の地下にあったってことになるわ。どうして魔界の…それもあんな強い力をもった樹がこんなところにあったのかしら…。」
「そういえば、あの執事野郎も、自分は魔族だって言っていたぞ。」
「魔族っ！？」
「なるほど…どうもこの城には大きな秘密があったみたいね…。でもこうなってしまったらもう……」

「だったらお姉ちゃんを追いましょう！」
さっきまで泣きじゃくっていたはずのキャロットがマモリたちの前に立っていた。
「キャロット…もう大丈夫なの？」
「ええ、泣いたらすっきりしたわ。…でもこのままじゃ納得がいかない！お姉ちゃんとレオナードに文句言ってやるんだから。あたしの服も小物も全部なくなっちゃったもの。絶っ対許せないわ！！」
「（そこなんだ！）」
「とにかく、私はお姉ちゃんを追うわ！」
「そう…それならちょうどいいわね。私たちもどっちにしろ彼女を

追わないといけないの。今回の事で聞きたいこともたくさんあるし、マモリちゃんの呪いを解かないといけないんだから。ね、マモリちゃん。」

「え？あぁ…うん。キャロットが一緒に来てくれるなら心強いよ！」

「ああ！一緒に行こうぜ！！…でも、その前に一緒に来てほしいところがあるんだ。」

「あ、そうだった！キャロット、一緒にウォーロッセオまで来てくれない！？」

「ウォーロッセ？…ええ、ジャンの頼みならいいわよ。どっちにしろ私は今日から家なき子なんだから、あなたたちについていかないと行く場所がないもん。」

こうしてキャロットは姉パプリカを追うため、マモリたちと一緒に行くことになった。

「改めて自己紹介しておくわ。私はキャロット・バルキュリア！火、水、光属性のマスタークラスの魔法使いよ。あと会った時も行ったけど回復魔法が使えるわ。よろしくね！」

もう完全にふっきれたようで、キャロットの目はキラキラしていた。

「俺はマモリ。フルアーマー使いだよ。」

「ジャンだ。よろしくな！」

「私はガメイラ。マモリちゃんのサポートを任されてる人格魔導具よ。３つの属性をマスターしているなんてすごいわね。」

それほどでも…とキャロットは全く照れることもなく笑った。

それぞれが自己紹介を終えると、キャロットはガメイラのことを不思議そうにまじまじと見つめ、それに満足したらジャンによろしくっと抱きついた。

「…ところで、マモリ。さっきこのガメイラが呪いとかって言ってたけど、何のこと？」
「え？ああ、俺あのパプリカって人の仲間…なのかな？その仲間に呪いをかけられてるんだ。それを解くためにその人を探してるんだよ。」
「へぇ、どんな呪いなの？」
「うん。男物の服が着れなくなる呪いなんだ……」
「……は？」
「うん、だから男の服が着れなくなって…」
「ちょい待ち！！何なのその変な呪い！何の意味があるのよ！！意味分かんないんだけど！！」
「え！？俺にとっては大問題なんだけど！！」
「なんで！？普通にしてたら困らないじゃない！！……あ、マモリあんた、男装の趣味でもあるの…？」
「……俺…男なんだけど…」
「……ん？」
キャロットは一瞬思考が完全停止した。
「笑うところ…？」
「マジ…なんだけど…」
沈黙。

キャロットはマモリに手を伸ばし、スカートの中に滑りこませた。
「ひぁんっ！」
女の子のような声をあげるマモリ。

「……ある！」
キャロットはマモリの股間にあるそれを確認し、さらに揉みだした。
「あぁぁ……やぁ！……キャロ……ダメェ……」

マモリの様子に気づき、慌てて手を引っ込める。
「マモリ！あんた本当に……」
赤面して静かなにコクっと頷くマモリ。
「（この子、本当に男の子だわ！信じられない…こんなに可愛いのに……。これじゃ詐欺じゃない！…待って…だったらあの地下の部屋でのあれは？マモリも男でジャンも男…男同士で！？そんな……いや、あれは結局未遂だったはず…でもあたしが来なかったら2人はあのまま……エェーーー！！？）」
「ちょ…キャロット、大丈夫？」
「（落ち着きなさい、あたし！あれはお姉ちゃんの魔法のせいよ！だから2人は何もない！あたしはジャンが好きで、ジャンとマモリは男の友情！うん…それで間違ってないはずよ！……あぁあ！…でもなんなの？この気持ち！なんであたし、マモリとジャンがそういう関係になることに興奮してるわけ！？…わからないわ…でも……でも、こんなに可愛い男の子なら……これだけ可愛いんだったら……何でもアリよ！！！」
そしてキャロットは、マモリの肩にポンと手を置き…
「マモリ！」
「え…」
「あんたはあたしがもっと可愛くしてあげるわ！それから…ジャンとの三角関係も認めてあげる！」
「（何言ってんのこの人っ！？）」
キャロットの瞳は出逢って一番の光りを放っていた。頭のネジがいくつか飛んだらしい…。

大地の導き

マモリたちはその日、疲れをとるために近くの村で一泊し、改めてウォーロッセオに向かうことにした。

＜ウォーロッセオ付近・封印の祠＞

「うぅぅぅ…俺やっぱり、空飛ぶの苦手だ～…」
「ジャン、大丈夫？あたしが膝枕してあげようか？」
マモリたちは時間短縮のため、サバトに乗って空飛んで来たの。そのためジャンは船酔いならぬ、箒酔いしてしまったのである。

「それで、その回復魔法が必要な人ってジャンの友達なのよね？どんな症状なの？こんなところで封印してあるなんて…只の病気や怪我とは思えないけど…」
「……見ればわかるよ。」

祠の中に入り、以前ジャンの友達ブライを封印した時と同様にマモリは封印機に魔力を注ぐと、魔法陣にブライの姿が現れる。筋肉質の大きな腕が４本。大木のような足。とても人間とは思えない凶悪そうな頭。それが今のブライだった。
そして全体が薄紫色。ピクリとも動かない。その姿が時間を止められてることを物語っていた。
「…な、何よこれ…人間なの？どう見ても魔物か、魔族じゃない…」
「ああ、でも確かにこいつは人間で…俺の友達なんだ……」
「あなたのお姉さんの部下が、実験でこんな姿にしたのよ……」
「っ！！…お姉ちゃん、こんなことまでしてたなんて！ますます許

せないわ！！」
　キャロットは体を震わせる。
「それで、おまえの回復魔法でこいつを元に戻せるのか！！？」
「…やってみる！」

　マモリはさらに封印機に魔力を注ぐ。
「封印が解けたらまた暴れだすかもしれない！ジャンはこの人を抑えて、キャロットはすぐに回復魔法を！」
「おう！」
「わかったわ！」
　ブライの体に色が戻っていき、封印が解かれる。

　胸の大きな傷からまた大量の血が流れ出し、その痛みに苦しむように暴れ始めるブライ。
「ぐおぉぉぉお！」
　ジャンはすかさず、ブライの４本の腕を両手両足に絡めることで体の自由を奪った。問題はあの口からのビーム攻撃だろう。それが発射される前になんとかしなくてはならない。

「ブライっ…おとなしくしてろぉ！」

「癒しの女神よ、この者の血肉に今、再生の力と女神の祝福を与えたまえ――――セイク・クーレ！！」

　ブライの体が白く光り、あっと言う間に胸の傷が消えていく。――しかし、それ以外の場所に特に変化はなかった。キャロットは腕を前に、必死に魔力を放出するが、その後もブライの肉体に変化はなかった。
「キャロット頑張って！！」
「だめ！やっぱりこの体は……！」

「くそっ！」
次第にブライは暴れるのをやめ、おとなしくなっていく。しかし結局体を元の人間の状態に戻すことはできなかった。

「……あたしの魔法では…もとには戻せないわ。この人の体はこの状態で固定されている。回復魔法で大人を子どもに戻せないように、この人の体を普通の人間の状態に戻すことはできない……。私にできるのは胸の大きな傷を治すことくらい…ごめんね、ジャン。」
キャロットは申し訳なさそうにかざしていた手を下げた。

その時、マモリでもキャロットでもジャンでもない声が聞こえた。
「……ジャンか…？」
ジャンに声をかけたのはブライだった。それは怪物だった時とは違う、人間の声。
「ブライ！！俺がわかるのか！？」
「……ああ……」
「本当にブライだな！！」
「そうだ……迷惑かけたな……」
４本の腕で、ゆっくりとジャンを床に下ろす。
「武闘大会の時のことも……今も…ずっと見てた。意識はあったんだ。何があったのかも知ってる。本当にすまなかった…。」
「（覚えてるんだ…）」
「ブライ……そんなこと言うな！おまえは何も悪くないだろう！？」
「……俺はもっと強くなりたかった…お前よりも遥かに強く。その時にあのラミアという女が現れたんだ。強くしてやるってな。…もちろん最初は信じなかったさ。でも、あの女は突然襲いかかってきて…俺は手も足もでなかったよ。それで、見た目じゃない、こいつの強さは本物だ！そう思った。だから話に乗っかったのさ。…それ

がこの様だ……。」
「ブライ…」
「俺の体、元に戻らないんだろう…？」
「…ごめんなさい。あたしがもっと凄い魔法が使えたら…」
「いや、これは俺の欲が招いた結果だ。あんたが気にすることじゃねえよ…」
「でもどうするの？そんな体じゃ町には…」
マモリの言葉にブライの顔が曇る。そのことに気づき、マモリは言葉を途中で濁した。
「…そうだなぁ。つっても町には待ってるやつなんかいねぇし…それに俺が闘技場でしたことを考えたら、戻れるわけがねぇ…」
ブライは闘技場で自分が町の人たちを襲ったことを覚えていて、ひどく自己嫌悪に陥っていたのだ。それに今の姿をあまり他の人間にも見せたくないと考えていた。

「だったら、大地神・グランデウス様のところに行くといいわ。あそこにはエルフや、人間に害をなさない魔物が住んでるし、少しなら人間もいるはず。何より、きっとグランデウス様があなたの力になってくれるはずよ。」
ガメイラは少し考えてそう言った。
大地神グランデウスとは、世界を構築している４つの領域のうち、陸地を守護する神。大地を育て、大地に生きる全ての生命を育む。その居場所は空間の少しずれたところにあり、普通の方法では行くことができない。そこを聖域と呼ぶらしい。
だが、ガメイラはそこに行くあてがあるようだった。

「きっと今のあなたならグランデウス様の導きを得られるはずよ。」
「俺が…大地神グランデウス様のところに……？でも、どうやって？」

「マモリちゃん…私にありったけの魔力を入れて、彼に渡して。」
マモリにはそれがどういうことかわからなかった。しかし、今までガメイラが言うことに間違いはなかったのだから、今回もガメイラに素直に従うことにした。
「わかった。」
マモリがガメイラに魔力を注ぎこんでいる間、ジャンはブライに別れの挨拶をしていた。
「ブライ…本当はもっとお前と闘って、競い合っていきたかったんだけどな……」
「はは、こんな体じゃ仕方ないだろう。この力でおまえとやりあったら、一瞬でぺちゃんこだぞ！」
「どうかな？俺はその姿のお前を押さえつけてたんだぞ？」
「そういえばそうだったな。」
「とにかくこうして、おまえに人の心が戻ってよかった。」
「ああ、ジャンと…それにそこの2人のお嬢ちゃんのおかげだ……ありがとう。」
キャロットは照れくさそうにお辞儀した。ずっと城に住んでお姫様をしていたキャロットはこういうのに慣れていないのだ。
「準備ができたみたいだよ。えっと、これを持って。」
マモリがブライにガメイラを渡す。ガメイラは丸い宝石のようになっていた。
「それで大地に強く祈ればいいんだって。」
「それだけでいいのか…？」
「いいっぽい。」
「そうか。わかった。」
そしてブライはガメイラを4本のうちの2本の腕でしっかりと持ち、目を瞑って祈り始めた。

するとブライの体が、太い足からゆっくりと消えていく。

「うお！ブライが消え始めた！！大丈夫なのか？」

「ああ、大地神様からの声が聞こえた。――――――――じゃあな、ジャン。あとお嬢さんたち。ありがとう。」

「元気でやれよ！もし次会ったらまた勝負するからな！！」

「楽しみにしているぞ！」

そう言いながら、ブライの姿は完全に消えてしまう。

手に抱えていたガメイラだけがその場に残った。

マモリは再びガメイラを装着する。

「ガメイラ、言うとおりにしたよ。」

「ガメイラ！ブライはちゃんと大地神様のいるところに行けたんだろうな！！」

「ええ、ばっちりよ。」

「そ、そうか……ありがとうな。」

「ジャン、よかったわね。」

「ああ、キャロット、マモリ……なんかよくわからんことになったけど、ブライも満足そうにしていたし、助けてやることができたんだと思う。２人のおかげだな。」

「えへへ…」

３人は封印の祠を出て、ウォーロッセオで体を休めることにした。

「ねぇガメイラ…どうしてブライを大地神様のところに送ることができたの……？ガメイラって本当は何者なんだよ…？」

その質問に、ガメイラは答えなかった。

大地の導き（後書き）

3章はこれでおしまいです。ここまで読んで下さって、ありがとうございます。ここまでだいたい1日1話ペースで更新してきましたが、4章の更新は少し遅れてになります。申し訳ありません。出来るだけ早く更新したいと思っています。

鍵（前書き）

お待たせしました。４章更新します。
ここまで読んでくれた方、続きを気にしてくれてる方、ありがとうございます。
それではどうぞ。

鍵

＜マーズ大神殿＞

マーズ大神殿。現在は魔法組織『マリーティア』の本拠地として使われている。

「みんな、よく戻ってくれた。」

神殿奥の大広間でどっしりと構える男の前に参上したのは、パプリカ、レオナード、ラミア、そしてマモリに呪いをかけたあの老人だった。さらに部屋にはまだ数人の人間がいる。もっとも見た目が人間というだけで、レオナードのような魔族が混ざっている可能性もあるのだが。

そんな中パプリカ…いや、デュナミスはその男の傍に歩み寄り、唇に自分の唇を重ねた。

「……只今戻りましたわ。アレス様。」

「魔界樹アウタナは無事この神殿に届いたぞ。ご苦労だったな。」

「はい、これでもうすぐ例の儀式ができますわね。」

「ああ。……この大神殿、そして無限の魔力の魔界樹アウタナ……。あと一つ。あと一つの鍵を手に入れれば完成する。」

アレスと呼ばれた男は、どう見てもその中のボスの位置に格付けされるだろう。落ち着きがある物言いだが、瞳の奥をギラギラとさせ、そこにいる全員に野望めいたものを感じさせる。彼こそが魔法組織『マリーティア』のリーダーなのである。

「みんなは一度自室に戻って体を休ませてくれ。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「アレス様やっぱり格好いいわ～。あの方の腕に抱きしめられて「ラミア、お前は本当に天才だ。これからもずっとその天才な頭脳で私を支えて遅れ。」な～んていわれちゃったらどうしよう！！」

部屋に戻ったラミアは、さっきの大広間での雰囲気とは豹変し、恋する乙女さながら妄想にふける。

「それにアレス様は言ったは。私の実験の結果を今度の魔力回路に組み込んでくれるって！まあ当然だけどね。そうなる前提で行った実験だったんですもの。」

そしてラミアは自室の奥の実験室に入る。

蜘蛛。

そこにいたのは大きな蜘蛛。以前ラミアがポケットに入れていたタラミチュラと似ているが、この蜘蛛はラミアの体よりも大きく見える。

「ふふふ…さぁて、新しい研究を進めなくっちゃね。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「その最後の鍵が見つかりました。」

例の老人がアレスに報告した。

「そうか……ではさっそく迎えに行ってくれないか？」

「かしこまりました。」

老人は頭を深く下げた。

その時、一人の男の声が響いた。

「おっと！今度は俺様に行かせてくれよ！！最近動いてなくて溜まってんだよなぁ！その鍵ってやつ、俺が迎えに行ってやんよ！」

ガラの悪そうな喋り方の男が進言した。しかし、その男の姿はどこにも見えない。

「シェイドか。…確かに貴様がうってつけもしれんな。よし、いいだろう。」
「はっは～！かしこまりぃ！！」
「シェイド！貴様、なんという口の聞き方だ！」
「まあそう言うなよじいさん！俺様に任せときなって。ククク」
その男は姿を見せないまま気配を消した。

「…あの男に任せて大丈夫でしょうか？」
老人が心配そうに言った。
「大丈夫さ。性格は問題あるが、こういう仕事ならシェイドの魔法が一番合ってる。それに私は、やつの性格も気に入っているからな。」

アレスはゆっくりと窓の方に歩き、そこから見える満月をじっと見つめた。

「これで世界から戦争はなくなる……人間も、魔族も…真の平和がやってくる。約束は果たされるのだ。」
「アレス様…」
「ウルス……あの子はどうだった？」
「はい、とても可愛らしく、元気そうでしたよ。食べてしまいたいほどに……。」
「ふん、変態がっ！…まあ元気ならそれでいいか。しかしあんな方法で魔法を封じるなんて、貴様は本当に変態だな。」
「お褒めにあずかり、光栄でございます。……それより、あの、例の魔法が完成しましたら、あの子は私にくださいませんか？」
「却下だ！そんなこと私が許すはずがないだろう！？……しかし、魔法が完成すればあの子もその影響下に…それも世界のためか……」

「魔界樹アウタナ…この人間界で生きていくには人間の犠牲が必要だそうだな。」
「そのようです…」
「……平和のための犠牲か…」
アレスはどこか空しそうに呟いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

パプリカこと、デュナミス・バルキュリアは自室にてワインを開け、それを優雅に飲みながらアレスとは別の窓から空の満月を眺めている。

「…キャロットも、マモリくんも生き延びたみたいね…」
「そのようです。」
レオナードはデュナミスの部屋の扉付近で姿勢よく立ち、デュナミスの質問に答える。
「…ここに来るかしら?」
「おそらく。」
「…ふふふ、楽しみね。アレス様には言っちゃ駄目よ。」
「心得ております。」
「ねえ、レオナード…あなた、アレス様は好きかしら?」
「……質問の意図がわかりかねます。私はデュナミス様の執事。それ以上でも以下でもなく、それ以外の何者でもありません。私の主はデュナミス様のみ。」
「ふふ、そうね。もう５０年の付き合いだものね。」

デュナミスは満月を見ながら、不適に笑うのだった。

鍵（後書き）

これからは2日置きくらいのペースで更新できたらって思ってます。
でもポイントがもっと上がればもっと頑張れるかもです笑
それからですね…実は私事なんですけど、今まで使っていたペイントツールが使えなくなり、挿絵をかけなくなってしまいました。
私の残念な絵でも期待してくれていた方、ほんとにごめんなさい。
誰か代わりに描いてくれたらいいのに…。

力不足

マモリ・ジャン・キャロットの3人は、ウォーロッセオから次の目的地に向かっていた。

マモリとキャロットはパプリカが来いと言ったマーズ大神殿に向かおうと言ったのだが、それはガメイラによって却下されたのだった。その理由は圧倒的な力の差を見せつけられたこと、相手の組織『マリーティア』の規模や目的がわからないことからだ。

ブロロロロロロ――――

「マップによればもうすぐ着くはずだ！大都会、ダーナ・ヘヴン！」

ジャンは3人乗りのバイクを運転しながら、後ろのマモリとキャロットに声をかけた。バイクと言ってもかなりの大型で、車とほとんど変わらない要領を持つ魔導バイク・ＭＪＫ―５０００。ウォーロッセオに戻った際、マモリとジャンは大会の賞金ということで、１００万円を頂いき、そのお金で旅のためにと買ったのだった。よっぽど箒に乗る空の旅が嫌だったらしい。

「ダーナ・ヘヴン…この大陸で一番大きい都市よね？あ～楽しみだわぁ、一回行ってみたかったのよね～！！」

ダーナ・ヘヴンは大陸最大の都市であり、多くの人間が商売を行っている。物資・衣類はもちろん、情報から新しい魔法まで何でも手に入ると言われているのだ。

「都会ってどんな服が流行ってるのかしら。マモリ、２人でショッピング行きましょうね！！」

「オ、オレはいいよっ！！」

「遠慮しなくていいの！可愛い服選んであげるから！！」

キャロットはこのところずっとこんな感じで笑顔全快だった。

「そういうことなら俺も行くぞ！」
「駄目よ！ジャンは女性下着売り場とか入れないでしょう？あそこは男性立入禁止なのよ！もしも男が入ったら下着の女神様に呪われて一生女の子を抱けなくなるのよぉ。うふふ！」
キャロットはジャンをからかった。もちろんそんなことはなく、キャロットも自分で下着を買ったことなんてないので、どこかで聞いた話を信じてしまっているだけなのだが。
「マジか！？それは困る！！」
「でしょう？だからおとなしくあたしとマモリの帰りを待ってることね。」
ジャンはしぶしぶ了解した。
「ていうかオレも男なんだけど！！」
「マモリは特別よ～」
「そうか！女が抱けなくなってもマモリがいるじゃないか！！」
「誰が抱かれるか！」
「いやいや、俺はバルキュリア城でのことを忘れていないぞ。あの時のマモリは可愛いかった…」
「うわ～！それは言うなぁぁ！」
マモリはバルキュリア城でジャンに迫られたことを思い出してしまった。
「そんなの許さないわ。ジャンはあたしのものだし、マモリもあたしのものなんだから！ジャンがマモリとそういうことするならあたしも混ぜなさい！！」
「でも女は抱けなくなるんだろう？」
「しまった！ジャン、絶対下着売り場に来ちゃ駄目よ！！」
「浮かれるのもいいけど、目的を忘れちゃだめよ！」
バイクの上で行われるショートコントをマモリの胸の秘宝、ガメイラがたしなめる。

3人は楽しい話を弾ませながら、青空の下の荒野を駆けていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜数日前・ウォーロッセオ出発時＞

「大きいね…でも運転なんてできるの？ジャン。」

マモリは魔導バイクをまじまじと見ながらジャンに聞いた。

「任せろ！これずっと前から欲しかったんだけど、俺は魔力がほとんど使えないからな。だから諦めてたんだけど、魔法使いが2人もいるなら十分乗れるだろって思ったんだ！」

ジャンはマモリに格好いいところを見せたいのか、胸に手を当て自信満々に言った。

「それで、これからどこに向かえばいいんだ？」

「決まってるわ！お姉ちゃんがいるっていうマーズ大神殿よ！！」

「うん、オレもそれがいいと思うよ！急がないとまたあの人たちは…人の命をあの樹に吸わせたりすると思うんだ。それに…」

「マモリの呪いをかけたやつもいるって言うんだろう！？」

ジャンの問いかけに、マモリは頷いた。

「駄目よ！」

そう叫んだのはガメイラだった。

「な、なんでだよ！？」

「はっきり言って…今のみんなの力じゃあの人たちには敵わないわ。バルキュリア城でのこと思い出して！あの人たち、『マリーティア』っていう組織の力はとても強大よ。しかも今はほとんど情報もない…もしかしたらもっと強い敵がいるかもしれない…。このままマーズ大神殿に行ってもやられるのが目に見えているわ。」

「でも…お姉ちゃんたちの本当の目的もわからないし、取り返しのつかないことになったらどうするのよ！？お姉ちゃんはマモリにこ

う言ったんでしょう?今の世界が嫌いって…だったら、きっとアウタナの樹の魔力を使ってとんでもないことをするはずよ!?」

「私もそう考えるけど…今のみんなが行ったところでそれが止められるとも思えないわ。それこそアウタナの養分にされて終わりかもしれない。それでもいいの?」

「それは…」

3人はぐぅの音もでなかった。

「今必要なことは2つ。全体的なパーティの戦力アップと、マリーティアの情報を集めることよ!」

そんなわけで3人はスタートロイのように魔物に襲われてる人を助け、魔物と闘いながら少しずつマーズ大神殿に向かうことのしたのである。

道中では巨大な蛇や、恐ろしい猛獣と何度も戦っていった。

キャロットの魔法は相変わらず凄まじく、特に火属性魔法と水属性魔法は凄かった。時々見られる光属性の魔法もそれは凄まじいものだった。

ジャンも大きな魔物を倒していく中で、どんどん強くなっているように見えた。もともと戦闘好きなところもあってか、恐れを知らずに魔物に向かっていくことでいろんな動きができるようになっていってるみたいだった。

一方マモリは、イージス・イーフリート・サバトの力を最大限引き出して戦うことはできるが、フルアーマーの魔法の性質上、それ以上強くなることがなかったのだ。以前ならゼウの装備を幾通りも使いこなして戦っていたため、自分でも力不足感を感じていた。

「フルアーマーはその武器の力を１００%以上に引き出せるって…パプリカが言ってたんだけど、どうすればいいのかな?」

「う〜ん…今のマモリちゃんには難しいわね。それよりもフルアーマーの使い方としては、もっとたくさんの武器を戦いの中で切り替えていって相手を錯乱させたり、動きを読まれないようにすることの方がいいと思うわ。今のマモリちゃんが使えるのはイージスとイーフリートとサバトだけ。普通の敵や魔物が相手ならなんてことないでしょうけど、『マリーティア』はもっと強力な組織よ……だから…」

「もっとたくさんの武器を使えるようにしたほうがいいってことだよね？」

「ええ。」

マモリにもそれはわかっていた。実際呪われる前は父から受け継いだ数多の武器を使ってスタートロイを守っていたのだから。しかし、今のマモリにとってそれはできれば避けたい方法だった。新しい武器を使うということは、マモリはまた別の女の子の格好になってしまうのだから。特に戦闘用の衣装は恥ずかしいものが多いと、イージスからサバトまでの経験で感じていたのだ。

「もうすぐダーナ・ヘヴンね。ジャンくん、マップに大きな町が書いてるでしょ？そこへ向かってくれる？」

「ああ、このめちゃくちゃ広いところだな。わかった！」

ジャンは運転しながらマップを確認した。

そして一同はダーナ・ヘヴンに向かうのだった。

ダーナ・ヘヴン

＜ダーナ・ヘヴン＞

マモリたちがダーナ・ヘヴンに着いて最初に驚いたのは、その町並みと人の多さだった。たくさんのビルや家が建ち並び、祭りのように人がごった返す光景に3人は騒然とする。

「すっごーい！こんなにたくさん人がいる！！どこかでパーティーでもあるのかしら！？可愛いお店もたくさん！キャーー！！」

「うおお！車やバイクがいっぱいある！！すげぇすげぇ！！それに強そうなやつもたくさんいるじゃねえか！勝負申し込んでいいかな！？」

ジャンとキャロットは見たこともない光景にわくわくし、ふらふらと動きだしてしまうのだった。

「ちょっと待ちなさい！まずは宿を探すわよ。話はそれから！ほらマモリちゃん、あの2人を連れ戻して！」

「……見たことないものがたくさんある…ねぇガメイラ！壁の中の写真が動いてるよ？あれ何！？」

「あれは映像魔導具よ。ってマモリちゃん！あの2人見失っちゃうわよ！？」

マモリの住んでいたスタートロイは本当に生活に必要なものしかない田舎の王国だったため、この町には知らないものが溢れていた。年頃の男子としては興味をそそられないわけがない。

そしてマモリもふらふらと自分の見たいものがある方へ足が向いてしまう。

ガメイラはなんとか3人とつなぎ止め、宿を借りた。

「ふぅ…浮かれないでって言ったわよね!?全く何やってるの!?」

珍しくガメイラが切キレた。

「観光に来たんじゃないわよ!?わかってるの!?」

キレても顔がない分その怖さもほとんど伝わってこないと思いきや、マモリの魔力を通してピリピリとした空気を作り出していた。

「ごめんなさい。」

3人が素直に謝る。

しかし結局、その日はもう日も落ちかかっていたこともあり、3人は疲れをとるという名目で自由行動とした。ガメイラも納得したようだった。

予定通りキャロットはマモリを連れまわしショッピングを楽しみ、ジャンもまた町をブラブラして酒を飲んだりしていた。マモリは強引なキャロットに連れまわされるだけだったが、よりキャロットとの仲が深まったようで、また何を見るのも新鮮で楽しむことができた。

数日間ずっと凶悪な魔物や悪党と戦いながら旅を続けて来たため、3人ともかなりのストレスが溜まっていたのだ。

それぞれストレスを解消し、久しぶりにゆっくりとベッドで寝たのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして翌日…

＜路地裏＞

「で、なんであたしが一人別行動なのよ！！」
「私がいるでしょう？」
キャロットはガメイラを身につけて一人『マリーティア』の情報収集にあたっていた。

今回、マモリの戦力アップのための新しい武器を手に入れることと、『マリーティア』の情報を手に入れることの２つの目的を効率よく達成するために別行動をとることにしたのである。

「ジャンくんは情報収集なんかできないでしょうし、魔力もほとんど使えないから私と一緒になっても会話できないでしょ？この組み合わせが一番なのよ。」
「それはわかるけど、あの２人が一緒にいたら何が起きるかわからないでしょ！？マモリとジャンがいちゃつくところ見たいじゃない！！」
「……歪んだ愛情ね…」

キャロットはジャンのことを一人の男性として好きなのだが、マモリが男ということもあってか、２人の絡みになぜか自分でも言い表せないような異様な興奮を感じるのだった。

「そう言えば前から聞きたかったんだけど…ガメイラって結局のところ何者なの？人格魔導具なんてあたしあなたに会うまで聞いたこともなかったわよ？」
「それは…」
「それにやたら物知りだけど、なんでそんなに何でも知ってるの？まるで意識を持った図書館見たいだわ。」
「……私の知識はもともと私が持っていた知識よ。」
「もともと…？」

そこでキャロットは都市の裏の顔とも言えるような、なんとも危ない雰囲気の場所に迷い込んだ。
迷い込んだというよりはガメイラに案内されて来たのだが。

アンダーグラウンド。
狭い路地を入り、迷路のようなビルの隙間道を進んでいった場所にそこはあった。
町のならず者たちがひっそりと息づき、違法な金の流通を行っている場所である。ガメイラいわく、そこには表では手に入らない情報も手に入るらしい。

「何よここ…？」

「おうおう、色っぽい姉ちゃんが来たな！」
「何だ何だ？遊んでほしいのかい？ギャハハハ」
凶悪そうな男たちがキャロットに下衆な声をかける。

「ガメイラ…あんたこれどういうことよ。」
もっときらびやかで、探偵のようなかっこいい情報収集を期待していたキャロットは、その期待を裏切られたと思い、ギロリと胸元のガメイラを睨む。
「こ、ここにはいろんな情報が集まるのよ！」
「そんなこと聞いてんじゃないわよ！なんであたしがこんな暗い所でこんなブサメンたちに囲まれないといけないのかって聞いてるのよ！！」

「あぁ！？誰がブサメンだって！？」
「カッチーン！生意気だなてめぇ！ただじゃ帰さねえぞ！」
そんな男たちがわらわらとキャロットの前に集まってきた。

「うるさいわね！ちょっと黙ってなさいよ！」
「キャロットさん、うまくここの人たちから情報を引き出して！」
「……ガメイラ、あんたさてははじめからあたしをお色気要因にするつもりで連れてきたわね！？」
「……マモリちゃんでも良かったんだけどね。武器集めあるから。」

キャロットは、しょうがないとガメイラの最低な作戦に乗っかることにした。
もちろん、この男たちに自分の色気を見せる気は全くなく、力ずくで、脅すつもりで、情報を聞き出す方針に変えて。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜中央通り＞

その頃マモリも、自分に合った武器を最低５つは手に入れておけとガメイラに言われ、ジャンと一緒に別の場所を探索していた。

「自分に合った武器って言ってもなぁ～。今まで父さんのばっかり使ってきたし、今使えるのも全部成り行きで手に入れたものだったんだから…自分で探すっていってもわからないよ。」
「ゲームみたいに攻撃力とかわかれば楽なのにな。」
「ああ、確かにそれ便利かも！」

自分に合った武器。そんなことを言われてもマモリは見当もつかず、いくつかの武器屋に入ってみたがしっくりくるものはなかった。
それにやはり武器屋で売っている武器は男性専用のものが多く、呪いをかけられているマモリには装備できないものがほとんどだっ

たのだ。

「それにしてもマモリ、戦わないときはいつもその格好だな。」

ジャンはマモリのカットソーとスパッツ姿を見てしみじみと言った。

「何か問題でも？」

「いや、俺としてはもっと可愛いのを着てほしいのだが…」

「断る！！」

「いやいや、本気で！……ほら、あんな感じで！！」

ジャンが指差した先には大衆が群がっており、全員が同じ方向を向き、同じ方向に進んでいた。

さらにその先にはトラックのような大きな車がゆっくりと走っている。

「みんなー！応援よろしくねーー！！」

そしてその上に立ち、大衆に手を振る少女の姿。

キラキラした可愛い衣装を着こなし、手を振るもう片方の手にはマイクが握られている。

だがその少女の一番の特徴とも言えるのは、なんといっても笑顔だった。

マモリはジャンに言われてその少女の方を見たとき、まるで心臓を矢に打たれたような衝撃を受けた。

「あれ、きっとアイドルってやつだぜ！」

「ア、アイドル…？」

「ああ、歌って踊るみんなの人気者って感じじゃないか？映像魔法や音楽魔法で世界中にその歌を届けてたくさんの人を元気にするん

だ。」
「へぇ……」
そう言えば昨日初めてみた映像魔法に映っていたのが、あの少女だということに気がついた。
マモリはその少女に目が離せないでいた。
「あの子の格好、可愛いだろう？俺的にはマモリにもああいう格好をしてほしいわけよ！」
しかしマモリにはその声は届いていない。
「……ねぇジャン、少しだけ寄り道してみようよ。オレたちもあの子について行ってみよう？」
「お、興味あるのか？いいぜ！」
そしてマモリとジャンは大衆と一緒に、その少女を追いかけていった。

ヘパートス

ステージを後ろに取り付けたような車が動くたびに、群衆も一緒に動く。
きっとアイドル少女のファンなのだろう。
アイドル少女が歌う歌にファンの歓声が混ざりあって、その空間は震えるような熱気を帯びていた。

その群衆に一緒になってアイドル少女の乗っている車を追うマモリたち。

「おい、マモリ！そんなに気になるのか！？」
「え？…うん、なんだろう。自分でもよくわからないんだけど、ものすごく惹かれるっていうか…。とにかくもうちょっと見ていたいんだよね。いいかな？」
「いいけど、いい加減にしないとあとでガメイラに怒られるぞ？」
「わかってるよ。」
ジャンはなんとかマモリを見失わないように後ろに張り付いていた。ジャン自身はアイドルにはあまり興味を持てなかったが、マモリにあんな衣装を着てほしいという願望がある。

「すごいなぁ…オレの住んでた国にも歌を歌う人はいたけど、こんなのじゃなかったよ…。なんでかなぁ…力が湧いてくるみたいだ……。」
「そうか？俺は何にも感じないけどなぁ…。それよりそろそろ行こうぜ！この団体どこ行くかわかんねえし、早くおまえの武器を…」

その時アイドルを乗せた車が大きくカーブし、群衆もそれに合わせて大きく動いた。

「うわっ！」
マモリの背中でガッという音がする。何かに引っ掛かるような音。
「マ、マモ、どわぁ！！」
ジャンはその場でつまずいてしまった。その上に群衆たちの見境のない足が容赦なく襲いかかる。
「あだだだだだ！」
ドタドタドタ――――――――
群衆はジャンを置いて、いや、轢逃げして去って行ってしまった。その場で取り残されるジャンは、たくさんの足に踏まれた激痛でしばらく起き上がれないでいた。
「マ…マモ、リ……」
たくさんの足跡でコーティングされたジャンの声が、空しく響いた。
「わわわわ！」
背中が何かに引っ掛かり、離れないでいる。それに群衆もどんどん人数が増えていき団子状態。
マモリは身動きがとれず、そのまま引っ張られていった。
アイドル少女の歌を聞きたいがそれどころではない。
頭が揺らされ、引かれ、押され、マモリは耐えられなくなり気を失ってしまった。
やがてアイドル少女が手を振り、そのステージ車ごと大きな建物

に入っていった。
「みんなありがとーー！明日のアフロディア祭も絶対見に来てねーー！」
「「モニアちゃーん！ワーーーーーーー！！！！」」
アイドル少女は大歓声に見送られて、建物の中に消えていった。
群衆はその場で解散していく。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜鍛冶工房＞

「……う、うぅ…」
鼻にツンとつく鉄と錆びのにおい。そのにおいでマモリは目を覚ました。

「目が覚めたかい？」
聞き慣れぬ声。見慣れない天井。そこで自分がさっきまで大勢の群衆の中でアイドルの歌を聞いていたはずだということを思い出した。

「え！？あれ！？…ここ…どこ？オレ……」
群衆にもみくちゃにされ、気を失っていたことに気付く。
そんなマモリに謎の声の主は温かいココアを差し出した。

「え？おじさん…誰…？」
そこには髪と髭で顔がほとんど見えない、筋肉のよろいを着たような大男が座っていた。

「わしはヘパートス。ここはわしの工房じゃ。お嬢ちゃんはなぜか

わしの背中にくっついていてな。気を失ってきたから運んできたんじゃ。」

「（またお嬢ちゃんか…）」

マモリはもうそう呼ばれるのにはかなり慣れてしまっていた。

「そうだったんだ…じゃあ助けてくれたんだね。ありがとう、ヘパートスのおじさん。」

「いやいや、気にすることはない。」

「…てことはヘパートスさんもあのアイドルの子を見てたんだ！」

「お、ああ…まあな。恥ずかしながらあの子の大ファンでな…。モニア・ハール、あの子はワシの光みたいなものじゃ。あの子がデビューしたときからずっと応援しておる。」

「ふーん…」

マモリにはデビューとかそういうことはよくわからなかったが、彼女の名前がモニア・ハールというのだけはわかった。

そしてマモリは工房の中をまじまじと眺めた。

工房と言うから何かの鉄製品を作っているのだと思ったら、なんと周りにあるのは無数の武器だった。

剣や槍、ハンマー、見たことのない形のものもたくさん並んでいる。

「工房に興味があるのか？見ての通り、ここは鍛冶工房じゃ。たくさんの武器を作っておるよ。まあお嬢ちゃんには一生縁のないものだろうけどな。ガハハハハ」

豪快に笑うヘパートス。

「それより気がついたんなら早く家に帰りなさい。暗くならないうちにな。」

「え？…あ！」

マモリはその時ジャンとはぐれたのを思い出した。もともと自分

に合った武器を探して2人で町を探索していたのだ。
早く合流しなければとも思ったが、今目の前にはたくさんの武器がある。
縁がないどころではない。この場所はマモリの目的にピッタリ合った場所だった。

「えと…ヘパートスさん、もう少し見て行っていいかな？」
「ふむ、よっぽど興味があるんじゃな。まあ少しだけなら構わんよ。」

武器を物色する許可を得た。しかし、マモリのことを少女と思っているヘパートスは、きっといいものがあってもマモリに武器を譲らないだろう。
工房を一周しながら、マモリはそんなことを考えていた。
「（なんだろう…なんか、この武器たちの匂いって……）」

「この中で一番強い武器ってどれなの？」
「強い武器か？男の子みたいなことを聞くなぁ。でもどれが強いかなんて決まっておらんよ。わしは打つもの全てに全身全霊を込める。ここにあるものはどれも甲乙つけがたい代物ばかりじゃ。だが他のところで鍛えた物と比べるんなら、うちのが間違いなく最強だけどな。ガハハハハハ！！」
「（男の子みたいねぇ…男の子なんだけどな。でもやっぱり、ここの武器はすごいんだ。……武器から伝わってくるにおい、父さんのものと同じだ…）」
マモリはその場所にあった武器から、鉄のにおいとは違う何か懐かしいにおいを感じていた。
そのにおいは、最近全く使えなくなった父ゼウの武器と同じものだったのだ。

「それにな…武器の強さって言うのは使う者次第じゃ。どんなにいい代物でも、使う者が弱ければその武器の能力を引き出せないし、使う者が悪い奴ならその武器を悪用する。」

「（その武器の…能力か……はぁ…）」

「武器というものは、人を殺すことができる物じゃが、この世界には人を殺すためだけに武器を使う者がいる！だからわしらは自分の鍛えた武器を渡すやつを選ばなければならん！！」

ヘパートスの言葉がどんどんヒートアップしていった。

「この世界には武器を使って人を不幸にするやつがたくさんいやがる！わしはそれが許せんのじゃ！！武器が泣いておる！武器ってのは人を守るために使わなくちゃならん！！」

「（守るためか……）」

その時マモリは、母アイリの言葉をおもいだした。

マモリがまだ小さかった頃、父と3人で暮らしていた時に聞いたことがある。

――――「マモリ…あなたはお父さんみたいに、困っている人を助け、たくさんの人や、自分の大切な人を守っていけるようになってほしいの…。あなたの名前はそういう願いを込めてつけたのよ。私の大好きなマモリ…」――――

父のように守れるように。それがマモリの名前の由来だった。

「だからワシはこの武器を譲るやつを自分で選ぶ！ワシが認めた者にしかやらんのだ！！」

「（すごいな……ってそれ、ますますオレがもらえる可能性ないじゃん！）」

「おっと…つい熱くなってしまったわ。すまんな！」

「いや、すごいね。ちょっと感動しちゃった…」

この工房にあった武器は、ダーナ・ヘヴンで探した中で一番自分

にしっくりくるものだとマモリは感じていた。ガメイラにもそういうものを選べと言われている。武器をそろえるならここだ。

ヘパートスの話を聞いて一層そう思えた。

マモリがもう一度周りを見回してみると、奥に古い本棚を見つけた。

ぎっしりと古い本が並べられている。

武器と鉄しかないような部屋にあまり似合っておらず、マモリはそれが気になった。

「ヘパートスさん、あの奥の本は？鍛冶のことが書いているの？」

「ああ、あれか。あれはアルバムみたいなものじゃ。わしは自分の鍛えたものを全て写真に撮って残しておるんじゃ。気になるなら見てもいいぞ！」

「ほんと！？」

マモリはいくつかあったアルバムの一冊を何気なく手に取り、中を見た。

たくさんの刀剣や他の武器の写真。

「（すげ、どれもすごく強そう）……ってコレ！！！」

ページをめくり、マモリは特に気になる写真を見つけた。

自分の武器

「これ…イージスだ。守護の剣イージス。なんで!?」
イージスは母アイリから受け継いだものだ。母は父ゼウにもらったと言っていた。そのイージスの写真が貼られている。

「これ…ヘパートスさんが作ったの!?」
マモリはヘパートスにイージスの写真を指差して問い詰めた。
「おお。それはイージスと言う聖剣でな。その柄の宝玉から光の盾があらわれる防御に優れた剣じゃ。紛れもなく、わしの打った剣じゃよ。昔親友に譲って今ここにはないがな。ガハハハハ!」
「(やっぱり!)」

マモリはパラパラと他のページ、他のアルバムを見た。
見れば見るほど知っている物が出てくる。
父からフルアーマーの魔法と一緒に受け継いだものがいくつもあった。もっとも今は使えないでいるのだが。

マモリは考えた。
もし父が使っていた武器の大半を作ったのがこのヘパートスだとしたら、ここにある武器から感じるにおいも合点が行く。
となると、親友というのは…。

「ヘパートスさん……その親友って、なんて人?」
「ん? ふふふ、聞いて驚くなよお嬢ちゃん! わしの親友とはなんと! あの英雄! ゼウじゃ! ガハハハハ!!」
「(…父さんの……親友…)」

マモリの考えは当たっていた。同時に何か運命的なものを感じる。
今目の前にいる大男が、亡き父の親友なのだから。

ならば自分のことを知ってもらおう。そうすれば武器を譲ってくれるかも知れない。

「ヘパートスさん、オレ…そのゼウの息子なんだ。」
「……何？」
ヘパートスは突拍子もないことを言われ、目が点になった。
「いやいや、お嬢ちゃん。もしかするとゼウのファンか何かかもしれんが、残念ながらそれはないぞ。確かにゼウには子供がいるが、確か男の子だったはずじゃ。そんな嘘ついてはいかん！」

「いや！オレこう見えても男なんだよ！」
普段は相手の反応が気になってあまり自分からは言わないことを、力一杯主張してしまった。
今は女装といってもわりとボーイッシュなスタイルなのでわかってもらえるかも知れない。
だか…。

「……いや、いやいやいや、お嬢ちゃんはどう見ても女の子じゃ！わしが愛するモニア・ハールの次に可愛いくらいじゃわい！ガハハハハ！」
まるで信じなかった。

それならと、マモリは魔空間を開き、イージスを取り出す。
フルアーマーは使わなかった。目の前でミニスカに変身するのはさすがに気が引ける。

「これ、知ってるでしょ？」

さすがにヘパートスも言葉が詰まった。それは自分がゼウに譲った剣に相違なかったのだ。

「イ、イージス…？どうしてお嬢ちゃんが？」

「だから、オレが男で、ゼウの息子だからだよ！」

ヘパートスが見間違えるはずがなかった。レプリカ等ではない、正真正銘本物のイージス。それを目の前の可愛い女の子が持っているのだ。

しばらくヘパートスはマモリのことをまじまじと見続けた。マモリの顔が赤くなるくらい。

「し、信じられん…。仮にお嬢ちゃんが男の子だったとしても……いや、確かにお嬢…お主は、ゼウの嫁さんに似ておる…」

「母さんも知ってるの！？」

「ああ、何度か会っているからな…」

ヘパートスはマモリがゼウとアイリのことをよく知っていたことで、マモリがゼウの息子であることを理解した。

「しかしまさか、こんなところでゼウの息子を拾ってきてしまうとはのう！ガハハハハ！！これは愉快じゃ！」

「まあ、信じてもらえたなら良かったよ。」

そこでマモリは、今の自分のおかれている状況をヘパートスに説明した。

突然何者かに呪われてしまったこと。呪いを解く旅をしていること。『マリーティア』という組織のこと。

……。

「なるほどのう…。それでこの町に来たというわけか。」
「うん、それで…父さんからもらった武器も使えないんだ…。使えるのは母さんにもらったイージスだけ…」
マモリは自分かヘパートスの武器を駄目にしてしまったように思えて、申し訳ない気持ちになった。

「だからここの武器をオレに売ってほしいんだ!!ここの武器は父さんの物と同じにおいがする!落ち着くんだ!!それに今のオレはフルアーマーをまだまだ使いこなせてない…。今強くなるにはたくさんの武器がいるんだよ!!お願いっ!!」
マモリは両手を顔の前で組んでお願いしてた。
その姿にヘパートスは胸を打たれるのだが…

「……駄目じゃ!」
「な、なんで!!?」
「たとえお主が立派な男で、親友ゼウの息子だからと言って、それがわしの武器を譲る理由にはならん!」
「だったら、どうしたらいいんだよ!?」
「さっきも言うたが、わしは武器を譲る者を自分で選ぶ!お主にはやれん。」
「わからないよ!どうして父さんには渡してオレに売ってくれないんだ!?」
マモリには父に近づきたいという気持ちがあった。だからどうしてもヘパートスの武器を手に入れたかったのだ。
それでマモリは少しむきになっていた。

「…ふう…よいかマモリ。お主は一体何のためにわしの武器を欲するのじゃ?」
「そんなの、呪いを解くため!マリーティアと戦うためだよ!」
「なぜそのマリーティアと戦う?」

「え？だってあいつらは…人の命を使って魔界樹を育てたり…オレの友達の友達で人体実験したり…俺に呪いをかけたり…許せないから！！」

「マリーティアが憎いのか？武器を取って傷つけたいほどに…。」

「に、憎い？…それはちょっと違うような…。それに傷つけたいなんて思ってないよ！」

「だったらなぜ武器が必要なんじゃ？」

「ええ！？いや…それは、武器がないと勝てないし…」

「勝つ？勝つとはなんじゃ？勝負か？喧嘩か？殺し合いか？」

「ち、違う！殺しなんてしない！！」

「その剣で、人や動物や、魔族を切ったことは？」

「な、ないよ！」

「魔物は！？」

「そ、それは！仕方なく……」

「仕方なく？」

「だって……そうしないと人間が襲われるんだ！この世界じゃどこに行ってもそうじゃないか！オレは母さんや町の人を助けるために！守るために！！」

「…そう、今までお主はそうして敵を、魔物を切ってきた。だがマリーティアは聞けば人間の集団。マモリは人間も斬れるか？」

「え……き、斬れる。でも殺しはしない！」

「曖昧な答えじゃ。」

「……」

「さっきも言ったが…武器をは人を傷つけることができるものだ。武器は血を生み、憎しみを生む。さらに強い力は欲を増幅させ、他者を従属させ、支配を求める。武器を手にする者は等しくそうなのじゃ。」

「オ、オレは…！」

「斬らずして剣はなく、突かずして槍はない。武器とは自分以外を傷つけるためにある。時には殺さなくてはならん時もある。」

「そんな……オレはそんなこと！だいたいさっきは！」
「マモリ！望むか望まないかではない武器を手に戦うことは全てがそういうことなのじゃ！」
「うっ……それでも…」

マモリは考えた。自分が本当にしたいことは何なのか。呪いを解いて男の姿に戻ることなのか。また父の装備を身につけたいからなのか。もしそうなら武器なんていらないんじゃないか？あの老人と話し合えればいいはずだった。

でも違っていた。今は仲間がいる。困っている人たちがいる。マモリは旅をする前に自分がしていたことを思い出した。父の武器でスタートロイを守っていた頃を。なぜそんなことをしていたのか。

それは、マモリがそうしたいと思っていたからだった。父がそうしたように、自分もたくさんの人を守れるようになりたい。だから父の武器を手に取っていた。それを思い出した。

そして今もその気持ちは変わらなかった。

「それでも…？」
「それでもオレは…そんなことに使いたくない！！」
「ならば、何のために武器を取る！！？」
「オレは……」

その時マモリには、単純に父のことが頭に浮かんだ。

「オレは守りたいんだ！大事な人も、困ってる人も…父さんみたいに！だからマリーティアの奴らがたくさんの人を傷つけるなら、オレはそれを止めたい！！」
「相手を殺すことになってもか？」
「殺しはしない！ヘパートスさんが何と言おうと絶対に！！」
「そんな甘い考えが通用するか！！」
「だったらもっと強くなる！殺さなくてもいいように！オレは傷つ

けるためでも殺すためでもない！！守るために、強くなるために武器が欲しいんだ！！！」

ヘパートスは黙り、マモリの目をじっと見つめた。
マモリもその視線を反らすことなく、強くヘパートスの目を見て応える。

「……ククク…ガハハハハハハ！！」
「ええ！？」
「良いじゃろう！マモリ、好きなものを選ぶがいいわ！！」
「い、いいの！？」
「ああ、お主はわしの武器を扱うのに十分な素質を持っておる！さすがはゼウの子じゃあ！！ガハハハハ！！」
「でも…なんで…」
「わしも武器は守るためにあるべきだと言ったじゃろう。悪いが試させてもらった。マモリ、お主が武器を求める理由はわしと同じで、ゼウと同じじゃ。だからお主に武器をやることにした。お主のその眼差しなら、大丈夫じゃ。」

ヘパートスはにっこりわらい、大きな手の平でマモリの頭をくしゃくしゃと撫でた。

「あ…ありがとう！ヘパートスさん！！…でもこんなにあるんじゃどれを選んでいいかわからないな…。さすがに全部は…（お金もないし…）」
「心配いらん。もう一度ゆっくり見て回れ。わしの武器は持ち主を選ぶ。お互いに引かれあう物があるはずじゃ！」
「うん。」

マモリはまたゆっくりと、工房に置かれている残り物の武器を見て回った。今度は自分に合った物をちゃんと選ぶために。
むしろ武器に話しかけるように。

「これ…」

そうして自ずと手に持った武器は６つ。
マモリはそれをヘパートスに見せた。

「なるほどのう。よし、では明日までにこの６つを鍛え直すとしよう。」
「え？何でそんなことするのさ！このままでいいよ！」
「そうはいかん。今この６つの武器は、マモリに選ばれたことでただの武器からマモリの武器に生まれ変わろうとしておる。」
「オレの…武器？」
「そうじゃ。他でもない、お主の武器じゃ！」
「そっか…オレのか…」

今までマモリが使ってきたのはマモリの武器ではなく父の武器、あるいは他の誰かの武器だった。
自分のための、自分の武器。まだどう違うのかはわからなかったが、それは大きな意味があるように思った。

ヒーローごっこ

＜大通り＞

「ったく！何なのよアレ！？汚いし凶悪だしおまけに妖怪みたいなやつばっか！で、結局何の情報も得られなかったじゃない！！」

町のアンダーグラウンドから出てきたキャロットは、妙に機嫌が悪かった。それもそのはず、『マリーティア』については結局のところ誰も知ってる者がおらず、キャロットはアンダーグラウンドの人間に言い寄られるだけで終わったのだ。

「凶悪って言うのはキャロットさんみたいな人を言うのよ…」

ガメイラは呆れたように言う。

キャロットは言い寄る男たちをまず水属性の魔法で半身凍らせ、情報を聞き出し知らなければ全身火傷寸前の火属性魔法で痛め付ける行為を繰り返してきたのだ。

「知らないわよ…。だいたいアンタがあそこに行けば何かわかるって言うから行ったんでしょうが！！」

「それは謝るわ…。でもあの場所にも何の手がかりもないなんて。」

「あ～もう！あたしの美貌とナイスバディの見られ損だわ！現物料踏んだくっとけば良かった！」

発想が完全に強盗か追い剥ぎだった。とても先日まで城でお姫様として生活していたとは思えない。

日も落ちかかり、キャロットは仕方なく一度宿に戻ろうと大通りの人込みを歩く。

タタタタタ――――

「……はぁ……はぁ…」

ドタドタドタドタ――――――――

「待ちやがれっ！ちぃ、邪魔だ！！」

「くそっ、大人しくしてろ！」

「はぁ……はぁはぁ…」

大通りの人混みの中、人の隙間を縫うように走る少女。
そしてその後ろから人々を押しのけて少女を追う男たち。

「はぁはぁ…きゃあっ！！」

少女は後ろに注意を向けたとたん、やわらかいクッションにぶつかった。

「な、何っ！？」

突然の衝撃にキャロットが驚く。
少女がぶつかったのはクッションではなく、キャロットの豊満な胸だった。

「た、助けて下さい！！」

ぶつかってきた少女は目を潤ませながらキャロットに懇願した。
なぜこれだけ人がいる中でキャロットなんかに頼んでしまったのか、それはもう少女の失敗と言うしかないのだが。

「（…こ…このパターン、城にあった本でなんども見かけたわ。困って助けを求めてきた女の子を連れて一緒に逃げ、悪いやつらをやっつける…ヒーローとかヒロインとか探偵とか怪盗とか！！今まさにあたしがその主人公になろうとしているのね！？）」

キャロットの目がすごい勢いで輝きだした。

「こっちよ！来て！！」

キャロットは少女の手を引き、走り出した。

「ちょ、キャロットさん！！？」

ガメイラもその行動に慌てる。

キャロットは少女の手を引き、さっきの路地裏からアンダーグラウンドに入る。さっき大暴れしたばかりの場所だ。追手の者たちも必死になって追いかけてきた。

「え、お姉さん、こんなところに入って大丈夫なんですか！？」

「まかせておきなさい！！」

何が楽しいのか、キャロットは完全に遊びモードになっている。

キャロットは先ほどの場所で立ち止まり、少女を背に隠して男たちに向き合った

男たちもキャロットたちに追いつき、とうとう追い詰めたとじりじりと近寄ってくる。

「おい女！その娘とはどういう関係だ！？」

「邪魔するなら消えてもらうぞ。」

男たちはナイフを構えた。その構え方はそこそこプロらしかったが、そういうことがわかるキャロットではない。

「あんたたちが何者かは知らないけれど、よってたかって女の子を追い回すなんて悪党に決まってるわ！」

「だったらなんだってんだ！てめえには関係ねえだろう！？」

「関係あるわ。今のあたしはヒーローなんだから！天にかわって、お仕お…」
「ふざけたこと言ってるんじゃねえ！さっさとそいつを渡せ！！」
「痛い目にあいたくなければ素直に言うことを聞くことだ。我々に逆らうと後悔するぞ。」
「う、うるさーい！今あたしが喋ってたでしょ！！…もういいわ、空の彼方に飛んで行きなさい！…ファウンテン・レイン！」

男たちの足下から突然水が間欠泉のように勢いよく吹き出した。
男たちはその水飛沫に乗せられて上昇していく。
「なっ……！あ、おぉぉぉぁぁぁあ！」
「くそぅ！明日こそ…必ずぅあああ！」
男たちはなんとも負け犬らしい台詞を吐きながら、ビルの隙間からのぞく暗くなりかけた空に放り出されてしまった。

「すごい……」
「こんなもん、あたしにかかれば余裕よ。むしろ物足りないくらいだわ！」
「（さっきまで散々暴れてたのに…）」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜高級ホテル最上階＞

「……それで、あなたどうしてあんなやつらに追われてたの？」
キャロットはさも当然のように高級そうなベッドにふんぞりかえって少女に聞いた。

ここはキャロットが助けた少女の部屋。とても女の子が一人で使っているとは思えない場所である。

「それが、私にもわからないんです。今日イベントが終って少し買い物に行ったら…突然襲われて…」
「イベント？」
「あ、すいません！自己紹介がまだでしたね。私モニア・ハールっていいます。これでも一応歌手なんです。」
「か、歌手！？…そういえば見たことあるわ！ていうか完全に思い出した。今大人気のアイドルじゃない！！」
「知ってくれてるんですか？ありがとうございます！」
「…じゃあ、あいつらはきっとお金目当ての誘拐犯ってところかしら。いつから？」

「わたくしがお話致します。」
「きゃ！！」
突然後ろから話しかけられてキャロットは驚いた。
後ろをふりかえればスーツ姿の女性が立っている。

「セーラ…」
「え…？あんた誰？」
「わたくしはセーラ・フラン。彼女のマネージャーです。」
「マネージャー？」
「…芸能人のお世話役みたいな人よ。」
ガメイラは聞こえないようにこそっと言った。
「ああ、執事みたいなものね！」
「はい。まずはうちのモニアのことを助けていただいたことについてお礼を言わせてください。」
「あはは！いいのよ、そんなこと！！…それで、このモニアって子はよくああ言うことに巻き込まれるの？」
「いえ、基本的にはありません。彼女は今や世界的にも有名で、その存在は象徴的なものとなっているため、彼女に危害を加えるとい

うことは世界を敵に回すことにもなるのです。」
「そ…そんなにすごいんだ…」
「それに彼女に危害を加えようとすると自動的に私や近くのガードマンに連絡が入るようになっているのです。」
セーラがそう言うと、モニアは人差し指の指輪を見せた。それが危険を知らせる魔導具だという。

「じゃあ今日も連絡を受けていたの?」
「いえ、それがなぜかその連絡が入らず…対応が遅れてしまったというわけです。」
「へぇ…なんでかしらね?」
キャロットは顎に手を当て考えてみた。自分のイメージする探偵になりきっているらしい。
しかしその場で考えても結局わからず、モニアもセーラにも見当もつかない様子だった。

「あ、ちょっと待って!」
何か気がついたようにキャロットはそう言うと、ガメイラを指輪に近づけた。
「どう、ガメイラ。何かわかった?」
人前で話すことを極力避けているガメイラにとっては急なフリだったため戸惑ったが、ガメイラはじっくりと指輪の魔力を感じ取ってみた。
「…特に異常は感じないわね。ちゃんと魔導具として機能しているように思うけど…」
またガメイラは聞こえないようにこそっと言った。

「異常は感じないわ。ちゃんと魔導具として機能しているわね。」
まるで自分の手柄のように自信たっぷりに言うキャロット。

「そ、そうですか……ではやはり、今日は誤作動を起こしたということでしょうか？」
「そんなところだと思うわよ。」
「…わかりました。じゃあモニア、その指輪を渡してくれる？もう一度ちゃんと調べてみるから。」
「あ、はい。」
モニアは指輪をはずし、セーラに手渡した。

「でも、もしこれで明日襲われたら……」
「そうね…それだけは何としても阻止しないと……」
モニアの表情が曇っていく。
「明日何かあるの？」
「あの…明日、私のコンサートがあるんです！アフロディア祭っていう、私にとってすごく大事なコンサートが。そのコンサートだけは絶対に成功させたくて…絶対に邪魔されたくないんです！！でも今日みたいな人たちが襲ってきたらって思うと……」
「なるほど。確かにそれは不安かもね。」
「（アフロディア祭…）」
ガメイラは何か思うところがあるようだった。

「あの、お姉さん！！今日みたいに明日も私を守ってくれませんか！？」
するとモニアは立ち上がり、強い視線でキャロットを見た。
「ちょ、モニア！？」
「コンサートが終わるまででいいんです！」
「え？…えっと…う～ん……」
キャロットは悩んだ。今は『マリーティア』の情報集めが先なのだから。
「お願いします！！」
モニカが頭を下げる。

「そう言われても……」
「いいんじゃないかしら？」
そう言ったのは意外にもガメイラだった。
「もしかしたらマリーティアが絡んでいる可能性もあるわ。しばらくこのアイドルさんの周りにいて様子を見ましょう。」
「あ～そう言う感じね。……わかったわ、モニア！あたしがボディーガードしてあげる！！」
「ほんとですか！？ありがとうございます！」
モニアの表情が一気に明るくなった。

アイドルの危機

＜鍛冶工房＞

カーン――――――カーン――――――

ヘパートスはマモリが選んだ6つの武器を、さらにマモリ専用に鍛えなおすと言って作業に入っていた。サウナとまではいかないが、じっとしていても汗が出る。部屋はそんな熱気に満ちていた。

しかしマモリはその熱さに耐えるどころかものともせず、じっとヘパートスの作業を眺めている。

ヘパートスは全身の神経を目の前の剣に集中させ、一発一発最大の力を込めて、打ち続けた。全身汗だく。手に握られている鉄鎚はヘパートスに呼吸を合わせ、まるで体の一部であるかのように動いている。

マモリはその光景に感銘を受け、すごいやら格好いいやらの感想を言いたかったが、集中を乱してはいけないと思い、黙って作業を見守っていた。

その時、キャロットの声がマモリの腕から聞こえてきた。

「「ちょっとマモリ？今どこにいるの？すぐに来てほしいんだけど！！」」

今朝別行動をとる前に、ガメイラが簡単な通信機をキャロットとマモリの腕につけさせていたのだ。互いの魔力を電波のように飛ば

し、そこに言葉を乗せて通話する魔導具である。昨日このダーナ・ヘヴンに着いた際に、買っておいたのだった。

「うわっ！！キ、キャロット……ヘパートスさんごめん！仲間が…って、ああ！」

マモリは自分がいつまでたっても宿に帰ってこないから心配して通信してきたのだと思った。確かにそういう事態に備えて用意したものだったが。

「ごめん！今は行けないんだ！実は今オレの新しい武器を鍛えてもらってて…」

「「武器？…あぁ、そういえばそういう用事だったわね。でもこっちもどうしてもマモリに来てもらわないと困るのよ！！」」

「そんなこと言われても…」

「「まあ聞きなさい！今あたしはモニアっていうアイドルと一緒にいるんだけど、その子のことでマモリにお願いがあるの！」」

「モニアだって！？」

それはマモリが昼間に見たアイドルの名前であり、目の前の大男が愛しているとまで言うほどのアイドルの名前。

当然その声はヘパートスの耳にも入る。ヘパートスは何事かと思い、作業を中断してマモリの腕から聞こえる声に耳を傾けていた。

「「そう。そのモニアって子がちょっと大変な目にあってて、まあ成り行きであたしが助けてあげたのよ。…そしたら明日のコンサートでも護衛をしてほしいって言われて。それでマモリにも協力してほしいの。ていうかマモリじゃないと駄目なのよ！ガメイラはもしかしたらマリーティアが関係してるかもって言うんだけど。」」

「マリーティアが！？…ヘパートスさん！！」

マモリはどうするべきかわからなくなり、ヘパートスの方を向いた。

「確かに明日は彼女のコンサート…アフロディア祭がある。わしも行くつもりじゃ。」
「そうだったんだ…」
「……じゃがもしその声の、マモリの仲間の子の言うことが本当なら、彼女に危機が迫っているということになる。」
「うん、どうしたら……」
「本当はわしが今すぐにでも行ってやりたいところじゃが、今はマモリの武器を鍛えねばならん。…今でなければ、ならんからな。」
そしてヘパートスはまた鉄鎚を握り、作業に戻ろうとした。
「マモリ。」
「うん。」
「武器が完成したら明日コンサートに届けてやろう。だからマモリはモニアのところに行ってやってくれんか？」
そしてヘパートスは作業を再開した。
「で、でも…」
「別にここでお主が見ていなくても、ちゃんと完成する。わしと、自分の選んだ武器を信じろ。」
「……」
「そしてわしはお主を信じておる。ゼウの息子よ。先ほど言ったことが本当ならば、わしの愛するモニアを守ってやってくれ！」
「……わかったよ！」

「「ちょっとマモリ！聞いてんの！？」」
「あぁ、ごめん！どこに行ったらいいの！！？」
「「もう、ちゃんと返事してよね！場所は……」」

「ヘパートスさん、行ってくる！」
「待て！」
「え？」
「イージスも置いてゆけ。お主用に鍛えなおしておく。」

そしてマモリはイージスと新しい6つの武器をヘパートスに預け、鍛冶工房を後にし、モニア・ハールが泊まる高級ホテルへ向かった。
その高級ホテルは町の中心に大きく、高くそびえる、街の象徴のようなホテルだったため、マモリにもすぐに場所が分かった。

カーン――――――カーン――――――――

「モニア……何事もなければよいが……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜高級ホテル＞

「ふう。大丈夫よ、もうすぐあたしの仲間が来てくれるから！」
「ごめんなさい、無理を言ってしまって。」
「いやいや、いいのよ。あたし的にもうれしい展開なんだから。」
そういうキャロットの顔は、なぜかにやにやとしていた。それはもう、楽しそうに。

「しかし、そのマモリという方は本当に大丈夫なんですか？」
セーラが心配そうに聞いた。
「大丈夫よ！少なくともあたしよりはね！！」

それからしばらく3人はマモリを待った。その間、おなかがすいたといいキャロットはホテルのルームサービスを勝手に頼むなど、久しぶりのお姫様気分を存分に味わっていたようだ。本当に遠慮の知らない女である。
だがモニアたちはそのことに何も言わず、むしろ楽しそうにキャロットとおしゃべりしていた。

プルルルル――――
ホテル内の電話が鳴る。セーラがすばやく電話を取り、対応した。
「はい。…はい。ではそちらで少々お待ちください。（ガチャ）…キャロットさんのご友人が到着されたようです。迎えに行ってきます。」
そう言ってセーラは部屋を後にした。

「…セーラってなんかカタい人ね。一緒にいて窮屈じゃない？」
「まあ……確かにそう思うこともありますけど、でもすごくいい人なんですよ。私のことすごく考えてくれてるし、すごく頼りになるんです。私セーラのこと大好きですから！」
モニアはアイドルの営業スマイルとは違う、本当の笑顔でそう答えた。

しばらくしてセーラがマモリを連れてきた。
「お、マモリ！待ってたわよー！」
「……！」
キャロットが上機嫌にマモリに声をかけるが、マモリは部屋の入口にたち固まっていた。それもそのはず、マモリは昼間パレードを行っているモニアを見て、まさに心をうたれたのだから。

固まっているとモニアの方から声をかけてきた。
「あなたがマモリさんですね。来てくれてありがとうございます。」
丁寧に会釈するモニアに、マモリは我を忘れそうになった。
「え……あ、えっと……こんにち…じゃない、こんばんは！！」
「ちょっとマモリ、何赤くなってんのよ！！女の子同士で変よ！！」
「え？オレは…」
「オレじゃないでしょう？」

そう言ってキャロットが顔を耳元まで近づけ、マモリに口添える。

「ごめんマモリ、ちょっと女の子のふりしといて！彼女を安心させるためだから！！」

「え、えぇ！？」

確かにマモリも変態扱いされるのはごめんだが、モニアはマモリにとって男を見せてアピールしたい相手だ。もっともそれは無意識に近い感情だが。だがらその仕打ちはかなり酷というものだった。

加えてガメイラも、

「マモリちゃん、彼女がマリーティアに狙われてる可能性があるの。だから…」

と、ダメ押しする。

マモリは観念して説明を聞くことにした。

「はぁ……それでオ、私は何のために呼ばれたの？その、モニアさんが狙われてるって…」

「はい。それであの…明日のコンサートが終わるまででいいので、護衛をキャロットさんにお願いしようと思ったら…」

「あたしより適任がいるわよって教えてあげたのよ。」

「それが…私なの？」

「そ！」

強さで言うならキャロットの方が強いはずなのだが。マモリは何か嫌な予感がした。

そこでセーラが詳しい説明を始めた。

「明日のコンサートなのですが、絶対に成功させなければならないのです。アフロディア祭と言って、このモニア・ハールにとっても特別なコンサートでして。」

「はぁ…」

「しかし今日、彼女はどこか組織めいた連中に襲われまして、最悪の場合明日のコンサート中にまた襲われるという可能性もあるのですよ。」

「それは…まずいね。」

確かにそれはまずい。彼女のコンサートなら自分も成功してもらいたいし、その歌もまた聞きたい。それにあのヘパートスが楽しみにしているのだから。

でもなぜ自分でないといけないのだろう。

しかし、次の言葉を聞いてその答えがわかった。そして嫌な予感も的中するのだ。

「それで、サポートボーカルとして一緒にステージに上がってほしいのです。より近くでモニアを守るために。もちろん、アイドルとして！」

「……ええ！！？」

「アイドルとしてステージに立ち、モニアとデュエットしてほしいのです。」
冷静にそんなことを言うセーラ。

「ちょっと！そんなこと急に言われても無理だよ！！明日のコンサートに出る！？私が！？」
予想だにしないことを言われた。どう考えても無理だろう。歌も踊りも知らないマモリが大勢の客の前に出てアイドルと一緒に歌うなんて。

「でも……マモリにはそれができるのよね。」
キャロットは目を細め、不気味な笑いとともにマモリに近づいてくる。
そう、マモリならそれが可能だった。フルアーマーを使えば。
フルアーマーは装備したものの能力を最低でも１００％引き出すことのできる絶対魔法だ。その魔法で身につけるものがアイドルの衣装ならば、当然のようにアイドルとして踊り、歌うことができるようになるのである。

「さぁマモリ！お着替えの時間よ～！」
「そ、そんな……うわ～！」
キャロットはマモリの意思を無視して、マモリの服に手をかけはじめた。

「むふふふ～…ってまだ衣裳がないわ！」
キャロットはその重大なことに気づき、手を止めた。
「セーラ、この子がステージに出るとして、衣装はあるの？」

「はい。彼女の体系ならモニアのもので大丈夫でしょう。」
そう言ってモニアはいくつかの衣装箱を用意し、たくさんのステージ衣装を広げた。

「これは…たくさんあるわね！楽しくなってきたわ！！」

どこかの学校の制服のようなデザインのものや、お城のお姫様のようなもの、ほとんど裸じゃないかというようなセクシーなものまである。

「こ、こんなの着て人前に出れるわけないよ……だってオレ…！」
「私でしょ！？今まで散々その姿で人前に出てたじゃない！一緒よ！」
確かにウォーロッセオでもチャイナドレスを着て大衆の前に出た。しかし今回の衣装はどれもそれとは違う恥ずかしいものばかりだし、何よりアイドルとしてみんなの前に出るということは、いやでも女の子女の子したことをしなければならないだろう。それが大きな違いで、マモリにとってはこの上ない辱めだった。
「じゃあモニア、明日のステージに合うものを選んであげて。できるだけ可愛いのね！」
「はい！」

こうしてマモリの衣装合わせは順調に進むのであった。

「そ、それはダメ！そんなの着れるわけ……いやぁ……あぁ、そっちはもっとダメぇ……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜コンサートホール前広場＞

夜も更け、マモリがキャロットたちの手によってアイドルにされようとしている頃。

「マモリ～…どこ行ったんだぁ…」

ジャンは昼間にマモリとはぐれてから、ずっと探して歩きまわっていたのだった。

「宿に帰ってもマモリどころかキャロットも戻っていないし…まったくどうなってるんだ…」

目の前のコンサートホールには明日のアフロディア祭の看板やらロゴやらポスターやら装飾やらで、華やかに飾りつけられていた。

しかし今は夜。広場には人気はなく、夜風の音がかすかに聞こえるだけだった。まさに嵐の前の静けさ。

いや、全く人がいないわけではなかった。ジャンの他に広場の中心にぽつんと立つ人影がいる。その人影は何やらじっくりとコンサートホールを見ていた。

ダメ元でジャンはその人に声をかけてみた。

「なあそこの人。ピンク色の髪の可愛い子を見なかったか？」

人探しの情報集めとしては特徴が大雑把すぎる。

「あぁ？」

その人…長髪にバンダナを巻いた色黒の男は機嫌が悪そうに返事をした。

「てめぇ何話しかけてんだよ。うるせいから消えろ！！」

「な、なんだその言い方は！こっちはちょっと人を探してるだけだ！」

突然の罵声にジャンもさすがに驚いた。ジャンの口調はよくはな

いが、その男はあまりにも感じが悪い。見れば目つきも鋭く、まるで自分以外をすべて見下しているようだった。
「だからうるせぇって！俺は今、夜を感じてるんだからよ！！」
「は？夜を感じてる…？」
「……いいからどっか行け！」
「わかったよ……くそぅ、マモリはどこに行ったんだ。はぁ…」
ジャンはやっぱり駄目、むしろ聞く相手を完全に間違えたと、損した気分になってその場を離れようとした。

すると背中からドロドロとした異様な気配を感じる。それはさっきの感じの悪い男がいた方向だった。
「てめぇ……今マモリって言ったか？」
「な！？」
後ろを振り返るとその男の髪が重力を無視して、ゆらゆらと四方になびいている。
月の光が雲に隠れ一層暗くなったせいか、男の立ち姿はとても不気味だった。
「お、お前マモリを知ってるのか？」
「それはこっちのセリフだ！そのガキは今どこにいる？」
ジャンはその男が放つ異様な雰囲気から、けして味方ではないと判断して拳を握り、戦闘態勢に入った。

「おまえ…まさかマリーティアの……？」
「はっ！その名前まで知ってんのかよ！！だったらただじゃ帰せねえなぁ！！」

男は鋭い眼をさらにギラつかせ、ジャンに突っ込んできた。
しかし接近戦はジャンにとって好都合。ジャンは男をギリギリで交わし、カウンターを決めようと拳を振りぬく。
ジャンの拳は男の顔面を捉え、そのままノックアウト。

するはずだった。しかし、拳が顔面にヒットしたと思ったら、その拳は男をすり抜け、完全に空を切ったのである。男の顔はたしかにそこにあるというのに。

「んな！！」

「は！そらよ！！」

男は回し蹴りをジャンの背中にヒットさせる。顔面はすり抜けたのに、男の足は確実にジャンに命中していた。

ジャンはそのまま前のめりに倒れた。

その後も相手の攻撃は喰らうのに、こっちが反撃してもすり抜けてしまう。ジャンは訳がわからなかった。まるで幽霊を相手にしているようだ。

「な…なんだお前、その体は！？」

「はぁ？なんでそんなことてめぇに教えなきゃいけないんだよ！質問していいのは俺様だ！！そのマモリってガキ、この町にいるんだろぅ！？どこにいるんだよ！？」

男はジャンを嬲るように、ケラケラと笑いながら殴る蹴るの行為を続けた。

「ぐぁ！…だから、こっちも探してるんだよ！！」

「あぁ、そうだったか……じゃあもういいや。死ねよてめぇ。」

男は指先を伸ばし、まっすぐジャンののど元を狙ってきた。

「がは！」

そう叫んだのは男の方だった。

ジャンは男の手が首に当たる直前に、両手で男の手をシンバルをたたくように潰したのだ。
攻撃するときは体に触れられる。そのタイミングにかけたのだった。

「あー痛て！でもこれでようやく一発くれてやれたぜ！あはは！」
いつの間にかジャンはマモリたちを探すことを忘れ、闘いを楽しんでしまっていた。

しかし、相手の男は闘いを楽しむような相手ではなかったようで、ジャンの反撃があまりにも意外だったのか、その場に突っ伏して手を抑えていた。
「ぐあー！痛い！痛いい！！てめぇ、なんてことしやがる！！」
「え？…あれ！？もっとこう、ここから激しい闘いになると思ったのに…そういう反応かよ…」
「うるせぇ！！俺様は痛いのが大嫌いなんだよ！！くそう、もうちょっとで！！」
「（……なんだこいつ…）」

とにかくジャンはその男を縛りあげた。どういう理屈かはわからなかったが、縄は確かにその男に触れ、しっかりと縛ることができた。

「ま、こいつから情報聞き出せばいいか……おいお前！」
「あ？なんだよ！！」
「マリーティアのやつなんだろう！？なんでこんなところにいるんだよ！！」
「てめぇに関係ねえだろう！！」

ジャンは縄の上から男を蹴った。今度はすり抜けることはなかっ

た。

「いて！やめろバカ！！」
「だったら話せよ！」
ジャンはガシゲシと男を蹴り続けた。
「あだ！わ、わかった！！俺様はだな、ただ単純に明日のコンサートのために場所の下見に来ただけだ！！」
「は？コンサート？」
そう言われてジャンは初めて目の前のコンサートホールがイベント用にセットされていることに気づいた。
しかもそこには大きな顔写真が張り出されており、その写真は昼間見たアイドル少女の顔だったのだ。

「……明日ここで何かあるのか！？」
「てめ、そんなことも知らねぇのかよ！！明日はスーパーアイドル、モニア・ハールが出るアフロディア祭だろうが！」
「生意気！」
「いでぇ！！」

「（……だったら、もしかしたら明日マモリも来るかもしれないなぁ。あいつあのアイドルにかなり興味あったみたいだし…）」
ジャンはまた町中探し回るよりは、明日この会場で探す方がいいと考えた。もうしばらくすれば日も上がる。待っていればマモリの方から来るかもしれない。
そんなことを、いつの間にか顔を出していた月を見ながら考えていた。

アフロディア祭

＜コンサートホール＞

「みんなーー今日は来てくれてありがとうーーー！！！」

「「イェーーーー！モニアちゃーーん！！」」

「「Ｌ・Ｏ・Ｖ・Ｅ！モ・ニ・ア！！」」

会場にはすでに万単位のモニアファンが集まっていた。ステージの上のモニアともども、大熱狂状態になっている。

暗い客席では満点の星空のようにペンライトが光り、対照的にステージでは色とりどりの照明がモニアたちを輝かせていた。

「さぁ！盛り上がってきてるところで！次の曲行くよーー！！」

コンサートが始まってから、すでにモニアは３曲ほど歌っていた。その歌唱力、パフォーマンス力、曲の合間のＭＣとしてのトーク力、そしてファンを引き付ける力。どれをとっても昨日のホテルでのキャラとは正反対のようだ。

二重人格ではなく、アイドルとしてのまじめさと誇りがそうさせている感じ。

「おっと！！その前にここでみんなに紹介しておくね！！みんなも気になってたと思うんだけど…」

モニアはそう言って、隣に視線を流す。そこにはもう一人、モニアと同じくらいの背丈の、ピンク色の髪をツインテールにしたアイドルがいた。

マモリだった。

「紹介しまーす！わたしのお友達アイドル！マモリちゃんでーーーす！！」

モニアの紹介で会場がドッと盛り上がる。普通ファンならモニアだけのオンステージを期待していただろうに、しかし罵声などはなく、声援がマモリに浴びせられる。

「「かわいいーーー！」」

「「マモリちゃん、こっち向いてーーーー！」」

モニアの言うことなら何でも許されるのか、一種の洗脳空間だとマモリは思った。しかし実のところ、それはマモリのアイドルとしてのオーラが本物だったからこその、ファンの反応なのだ。

「はーい！マモリでーす！！今日は、お友達のモニアちゃんに一緒に出ようって誘われちゃって、こうして応援に来ちゃいましたーー！みんな、よろしくねー！」

マモリは自分の中の男のハートと尊前を崩さないように。しかしアイドルとして語尾にハートマークを忘れないように。アイドルたらんと必死に振舞った。

というのも、昨日の衣装合わせから今に至るまで、マモリは徹夜でアイドルとしての振る舞いをモニアとセーラに指導されたのだった。

マモリの来ているアイドル衣装はフルアーマーによって装備されたものだったため、踊りも歌も完璧にこなせるようになってはいたが、マモリの恥ずかしがりな部分とどうしても隠しきれない男の部分を無理やり押させつけるようにして、今アイドルとしてステージに立っているのである。

「さぁ！じゃあ次の曲いっちゃいましょう！マモリちゃん、次の曲

は！？」
「うん。みんなおまちかね！ラブ・エリシオンだよー！」
「「キターーーーー！！」」
「「神曲ーーーーーー！！」」
音楽と一緒にマモリとモニアも踊り出す。マイクを手にして歌う2人の姿に、会場はさらなる盛り上がりようだった。
マモリはモニアにぴったりと息を合わせ、自分のパートも踊りも完璧にこなしている。
「♪♪（…すごい！…マモリちゃん、ほんとにはじめてだなんて思えない！！今までこんなことなかった…気持ちいい！！）」
「♪♪♪（はぁ、はぁ…すごい熱気だ…モニカにもついていくのがやっとだよ。……それに会場の盛り上がり……なんだろう……恥ずかしいのに…はずかしいのに……楽しい！！）♪♪」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
舞台裏ではキャロットとセーラがその様子をうかがっている。マモリとモニアがしっかり舞台で踊れているかもそうだが、それ以上に会場に不審な動きがないかを確認するために。
「…キャロットさん、昨日確かにその男たちは明日と宣言したのですよね？」
「ええしたわよ。だから必ずこの会場にいるはず…きっとあいつらのリーダーもね！！」
「そうですか。まあこのまま何事もなければ良いのですが……。それにしても、あのマモリさんとは一体何者なのですか？初めての人間がこれほどの大舞台であそこまで動けるなって、ましてや歌える

なんてありえません。私はもともとあたなが舞台の袖にいてくれればと考えていたのに。」

「可愛いでしょ、うちのマモリは!?まああの子は特別なのよ。何でもできるパーフェクト超人なの。それにせっかくなんだから隣にいた方がモニアも安心でしょ?」

「それはそうですが…」

「あ~、それにしても可愛いわマモリ!ほんとにアイドルみたい…輝いてるわ!!でも…」

ステージに立っているマモリは、キャロットの目から見ても本物のようだった。

だがやはり、それ以上に輝いているのはその隣のモニア。

その歌は聞いているだけで力が溢れだすようで、キャロットも今ならどんな魔法でも使えるような、そんな気分にさせる歌だった。

「マモリちゃん…この姿をアイリに見せてあげたいわ。」

「あらガメイラ。」

しばらく声を聞いていなかったガメイラが急に声を出した。

「それにしてもあのモニアって子の歌。あれはまるで……」

「キャロットさん、何か言いました?」

セーラはガメイラの声に気がついたようだった。

「え?あ、いや…」

「いいわ、キャロットさん。…セーラさんでいいのね?」

「え!?どこから…?」

キャロットは仕方なく、ガメイラのことをセーラに説明した。さすがに驚いたようだったが、もともと冷静な性格だったため、すぐに落ち着いたようだ。

そういうところはどこかのクソ執事のようだと、キャロットの心の声が言っている。

「それで、あなたに聞きたいことがあるのだけれど。」
「何でしょうか？」
「このコンサートが彼女にとって特別だってい言っていたわね。どういうことなのかしら？…というより、彼女はアフロディアとどういう関係なのかしら？」
「ああ、そのことですか。…彼女はアフロディアの娘なのですよ。」
「む、娘！？アフロディアに娘がいたの！？」
キャロットがステージに漏れないギリギリのボリュームで声を上げる。
「はい。公には公開されていませんが。」

アフロディア。
世界中で最も美しいとされる歌手。その美しさと美声により、その歌を生で聞いた者は老若男女問わず必ず魅了されるという。そのため現在はメディアに出ることはほとんどなく、その詳細もあまり知られていない。世界の秘宝とも言われる謎の大スターである。
当然その存在を知らないものは少なく、当然キャロットも知っている。ジャンはともかく、マモリも名前くらいは聞いたことのある女性だ。
そしてアフロディア祭とは、世界各地で行われるアフロディアを祝福する祭典で、世界で活躍するトップアイドルたちが各地でコンサートやライブを開くのだ。そしてこのダーナ・ヘヴンでは、モニア・ハールのコンサートが開かれることになっていたということ。

「なるほどね。昨日の彼女の必死さは、そういうことだったわけね。」
「はい。このアフロディア祭はモニアにとって、会えない母とのつながりなんです。」
「へー、あの子アフロディアの娘なんだ…」
「一応オフレコなので、内密にお願いします。」

「わかったわ！」
キャロットは親指を立てて了承した。まだまだヒーロー気分に浸っているのだ。
「（それで、彼女の歌にはあんな魔力があるのね…。マモリちゃんと同じってわけか。）」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「「私の歌をきけーーーーー！！」」
マモリとモニアの声がはもる。宇宙規模で観客を惹き付けるような魅了のある言葉だった。
マモリは会場のテンションにあてられて、すっかりアイドルになっていた。歌も踊りもトークもノリノリで、モニアと一緒に会場を盛り上げている。
「さあ、次でいよいよ最後の曲だよ！」
「みんなここまで付いてきてくれてありがとうー！」
モニアとマモリの笑顔は最高だった。マモリにすでに恥ずかしさを忘れているようで、そこには立派なアイドルが立っていた。
そしてコンサート最後の曲は、その日一番の盛り上がりを見せて終わった。
会場全体が一体となり、ふわふわとした、またはイキイキとした不思議な雰囲気が会場全体を包んでいる。だれもがこのまま終わるのを惜しみ、しかしとてもすがすがしい気分に酔い痴れていた。
マモリもまるで甘い酒に酔ってしまったかのような気持ちよさを感じている。

「（…はぁ…はぁ…すごい…すごく気持ちいい！アイドルって、ステージに立つって、こんなに気持ちがいいんだ…！サイコー！！）」
「ほら、マモリちゃん！最後だよ！みんなにあいさつしなきゃ！」
「う、うん！」
モニアがマモリの腕を引き、ファンのみんなに手を振った。

「今日は来てくれてありがとーーー！」
「わ、私もみんなと一緒に盛り上がれてサイコーだったー！」
「みんな、大好きだよーーー！！」
モニアのその一言が、まさにコンサートの終わりの合図だった。
オーロラのような照明のベールが、２人を隠すようにゆっくりと消える。

モニアもマモリも無事に終わったと安心しきった。

その時、

バゴォォォォォン！！

真っ暗なステージに轟音が響いた。ステージ音響とは異なる、激しい音が。雰囲気台無しに。

アフロディア祭（後書き）

良かったら感想、評価お願いします。

ステージ裏の陰謀

「な、何!?今の音!!」
「わかりません!こちらで用意した効果音ではありません!」
突然の爆発音のような轟音にキャロットとセーラが慌てた。
「とにかくコンサートは終了です。早くモニアを!」
「そうね……っえ!?」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

会場からはザワザワと観客の声がしていた。大きな混乱はないが、不安感が会場に広がっているのがわかる。

「モニア…ど、どうしよう…?」
「落ち着いてくださいマモリちゃん!こういう時はとにかくお客さんを不安にさせないことです!」
モニアは小さな声で何かをマモリに耳打ちすると、真っ暗なステージの上を堂々と前進し、客席ギリギリのところで止まった。

「みんなー大丈夫!今のは演出だよ!!でも私も聞いてたのより大きくてびっくりしちゃったあ!みんなもびっくりしたよね!?ごめんねー!」

「「モニアちゃんだ!」」
「「え、演出かぁー」」
「「驚いた…」」
「「ほんとに爆発かと思ったわ。」」
「「まったく、モニアちゃんをびびらせるとは許せねえスタッフだな!」」

「安心して。みんな！暗いけど気を付けて帰ってねぇー！！」

暗闇から聞こえるモニアの声に安心した観客は、慌てずに次々と退場していった。全く、言葉の一つ一つが魔法のようである。

モニアのおかげで、混乱は避けることができたのだった。

まあ、本来ならモニアたちがはけた後で、会場が明るくなるはずなのだが。しかしどうも、ステージの上の様子から察するに、そうもいかなそうだった。

ステージの上ではコンサートと違った緊張感がただよう。

暗くて遠目からでは見えないが、黒子のような人間が何人も構えている。

コンサートが終わる瞬間を狙って、そいつらは現れたのだ。

「へへへ、びびらずに客を逃がすなんて…さすがスーパーアイドルだな！」

黒子のリーダー格の男が言った。

「お前らがキャロットの言っていたやつらだな！」

マモリはモニアを庇うように客席を背に立つ。まだ客席から人がいなくなるまでフルアーマーは使えない。使えばその光でまた客の注意を集めてしまうから。

「マモリちゃん…」

「大丈夫、オレが守るから！」

「さあモニア・ハール。おとなしくこっちに来な。」

「俺らもあんまり騒ぎは起こしたくないんでな…。」

どうも昨日モニアを狙ってきたものたちの仲間のようだった。まあマモリはそいつらを知らないのだが、モニアにはそれが直感的にわかった。

「嫌です！どうしてあなた方のような…」

「モニア、刺激しちゃだめだよ！とにかくここから逃げよう！…キャロットは何やって…」

その時ステージの裾からセーラが姿を表した。

「こっちです！早く！！」

「セーラ！」

セーラが呼んでいる。しかしそこまで行くには黒子たちをすり抜けかければならなかった。

「行かせないよー！」

セーラに気付いた黒子たちが、間に立ちはだかる。

「な、邪魔するなよ！」

そんなお願い、聞いてもらえるわけないが。

ともかく今のアイドル衣装ではマモリの戦闘力はほとんどゼロ。こんなときのためのキャロットのはずだったのに、どこに行ったのやらである。

「早く！」

黒子たちの向こう側でセーラが大きく手を振っている。

「もういい、騒がれないようにさっさと捕まえろ。」

しびれを切らしたのか、リーダー格の男がマモリたちの近くの黒子に指示を出した。

「シャハハハ！」

４人の黒子が音もなく襲いかかる。さすが黒子。

「モニア！」
マモリは敵を背に、モニアを抱き締めて深く身を伏せた。小さな抵抗だった。

バキッ！ドサッ！っという音がする。マモリは一瞬自分かモニアが殴られたのだと思った。
だが痛みもなければモニアが殴られた様子もない。

恐る恐る目を開けると、倒れていたのは黒子たちだった。

「え…？」

「大丈夫か？マモリ！」

そこに立っていたのはジャンだった。
「ウォーロッセでもこうして俺に助けられたな。それに俺のリクエスト通りのアイドル服。マモリはどれだけ俺のことが好きなんだ！！？」
「そ、そんなんじゃない！でも助かったよジャン！なんでここに！？それにその人。」
見ればジャンの傍らには縄でぐるぐるに縛られた知らない男がいる。ジャンに引っ張られてかわいそうなことになっていた。
「話は後だ！早くその子を逃がすんだろ！？急げよ！」
頼もしい仲間の思ってもない救援で、道は開かれたようだ。

「行くよ、モニア！！」
「は、はい！」
マモリはモニアの手をしっかりと握りしめ、黒子たちを脇目にセーラの元に一直線に駆け出した。

「マモリさん！こっちです！」
「逃がすなぁ！！」
セーラとリーダー格の男が同時に叫ぶ。
黒子たちが一斉に襲いかかる。今度はかなりの人数だ。
「……ブラック・パルデ！」
マモリたちに接近する黒子たちが一斉に転んだ。その様子はまるでコントだ。
さらに黒子たちはズブズブと下に沈んでいく。ステージの上なのに、沼の上にいるように。
「な、なんだこれは！」
「動けない…！！」
「うわぁぁぁぁ！」
「よ、よくわからないけど、行こうモニア！」
「はい！」
マモリはモニアを連れてセーラのところまで全速力で駆けた。軽い短距離走だ。
無事セーラと合流し、さらに奥の通路へと向かう3人。スタッフ通路から外に出るつもりだろう。
「さっきの、もしかしてお前か？」
ジャンはとなりでぐるぐる巻きになっている男に聞いた。
「はっ！言っただろうが！俺様はモニアのファンなんだよ！！」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

走りながらセーラはマモリに礼を言った。
「マモリさん、モニアを助けてくれてありがとうございます。」
「そんな！もともとそのために来たんだし！危ない目に合わせちゃったんだから、謝るのはオレの方だよ。」
いつも以上に謙虚。
「いえ、私も、お礼を、言わせて下さい。マモリちゃんが、いたから、安心して、コンサートに集中できました。」
息を切らしながらモニアも礼を言った。
「う、うん……」
マモリの顔が赤くなる。思春期まっしぐらなマモリだった。
「もうすぐ行けば広いところに出ます。そこまで行けば安心です。」
「わかった！でもキャロット…どこ行ったんだろう……」

狭い通路をしばらく走ると、ホール内の大道具も置いてあるようなとても広い通路に出た。器材の搬入通路である。
幾つかの照明な照らされて、不自由はないものの、あまり明るいとは言えない通路だ。

「はぁ…はぁ…ここまで来たら……もう大丈夫ですね。」
モニアの体力はもう限界だった。さっきまで全力でコンサートを盛り上げていたのだから当然と言えば当然だ。
「ええ、モニア。もう大丈夫。マモリさんもありがとうございました。」
「いえ、どういたしまして。」
マモリもかなり疲弊してしまっている。

セーラはマモリに握手を求め、手を出した。律儀である。
マモリもそれに応えてセーラの手を握る。

「では、あなたはもう用済みです。」

「…え？」

ババババババ――――――

セーラの手から激しい電流が流れ出し、マモリの体に走る。

「…がぁ！！」

マモリのアイドル衣装は電流の熱でボロボロになり、とうのマモリ自身も気を失うような痛みを感じた。

マモリはその場でぺたんこ座りになって動けなくなった。全身が痺れてしまっているのだ。

それはセーラの雷魔法だったのだ。

「セ、セーラ！！マモリちゃんに何するんですか！！？」

モニアは突然のセーラの奇行に慌てる。

「見ての通りですよ、モニア。これ以上着いて来られても困るだけなんです。」

「ど…どういう意味ですか？」

「あなたにはこれから私と一緒にアンダーグラウンドに来てもらいます。そこで奴隷商人と落ち合うことになっていますので。」

「奴隷…？一体何の話をしているのですか！？」

「わかりませんか？あなたは奴隷として人買いに買われるのですよ。私は今まであなたの奴隷的価値を上げるために、マネージャーとしてプロデュースしてきたのですから。」

セーラの目はさっきまでとまるで別人で、使い飽きたおもちゃを見るように冷たくなっていた。

「そして先日、あなたがあのアフロディアの娘だと聞かされた時は驚きました。そして私は神に感謝しましたよ。なんと高価な恵みを

与えて下さったのかとね。」

「セーラ……嘘…でしょ…？」

モニアはセーラのその非情な目を初めて見た。全く知らなかった付き人の一面。だがその非情な眼光は、容赦なくモニアの心を突き刺す。

「それから奴隷商人との折り合いがやっとつき、本来なら昨日引き渡す手筈だったのです。」

「じゃあ！…昨日の人たちは……？」

「もちろん私が向かわせたのです。そのまま奴隷商人に渡すはずが、思わぬ邪魔が入りましたからね。しかもあなたは、よりにもよってその人にコンサートの護衛を頼むのですから…本当に困りましたよ。」

「さっきの黒い人たちも…」

「私が雇った者たちです。コンサートが終わってあのキャロットという女性が油断したところで、あなたを連行する計画だったんです。途中いくつかトラブルはありましたが…良かった。これで無事あなたを売り渡せそうです。」

セーラはモニアの手を強く握り、無理矢理引っ張る。

「セーラ……いや！やめて…！」

モニアはぼろぼろと涙を流していた。信じていた女性が信じられないことを言っているのだ。どうしていいのかわからない。さらに疲れた体では抵抗も虚しいものだった。

「そ…そんなこと…させな……」

マモリは飛びそうになる意識をギリギリで保ち、モニアに近づこうとした。当然助けるために。しかしその体はピクリとも動かない。

「おや、意識があったのですか？これは失敗でしたね。……そうだ、あなたも一緒に奴隷商人に売りましょう。マモリさんの容姿、能力

なら高値で売れますわ。」
「キャロット…は…？」
「察しの通り、眠って頂きましたよ。今ごろは舞台裏で黒焦げでしょう。あの時は急な轟音で慌てましたが、結果オーライでした。」
「（？…あの音はこの人の仕業じゃないのか…）」

「モニア。その子を引くのを手伝いなさい。」
「い、嫌です！！セーラ…目を覚まして……」
「目を覚ますも何も、これが私です。さあ！早くしないと、殺しますよ！！」
セーラの腕がバリバリと音を鳴らし、電光が走った。

ドスッ

「……え？」

ステージ裏の陰謀（後書き）

大晦日ですね。
ここまで読んで頂いた方、本当にありがとうございます。
来年も引き続き更新していくので、よろしくお願いします。
では、よいお年を！

シェイド来襲（前書き）

明けましておめでとうございます。
今年もがんばって更新していきますので、よろしくお願いします。

私の小説を読んでくれているみなさんが、良い年を過ごせますように。

シェイド来襲

「は～、やっと片付いたか…」
ジャンの前には真っ黒な山が出来ていた。暗くて解りづらいが、それは黒子たちだった。一番上にはあのリーダー格らしき男がのびている。
客席もさすがに人気がなくなっていた。

「…それにしても、あの野郎どこいったんだ!?」
ジャンの脇で縄がだらしなく下がっている。あの男がいなくなっていたのだ。

「もしかしたらマモリたちの方に行ったのか!?だったら急がねえと!」

ジャンはマモリたちが入っていった方へと進んだ。

「…ジャン!」

ステージの裏側で声がする。キャロットの声だ。
声の方を見ればさらに暗くて目立たないところにキャロットはいた。座り込み、胸に手を当てている。かなり辛そうだった。

「キャロットじゃねえか!なんでここに!?それにその体、どうしたんだよ!」

「こっちの、セリフよ…。」
「ジャンくんもここに来てたのね?でも助かったわ…。マモリちゃんが、危ないの!」

「わかってる。バンダナ野郎だな…」
「バンダナ？」
「な、何のこと？あたしはセーラが…」
「は？」
話が噛み合わない。
「ジャンくん、説明して。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜コンサートホール・機材搬入通路＞

それは人が槍のような物で貫かれる音だった。
セーラの胸には黒い槍が刺さっている。いや、槍ではない。それはつららを逆さにしたような、巨大な針のようなもので、さらにそれはセーラの足元から現れていた。

「…う、あ…あぁ……」
それはセーラの胸の中心を貫き、セーラが下に足をつけることさえ許さない。場所を見ればそれが心臓か肺をやられていることが、一目瞭然だった。
どうやらその黒い針は、セーラの影から出ているようだ。

「セーラ！！」
大量に流れる止まらない血を見て、モニアの顔が青ざめていく。

「……私…の……」
セーラはモニアに手を伸ばす。
が、その手はやがて力なく垂れ下がった。

「そんな……セーラァァ！！」

セーラはとうとう力尽き、ぴくりとも動かなくなる。
黒い針がセーラの影に吸い込まれるように消えていき、セーラの体はその場に横たえた。

マモリもその様子を見ていたが、言葉がでない。

そこに知らない声が聞こえてくる。

「いや～、危なかったぜ！もう少しでモニアちゃんが連れてかれちまうところだった。」

突然のことにマモリとモニアは驚いた。言葉とともに現れたのは確かいた。にジャンの懐で縛られていた男。
ガングロ長髪バンダナの男だった。

モニアはその誰かもわからない相手をキッと睨みつける。
「あなたがセーラを……！どうしてこんな、酷い…！」
「酷い！？は！！そいつはあんたを奴隷として売ろうとしたんだぜ！？それを俺様が助けてやったんだ！ここは感謝するところだろ！？」
バンダナの男はへらへらとした口調で答える。
「だからって…なにも、殺さなくても……」
モニアの声は上擦って涙声になっていた。

「う～ん……まあいいや！さ、モニアちゃん！助けてあげた王子様と、ご同行願いますか？ひゃはは！！」

「じ、冗談じゃありません！どうして、あなたような…」
「…おいおい、アイドルがファンにそんなこと言っていいのかよ！ファンは大切にしましょうって言われなかったか！？」
「あなたのような人…ファンの方々と一緒にしないでください！！」
「ええ～！！そうくるの！？……いい感じで助けて快く着いて来てもらおうと思ったんだけどな…。はぁ…しょうがないから無理矢理連れていくよ。」
男はセーラの亡骸を足蹴にし、モニアの腕を掴んだ。
「いや！やめて！！セーラ！！」
「もう死んでるっつーの。」
男がケラケラと笑う。

「や…やめろ…！」
マモリは痺れた体に鞭を打ち、必死に叫んだ。
「あぁ？なんだてめ！」
「お前、ジャンに捕まってたやつだろ？…なんでここに…なんでこんな酷いこと出来るんだ…？」
苦しそうな表情で話すマモリを、その男はまじまじと見た。

「……あ。そのピンクの髪。そうか、てめぇがマモリか！！」
「え！？…なんで、オレのこと…？」
「はは！オレはマリーティアの幹部、シェイドってんだ。俺らのことは知ってんだろ！？」
「マリーティアの幹部だって！？」
ここでマリーティアの人間に出くわすのは、マモリにとって想定外だった。

「マリーティアの幹部が、なんで、こんなことを！？」
「…なんでって…仕事だよ。俺様はこのスーパーアイドル、モニア・ハールを連れて来いって言われてたんだ。それで昨日からコンサー

トホールではってたんだけどよ、てめぇの仲間にいちゃもんつけられて捕まってたんだ。ったくあのキン肉マンが。ムカつくぜ！」

シェイドは顔の表情をゆがめ、憎たらしそうにいった。

「その捕まってたやつが…なんで！！ジャンはどうしたんだよ！！？」

「ん？あ～、このホールに入ってからいつでも抜け出せたんだけどよ。せっかくだからコンサート見てからでもいいかなって思って大人しくしてやってたんだ。そしたらなんかよくわからんやつらがモニアちゃんを攫おうとしてやがったからよ。抜け出して追いかけてきたってわけ！」

シェイドはまたペラペラと状況を説明してくれた。

「それよりマモリ！てめぇのことは大事に扱えって言われてんだ。」

シェイドは動けないマモリの顔を覗き込み、その鋭い目でマモリの目をじっと見た。

「な！？」

「はは！こうして見るとほんとに女みたいだな！ステージで踊ってる時からいいなって思ってたんだ。その辺の女じゃ全然敵わねぇ！モニアちゃんの次に可愛いかもしれねえ！！」

「う、ううるさい！」

「しかもまさかアイドルのまねごとまでするなんて…もうそういう趣味があるとしか思えねぇぜ！」

「それは！その……そ、それよりモニアを放せ！！」

「ひゃはは！そういう生意気なところも可愛いぜ！ついキスしたくなっちまうじゃねぇか！」

シェイドがマモリの顎をくいっと上げる。

「な、や…やめろ！！」
「だが、その相談には乗れねぇな！モニアは連れて行く。あと…マリーティアからはもしマモリを見つけたら動けなくしておけって言われてんだ。」
「動けなく？…どういうことだよ！？」
「あんまり俺らの回りうろちょろされると迷惑だってこと。ま、その様子だともう2度とまともに動けそうになさそうだけどな！どこかの誰かのおかげで…ひゃはははは！！」
「くぅぅ！！」
マモリはもう一度体を動かそうと頑張ってみた。しかし腕をわずかに動かすのがやっとだ。モニカに触れることさえできなかった。

「ま、アイドル2号ちゃんは大人しくしてなっ！」
シェイドはモニアを抱えて、来た方とは逆の道、つまり出口の方へ歩きだした。

「マモリちゃん！！」
「モニア！！」
2人は必死に叫ぶが、その距離はどんどん離れていく。

シェイドは知らなかった。マモリに回復魔法が使える仲間がいることを。もしも今キャロットが到着すれば回復魔法をかけてもらって助けることができる。
しかしキャロットがどこにいるのかはマモリにはわからなかったし、またマモリたちがこの通路を選んできたことをキャロットは知らないだろう。

打つ手がなかった。
マモリはモニアを結局守ることができなかった。…そう悔やんだ。

――守りたい――――

先日ヘパートスにそう宣言したばかりなのに。

「くそう！！」

マモリは腕を地面に叩きつけたいほど悔しい気持ちだった。しかしそれすらできないほど、マモリの体には痺れがあった。

ドガッ――――

またしても鈍い音がした。

すると前方。シェイドとモニアがいた方向からすごい勢いで何かが飛んでくる。

それはマモリの横を通り過ぎ、さらにはるか後方でドサっと着地したようだ。

その正体はシェイドだった。

「うがあっ！！痛てぇぇぇ！！誰だぁ！！？」

後ろでシェイドが起き上がって叫ぶ。痛いのが嫌いなわりに、あれだけ吹っ飛んで起き上がれるのだからかなり頑丈なほうだろう。

そしてマモリは前をじっと見た。もともと首が回らなくて前しか見えないが。

「おおい、マモリ！大丈夫じゃったか！？」

ヘパートスがモニアを肩に乗せて現れたのだった。

守るから

＜ステージ裏＞

キャロットはちょうど自分の体の回復を終えたところだった。

「あー、それでマモリがステージで踊ってたのか。てっきり俺に対するサプライズかと思ったぜ！」

ジャンは少し残念そうに言った。

「そんなわけないでしょ…」

「で、今マモリがついていった女は危ないやつなんだな……じゃあマモリも危ないじゃねぇか！！」

「うん、セーラの魔法自体はそんなに強くないけど、あたしみたいに油断してたら危ないかも…。ごめんね、あたしがもっと早く気付いていたら…」

キャロットは申し訳なさそうに言う。

「それより私は、ジャンくんの言うマリーティアの男が気になるわ…突然消えたのよね？」

「ああ、昨日闘った時も思ったんだけど、体に触れなかったり……なんか気持ち悪いやつだったぜ？」

「それは…たぶん……」

ガメイラは少し考えているようだった。

「とにかくこの人たちを倒してくれたっていうなら、セーラさんとは関係ないんでしょうけど…それはそれで目的がわからない。」

「……そう言えばモニアちゃんがどうとか言ってたな。コンサートが始まったらずっとそっちに集中しててよ。早く一緒に帰りてぇと

か…」
「モニアを狙ってるのね！だったら急ぎましょう！！」
「そうね。」

「……でも、マモリたちどっちにいったのかしら？」
ステージ裏から繋がっている道はいくつも枝分かれしている。マモリたちがそのどれを選んでいったのかわからなかった。
「ジャン、わからないの？」
「なんで俺に聞くんだよ！？…くそ、こんなところならマモリの匂いをんもっと嗅いでおけばよかった…」
「それはやめて。」
「あたしの匂いならもっと嗅いでいいわよ！」
「……」

「とにかく、今は私がマモリちゃんの魔力をたどってみるわ…時間かかるかもしれないけど…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜機材搬入通路＞

通路に響き渡るヘパートスの声。
その勇ましさ、豪快さは、マモリの砕かれそうだった心を持ち直させた。

「ヘパートスさん！！どうしてここに！！？」
マモリは相変わらず動けなかったが、僅かに体を震わせてその喜びを表現している。
ヘパートスが自分に代わってモニアを助け出してくれたのだから。
しかしなぜこんな場所にいるのかは、甚だ疑問だった。

「どうしてもこうしても、わしもコンサートに行くと言うたではないか。ガハハハハ！！」
相変わらず豪快な笑いだった。
「あの、ヘパートスおじさま…ありがとうございます。助かりました。」
「ふむ、偶然だったが、危ないところだったな。モニア！」
「え、知り合いなの？」
「ん、昨日そう言わんかったか？」
マモリは昨日の会話を思い出す。が、とてもそんなことは言っていなかったし、わからなかった
「（ただの熱心なファンだと思ってたよ）」
「しかしマモリ、ボロボロではないか。不甲斐ないのう。昨日わしはお主にモニアを任せたはずじゃぞ？」
「……」
マモリは何て言っていいかわからなかった。弁解の余地もない。
「……嘆くな！そんな暇はない！」
ヘパートスはまず、横たわっているセーラの亡骸を丁重に通路の端に寄せた。
「…かわいそうに…」
「ヘパートスおじさま…セーラは、セーラは私のことを……その…それで！」
モニアの声は震えていた。
「よい。辛かったじゃろう…。今は休みなさい。」
ヘパートスは太い腕でモニアをやさしく介抱する。
「ヘパートス…おじさま……」

そのままモニアは、緊張の糸が切れたように眠ってしまった。長時間のコンサートの後、襲撃にあい、信頼していた人に裏切られ、その人が死に、新たな敵に狙われる。これだけのことがいっぺんに起きたのだ。モニアは既に自分の許容範囲を軽く超えていた。

起き上ったシェイドはマモリを無視してくてくとヘパートスの方に歩いていった。

「てめ、何もんかは知らねえけどいてぇじゃねえか！！」

「……」

「…いいからそこどけ！俺はモニアちゃんを連れて帰らねえといけねえんだよ！どいたら許してやるから！」

「（許すんだ…）」

マモリがそんなことを思っていると、またシェイドは轟音とともに宙に舞った。今度はカエルのように地面に叩きつけられ、反応がない。

「さてマモリ、お主は言うたな。守るために武器をとると！」

「う……うん…。でも…」

「ならば守ってみせいっ！！」

それは獅子の咆哮のようで、王のような威厳を感じる声だった。

「そんなナリでも、お主は男じゃろうが！ならば自分の信念を！誇りを！意地を！貫かんか！！お主は英雄ゼウの息子！そして新たな英雄になる男じゃ！少女一人守れんでどうするか！！」

ヘパートスの言葉がマモリに響く。自分のふがいなさを一番悔やんでいたのはマモリ自身なのだから。

だがマモリは体が動かないのだ。とても戦える状態ではない。

キャロットと合流するまで、ヘパートスに任せるしかなかった。

しかし、ヘパートスはそんなこと許すはずがなかった。

ヘパートスはマモリの目の前に剣を突き刺す。
「イ、イージス！！」
「お主のために鍛え直した。守護の剣イージス！その防御はもちろん、自己回復もできるはずじゃ！！…お主が守るんじゃ！その男を倒して！！」

後ろではシェイドがマモリの背後に近づいてくる。
「てめぇらぁ！！人のことぶっ飛ばした上に無視して勝ってにドラマひろげやがって…なめるのもいい加減にしやがれ！！」
ヘパートスに負けない勢いを感じる声だ。完全に頭にきている。

しかしマモリにシェイドに注意を向けることなく、目の前のイージスに集中した。
「（すごい…見た目はそんなに変わってないのに、前よりも輝いてるように見える。刃こぼれ一つない、まるで新品だ。なのに、今まで以上に使いやすそうな、オレのためにあるような、そんな感じがする。）」
マモリは痺れる腕を無理矢理伸ばし、イージスの柄を掴む。

その動きに気付いたシェイド。
「てめぇは大人しくしてろって言ってんだろうが！！」
シェイドがマモリに襲いかかる。

「……ふぅ、フルアーマー・イージス！！」

マモリの体が真っ白に輝きだす。その光りにシェイドは耐えられず、目をそらした。

光りの中から現れたマモリは、確かにイージスの装備を身に纏っ

ている。スク水のようなトップスに淡い水色のミニスカート。しかし甲冑部分は以前のイージスとは違っていた。さらに凛々しく、神々しいものになっている。

まさしく守護の女神のようだった。

マモリは、さらに剣に魔力を集中させる。するとマモリの痺れが引き、電流で焼けてしまった皮膚も元通りになった。

イージスの自己回復だ。

「これで戦える！マリーティアの幹部！！モニアは絶対に渡さない！！」

「マモリ、これもじゃ！」

ヘパートスは抱えていた品を全てマモリの前に出した。

それは昨日ヘパートスの工房でマモリが選んだ武器たちだ。どれも昨日とは比べられないほど、綺麗に磨きあげられている。

「オレの新しい武器たち…握ってみるとわかる！どれもすごくしっくりくる！」

「来るぞ。急げ！」

マモリは一本一本を自分の魔空間に入れていく。どれも本当に自分のためにあつらえたような感じがした。魔空間に入れると、その武器のことが全てわかるようだった。

「ありがとう、ヘパートスさん！オレ、もう油断しないよ！絶対モニアを守るから！！」

「うむ！」

そう言ってヘパートスは端で眠っているモニアとセーラの亡骸をかかえて、元来た道を戻っていった。

「あ、おい！！待ちやがれ！！」

シェイドが慌てて追いかけようと走り出す。
しかしマモリはイージスを突き付けてそれを邪魔した。
「モニアは守る！ここは通さないからな！！」

守るから（後書き）

さて、正月三が日もそろそろ終わりですね。私もそろそろ仕事がはじまりそうです。ですが頑張って2日置きの更新をキープしていきたいと思っているので、引き続き読んでやってください。

話の方は新しい武器を手に入れて、イージスもパワーアップです。そのデザインもそのうちアップします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1219y/

フルアーマー・クロスドレス

2012年1月4日11時22分発行